神掛ゆんのビビビ！

墨風　澄春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神掛ゆんのビビビ！

【Ｎコード】
Ｎ５８３５Ｋ

【作者名】
墨風　澄春

【あらすじ】
「上でも下でも、飛び出した奴は弾かれる」
真堂守哉はそう思って生きていた。
その例に漏れず、彼も普通ではなくて決して褒められたものではない生活を送っていた。
そんなある日、守哉はある少女に出会う。
それは初めて見る、とても変わった少女で――……。

プロローグ

プロローグ　「ある少年の日常」

「金銭的なトラブルならアイコムが解決！　ただしそれに見合うお気持ちはいただきます！　どうぞ、アイコムをご利用ください！」

夏の日差しがさんさんと照りつける東京都内の駅前大通り。そこで世間的評価を落としかねないキャッチフレーズを叫びながら、若い女性が金融会社のビラを配っている。

「アイコムなら、反社会的な計画を目論む方でも資金的に全力でサポートさせていただきま……ん？」

ふいに、奇妙なものを見つけた彼女は、最後まで言ってしまえば本気で危なかった問題発言を中断し、何人かの野次馬が集中しているそれに意識を傾けた。

車線の反対側で、追いかけっこをしている人達がいる。いや、それ自体に奇異な点はないのだが、その風貌があまりにも場違いだった。

まず、逃げている方は高校生ぐらいに見える一人の少年だ。脱色した髪に少し焼けた肌、Ｔシャツに七分のジーンズ……右手に握りしめている数枚のお札を除けば、こっちはどこにでもいるような普通の少年だ。問題は、彼を追いかけている三人の大人達にある。

「おどりゃああっ！　までやクソガキぃあッ！」

「うっせ！　いいじゃんか一万ぐらい！　シマの貧しい一般人に恵んでくれてもさあ！」

颯爽と逃げ回る少年をものすごい迫力で追い回す彼らは、車道側から坊主（抗争の傷跡ですぜと言わんばかりの古傷あり）に派手な和柄カッターシャツのゴツい男、次に金髪リーゼントにタンクトップの狐顔の大男、最後は刺青だらけの上半身を真夏の太陽にさらす剃りこみ男と、どう見てもこんな真っ昼間に活動しない人達の姿がそこにはあった。しかも最後の人は、……あれ？　さすがに摸擬刀だよね？　右手で振り回してるそれ。

「ヤクザ騙したことを後悔させてやるらあっ！」

「うわーん話が噛み合わなーい！　つか本当に万札一枚を二枚にできるなら、今頃俺は金に囲まれた生活を送ってるわ！　現実にはなあ、そんなに上手い話ねえんだっつの！」

大声で一方的な彼らの会話を聞く限り、どうやらあの少年が怖い人達から一万円札を騙し取ったらしい。チャラそうな見た目の割に、なかなか度胸のある少年だ。さすがに拳を握って立ち向かう程の無謀少年ではなかったようだが。

「はあ、はっ！　くそっ！」

怖い人達が息を切らして止まり、その場で前に屈む。強そうではあっても、所詮は不健康な生活を送っている夜型人間の彼らだ。現役高校生の体力には勝てない。

「はふっ、は、ははっ！　やっと諦めやがったか」

追い手が止まったことに気づいた少年は、立ち止まって彼らを見る。そして白い歯を剥き出した、どこか可愛げのある凶暴な笑みを浮かべて、こう言い放った。

「ひとーつ！　アドバーイスをしてやるぜ！　もう二度と騙されないように、小学校で世の中の常識を学んできた方が良いぜいっ！」

ブチィッ！　少年のその言葉が、一度は消えかけた怖い人達の怒りの炎を再び滾らせた。

馬鹿だ、とバイトのお姉さんは肩を落とす。あの子、悪気はなさそうに見えるから、多分素直な気持ちで言ったのだと思う。けっこう人の気持ちには鈍感な子なのかもしれない。

「ふはははっ！　義務教育をきっちり受けて来い……ってアレ？　なに？　なんすか、え？　なんか最初より元気になってないですかあ！？」

「うおりゃああっ！　ナメんなやあガキぃ！！」

と、一層迫力の増して怖くなった大人三人に襲い掛かるように追い回されながら、少年は脱兎のごとく走り出し、ついには女性の視界から消えていってしまった。

都心郊外の工場が立ち並ぶ一角に、労働従業者の寮だった廃屋がある。今では行くあてのない人間や、チンピラの巣窟になっているその一室に、ここに住むには若すぎるように見える少年がいた。

前の非正規住居人がボロボロにしてしまったキッチンは外に出してしまい、広々となった1DKの部屋。その壁際には何時、誰に盗まれても差し支えないぐらいの備品が転がっていて、配線をいじって電気を回させた蛍光灯が照らす部屋の中心には、どこかで拾ってきたであろう場に合わない派手なピンクのテーブルが、ドシン、と置かれている。少年はその上で胡坐を掻いて、手にあるお札を数えていた。

「んーと、ひいふう、みい、よ……」

茶色と金色、どちらか見分けがつかない色のツンツンした髪は襟足だけ伸ばされていて、何か中途半端な髪型だった。顔立ちは整っていて、その吊り上がった目尻と八重歯が、どこか彼を挑発的に見せている。色あせたTシャツ、ダメージの入ったジーンズはシワが多くて、洗濯はしていても長い間干されていないようだ。

「とお……っと。うし、きっちりぱっちり一万円だぜ」

そうやって彼曰く「二か月分の生活費。嗚呼、ありがたや」を数え終わった少年の名は真堂守哉（しんどうかみや）。ほぼホームレスみたいな生活を送っているが、れっきとした高校生である。この部屋に鞄や制服が見当たらないのは、駅のコインロッカーに詰め込んであるからだ。つまり、彼の学校の身支度は駅で行われる。

「んっとー。まずは腹減ったな！　うん、久々にファミレスでも行

くか！」

守哉はお札を握り締めて、勢いよくテーブルの上に立ち上がる。今の彼は「超」がつくほどの上機嫌だ。テーブルの上に立ったせいで天井に頭をぶつけてもちっとも痛くない。

なんたって久々の収入だ。あのヤクザたちがあんな簡単に騙されてくれるとは思わなかった。よし、今度からは彼らを狙おう。

守哉はテーブルから降りて、お札を乱暴にポケットにねじ込みながら住処を後にした。連れなんていない。別の部屋に住んでいるのは、大抵がシャブ中か犯罪者だからだ。ここには頭のイカれたやつが集まっている。そして皆が皆、一人暮らし。

守哉もその例外ではない。しかも本当に大真面目に「一人」暮らしだ。

家族はいる。だが、仕送りしてくれるような家族はいない。それどころか、家族らしいことをしてくれる家族さえ。さらには、彼らがどこで何をしているか、いや、生きているのかさえも分からない。そして守哉は彼らを家族だとは思っていない。三ヶ月前、彼らに捨てられてからはずっと。

すっかり暗くなった夜道を、リズム感溢れるステップで守哉は進む。自給自足の生活は前向きでないといけない。

なら、そんな彼がなぜ学校に通っていられるか。いや、家族がいなくても学校には行ける（一応、守哉に書類上の保護者はいる）のだが、問題なのは彼の通う高校の学費の高さだ。都内の高学費トップスリーに入る私立高校、茜音学園。そこに一文無しの守哉が通学

できるのは、彼がそこで「特例」扱いされているお陰だ。

そういうことで、守哉に学校の面での心配はない。あとは生活面の金銭的な事情だが、それについては今回のように頭の悪い輩相手に詐欺を働くことで金を稼いでいる。ちなみに、この金稼ぎの方法には守哉自身が決めた二つのルールがあり、一つは、「一生懸命働いて稼いだ金は取らないこと」、つまり、チンピラや不良以外には手を出さない、ということである。もう一つは、「大金は騙し取らないこと」。守哉がやっていることは生活費の収集であり、それ以上の欲求を満たすための詐欺行為ではない。相手がどんなに人間として腐っていても、その人から何もかも奪って良い理由にはならない。騙し取る金は最小限に、これが基本である。守哉はこの二つの条件はどんなことがあっても守る。だからオヤジ狩りや団体を狙った詐欺はしない。

「ふっふーん、デミグラスペッパーハンバーグ洋食セット価格六百円が俺を呼んでいる～」

こんなめちゃくちゃな生活でも、守哉は十分満足している。いや、満足というよりは妥協に近いかもしれない。自分のような人間には、こういう社会のゴミみたいな生活がお似合いだと思っているからだ。

第一章　天才児と問題児と奮闘記（前編）　その１

1

「……行き倒れというんだっけ。こーゆーのを」

「ふにゃ。行き倒れじゃなあいよう……。おなかが空いて道端に倒れちゃったんだよう」

「文字通りっすね」

今、守哉（かみや）はファミリーレストランの入り口の前にいる。辺りはすっかり真っ暗で、彼としては空腹極まりないことだし、さっさと店に入ってお気に入りのメニューを注文したいところなのだが……。

ぐぎゅるるる。

「ふにゅう。おなか虫が鳴いているよ～」

その入り口の扉を封鎖している物体があるので、入るに入られず今に至る。

その物体はどうやら人間らしい。どうやら、というのはそれが茶色の布を被せられた丸い物体にしか見えないからだ。だが、ぐでー、と布の外に伸ばされた細長い二本の腕を見ると、あっこれ人間じゃーん、と認識できる。腕しか見えないが、声色から考えても、小柄で、女の子だと推測できる。

「あんさ、そこどいてくんない？」

守哉は彼女の前にしゃがみこむ。するとその少女はいきなり、がばっ！　と頭を上げ、守哉の顔を見た。

「っ……！」

血色の悪い、痩せぎすな感じの顔だろう、と守哉は失礼ながら思っていた。だが、彼の鼻先数センチにあるそれは予想を大幅に反して、とても可愛い顔立ちをしていた。

摘みたての桃のような色をした瞳に、長いまつげのぱちくりと開いた双眸、うすいピンク色が艶を持つ唇、健康的で思わず触りたくなる肌。髪型はショートで、色鮮やかな紅の髪一本一本がしなやかに流れているのには目が奪われてしまいそうだ。

意識をしなくても、守哉は思わず息を呑んでしまう。目の前の少女は、顔のパーツ一つ一つがまるで宝石のように輝いている。それこそ、守哉自身が彼女と見つめ合っていることが、ひどく場違いなように思えてしまうほどに。それぐらいに誰もが見惚れてしまうような、美しさと呼べる可愛さがあった。

そんな人から話しかけられるなど、守哉がまともに対応できなくても誰も責めはしない。

「あのね。おなか虫が鳴いているの」

「え、あ、うん」

「でね。おなか虫はヤギちゃんが泣き止ませなきゃいけないって言

ってたの」

「や、ヤギ？」

「だからお願いがあるの！」

少女は身を乗り出して守哉に近寄り、瞳を輝かせて彼を見た。被さっていた布が飛んでいく。彼女は白いローブにベージュの短いプリーツスカートを着ていた。

もうその姿は天使同然だ。ちなみにこの時、守哉の心拍数は人体の限界をぶち抜いて、判断力なんて皆無に等しくなっていたのだが、眼前の少女はそんなこと全く気づかない。

「あ、わ、わわ、ぬね、なの、なっ、ナニ？」

必死に口から発した単語はカタコトだった。

「ごはんをごちそうさましていいかな！　いいよね！」

「えあ、う、お、おうぁ！」

最後で声が裏返ってしまった。とってもかっこ悪かった。

「あ、ありがとう！　ほんとにありがとうね！」

少女は満天の笑みを浮かべた。まさに天使の笑顔である。守哉は自分が何を聞いて、どう返事したのかは覚えてはいないが、この無垢な笑顔を見て、一生このままでも生きていけるかも、と本気で考えていたりした。

数十分後に、一生あのままで生きていればよかった、と後悔することは見ず知らず。

「んん～！　あまあい！　このパフェおいしいよ！」

ゆんと名乗る目の前の少女は、それはそれは幸せそうな表情を浮かべた。見るものを癒し、油断していたら昇天させられる程の可愛らしさである。

「……」

「むぐむぐ……。～っ！　きーん、てきた！」

彼女は次にパフェの下の方のかき氷を口に運び、心地よい頭痛を楽しんだ。そのしぐさは、天使のいたずらのように、見るものを惑わす。

「……あんさ」

「はむ？　なに？　かみやも食べたい？」

守哉の問いに、ゆんはその潤いきった唇からスプーンを引き抜き、それにアイスを乗せ、無邪気な顔で「あーんしてー」と差し出した。そんなことをされれば、並の男は卒倒する。

「いや、ハンバーグ食べたからいい」

守哉は手をひらひらさせてそれを拒んだ。む〜、と声を唸らせて、スプーンはしぶしぶ戻っていく。

守哉は右手に握った伝票を見る。注文の欄にあるのはデミグラスペッパーハンバーグ洋食セット一つとイチゴパフェ一つ、それだけだ。これだけ見ると、普通のファミレスでの食事に思える。だが、彼が見ているのはそこではない。伝票の一番下、合計額の欄だ。

『計　九千円』

最初、桁を数え間違えたかと思った。次に、小数点があるのかと探した。なかった。

デミグラスペッパーハンバーグ洋食セットとイチゴパフェ、九千円するらしい。

守哉は目の前にあるパフェを見る。普通サイズの、どこにでもありそうなパフェだ。それが八千四百円。残金、千円。一万円が、千円。二ヶ月分の生活費が、一週間分のそれに。

「いやあぁぁあ！！」

守哉は頭を抱え込んで、テーブルにひれ伏した。

「えっ、ど、どうしたの！？　おなか痛いの！？」

ゆんはびっくりしてスプーンを落としてしまう。からん、と乾いた音が聞こえる。守哉はハッ、と取り乱していたことに気づき、冷静そうに見繕う。

「あ、いや。なんでもないんだ。気にせず食えよ」

「そ、そうなの？　その割には、汗かいてるけど……」

「あー、熱帯夜だから」

「クーラー効いてるよ？」

「ハンバーグ食ったから」

「十分前に食べ終わったよね？」

「……むむ」

「かみや、ほんとに大丈夫？　おなか痛いならトイレに行けばいいんだよ？」

スプーンを拾ったゆんは心配そうな顔で守哉の顔を覗き込む。言えない。お前のせいで明日からの生活が危ういんだよ、とか絶対に言えない。

それにしても、なぜ普通のパフェがこんなに高いのか。よく見ると高級そうな素材を使っているように見えなくもなくなくな……いのか？　もしかしたら何かの間違いなのかもしれない、と守哉はメ

ニューを手に取った。

『不況パフェ　八千四百円

世の中の不景気に対する対策として、当店が行ったことは、逆に値上げしまくろう！　という逆転の発想！　……ということで、チョコレートからカキ氷の氷、トッピングまで、超がつくほどの高級素材を使用！　さあ、あなたもこれを食べて、不況を乗り越えよう！』

「逆に沈み込みまくるわあっ！！」

守哉はメニューをテーブルに叩きつけた。ゆんが怯えたように体をビクッ！　と震わす。

「か、みや？　もしかして、おこってるの？」

「え！？　あー、いや！　ぜんぜんぜん怒ってないぜ！！」

守哉は冷や汗の伝う頬を無理矢理に吊り上げて笑顔を作る。本当は今すぐにでも彼女を怒鳴り散らしたいところなのだが、こんな震える小動物のようなつぶらな瞳に見つめられて、誰が彼女を傷つけようと思う？　鬼でもきっと自分を殴りたくなってくる。

「そ、そう？　ほんとに？」

「お、おうっ！　心配すんなっ」

びしっ！　と親指を突きたて、守哉は笑顔を崩さない。そんな彼をしばらく見つめていたゆんは、くすくす、と笑い出した。

「あははっ。かみやって何か可笑しいね。面白い」

「――……かはっ」

砦は崩された。ゆんの笑顔、という名の核ミサイルは、守哉城の城壁に直撃。そこから爆風を撒き散らし、あらゆるものを薙ぎ倒していく。被害は深刻。どうやら『最心部』にまで到達した模様。資金的にも、その修理は不可能と思わ……ん？　資金……？　異常事態発生。異常事態発生。『ラストハート』が自動的に修復を開始、ニュークリア・エンジェルの放射能に犯された部分が、何事も無かったかのように元通りに。

「ぶはあっ！　もう少しでやられるところだったぜ！」

「えっ。何に？」

紙一重の死闘を勝手に繰り広げた守哉は、現実では何もしていないくせに汗だくになっていた。しかも爆弾をぶち込んだ本人は、何事も無いようにパフェを頬張っている。

守哉は「何でもっ」と彼女と目を合わせないように窓から景色を覗く。

「ふうん。……むむ、かみやー」

「おう、何だ」

横顔で答える。

「食べ終わったから、おかわりしていい？　あのう、店員さ」

「ダメ！　ゼッタイダメ！」

守哉はどっかのポスターのキャッチフレーズを叫びながら、ゆんの口を押さえた。

「む～！　むあみや～！」

「よし、もうお腹いっぱいだよな？　おなか虫は鳴き止んだよな？　セレブなひとときを味わえたよな！？　満足だよな！？」

「むが～！」

守哉は質問の嵐をゆんに浴びせるが、口を塞がれているので彼女は何も言えない。だが守哉にはそんなこと関係ない。

「よし、帰ろう！　こんなクーラー効いてる場所にずっといたら夏バテしちゃうからな！」

ゆんの口を押さえたまま、守哉は伝票を持ってレジに向かう。冗談じゃない。おかわりなんてされたら一週間分の生活費どころか、負の世界まで突っ込んでしまう。

片手で少女を確保しながら、恨めしい目つきで店員を睨みながら伝票と一万円札をレジに叩きつける。「誘拐犯」、という言葉が恐ろしいほど似合う守哉君だった。

「ぷはっ！　こほこほっ」

「あ、すまん。そんなに強く押さえてたっけ？」

「けほっ。レジでおつり、もらったときから息できなかったよう」

そう言われれば、手持ちの金が十分の一になった時は狂ってしまいそうだった。なんか店員も可哀相な顔で千円札を渡してきたし。きっと『不況パフェ』は守哉たちが初めて注文したのだろう。彼は万人が承知で絶対に踏まない、脅威の地雷を踏んでしまったのだ。

守哉は自分の掌を見る。そこにあるのは一週間分の生活費。だが、ここまでくると生活費ではなく、食費である。目をつけていたあの洋服も諦めなければいけない。

はあ、とため息をついて、守哉はその場にしゃがみこむ。運が悪かった、それだけで片付けるには、ダメージが大きすぎる。

「かみや？　どしたの？」

ゆんが守哉の隣にしゃがみこむ。

「は、はは。いや、いいんだ。不幸なんて慣れてるから」

守哉がゆんを見ながらそう言うと、彼女は「ん？」と不思議そうに彼を見た。

「むむ、かみやの言いたいことは良く分からないけど……。とりあ

えず、ごちそうさまでした！　とってもおいしかった！」

ゆんは大げさに音を立てて手を合わせた。守哉が腕だけを高く上げて「おう～」と手をふらふらさせると、彼女は彼の手を握って、立ち上がった。

「ねっ。かみや」

「な、なんだよ」

その綺麗な目に見つめられて、守哉は赤面してしまう。

「何かお礼がしたいの！　ゆんにできることない？」

「ははっ。いいよいいよ」

守哉は苦笑いを浮かべた。こんな空腹で道端に倒れてしまうほどお金も持っていないような少女に恩返しさせようなど、彼はこれっぽっちも考えていない。

「それに、久しぶりに誰かとメシ食えたしな。楽しかったよ」

「え？　かみや、家族いないの？　一人暮らし？」

ゆんの言葉に、一瞬守哉の頬が引きつった。

「……お、おう。一人暮らしだぜ」

家族のことには、触れない。

と、そういう守哉の事情など全く知らないゆんは、一人テンションを上げていく。

「へえ、すごいね！　ゆん、絶対一人暮らしなんてできないよ。ヤギちゃんとかがいっぱいゆんのお世話してくれてるから」

「そ、そうか」

なんだっけ、こういう意味不明なことを言う人を何て言うんだっけ。

守哉は空を見上げた。星が見えない。曇っているわけではないが。視線を泳がすと、ビルのディスプレイに時計が表示されていた。

「もう十時か……」

「えっ！　十時！？」

ゆんは今まで握っていた手を離し、あわあわと焦りだした。

「ヤギちゃんに怒られちゃう！　早く帰らなきゃ……」

ゆんはちらっ、と守哉を見た。どうやら、何かしらお礼をしないと気が済まないらしい。

「もういいって。ほら、早く帰らないといけないんだろ？」

守哉は笑顔で彼女を見送ろうとした。ゆんも諦めがついたらしく、とぼとぼと守哉に背を向けて歩き出した。数歩行ったところで、ゆんは振り返って守哉を見た。周りに通行人が多く、今すぐにでも彼

女を見失ってしまいそうだ。

「かみやーっ！　また、会えるよねー！？」

人ごみから手を上げて、ゆんが叫ぶ。守哉も同じように叫び返す。

「おう！　またな！」

「うん！　今度会ったとき、お礼するからーっ！」

性格に合わない、あまりの律儀さに守哉は思わず笑ってしまう。

「楽しみにしてるからなー！」

変事は返ってこなかった。もう手も見えなくなっていた。

そして守哉も、きびすを返して歩き出した。

守哉は郊外の道を歩いていた。昼間は通勤する自動車が良く走る道だが、この時間になるとそれが信じられなくなるほどに人気が無くなる。辺りは静まり返り、吹き抜ける風が寂しさを連れてくる。

守哉は空を見る。星が煌いていた。

今日、守哉は久しぶりに「楽しい」という感情を味わった。もう忘れかけていた感情だ。

「楽しみ」も作った。こちらはもっと久しい。

どちらも、彼の胸に温かいものを運んできてくれる。これをなんと呼んだか。「幸せ」だ。長いこと忘れていた。とても心地の良い温度だ。あの少女には感謝しなければいけない。

『ゆん』住所も年齢も、苗字さえも知らない少女。彼女が守哉を楽しませ、未来の希望まで作ってくれた。彼女は「お礼がしたい」と言っていたが、それは守哉の台詞である。

その時、足元でちりん、という音がした。視点を空から地面に移すと、百円玉が転がっていた。守哉のものではない。どうやら地面に落ちていたものを守哉が蹴ったらしい。

「おっ。ラッキー」

守哉はそれを拾って、ポケットに入れる。今日一日で多大な出費をしてしまったが、考えてみると安いものだ。値段が付けられないほどの価値を持つものはたくさんある。彼は九千円でそれを買うことができたのだ。とてもお得な買い物だった、と今になって気づく。

例え所持金が千円前後だとしても、彼は生きていける。否、生きていないと果たせない約束をしたから、絶対に生きていかなければいけない。洋服なんて要らない。

そんなことを考えつつ、守哉は鼻歌を口ずさみながら帰路を進むのだった。

第一章　天才児と問題児と奮闘記（前編）　その２

2

茜音学園は全国的にも有名な進学校である。だが、同時にスポーツ校でもあるため、勉強だけに特化した人間が集う場所でもない。「文武両道」、全国の高等学校の理想に一番近い高校こそが、この茜音学園なのだ。さらに進学校ということもあり、だれもかれもが風紀や規則を乱すことのない、まさに鏡となるべき教育の場である。

だが、ある一人の生徒だけが、その校風を完璧に無視した風貌で、そこに通っていた。

一年「特例」クラス、真堂守哉。その男が、校門から靴箱までの大通りの真ん中を、さもつまらなそうな顔で歩いていた。

茜音学園で彼の名前を知らない人間はいない。全国どころかアメリカやヨーロッパの有名校からも推薦を受け、「学校生活を送る上で必要な、あらゆる費用を全て免除」という条件付きでこの学園に入学してきた天才児。

はだけたシャツ、地面につくくらいに下がったズボン、金髪なのか茶髪なのか区別がつかない脱色した髪、ちらりと見えるピアス、耳にはまったイヤホンは音漏れが激しい。

真面目に規則を守り、風紀を乱さない、そんな茜音学園でただ一人だけの「特例」、というか不良。それが、茜音学園での守哉のポジションだ。

前から三年生の集団がお喋りしながら歩いてくる。避けようかな、と守哉は思うが、彼に気づいた三年生が守哉より早く避けて行った。

これは当たり前のことなのである。この学園で守哉は「特例」扱い。彼が学園内で起こしたトラブルは、どんな落ち度があっても、彼が裁かれることはない。もはや守哉の立場は教師以上の場所にある。だから生徒達は極力、彼に関わらないように努力している。

（……そこまで特別扱いしなくていいんだけどなー。学費払わなくて良いだけで十分なのに……、っつか今日、暑いぜ）

そう。守哉はわざとこんなだらしない格好をしているわけではないのだ。シャツがはだけているのは暑いからだし、ズボンが下がっているのはベルトがちぎれたけど新しいのを買うお金がないからだし、ピアスはこの前美容室で落ちていたのを拾って店員に渡したら知らない間に装着してただし（本人気づいていない）、音漏れはラジオ壊れて最大音量しか出なくなっているだけなのである。

「あー、さっさとクーラーの効いた教室に辿り着きたいぜ」

守哉は歩調を速めて、靴箱でかかとのつぶれた上履きを取り出す。だが、彼はすぐにそれを履かず、つま先の部分を持って数回振った。

すると、上履きの中から十数個の画鋲が出てきた。

守哉は地面に散らばるそれをしばらく眺めた後、何事も無かったかのように上履きを履いてクーラーを目指した。彼にとってはこれが、日常なのだ。

繰り返すが、守哉は茜音学園に「特例」として扱われている。学費の免除、学園内での身体の保護、それら全ての特典は、守哉が「ある分野」で世界のトップに立てる可能性がある天才児だからこそのもの。だが、学園の中にはその「ひいき」が気に入らない者が大勢いる。守哉が知る限りでも、学園の半分以上は自分の敵だ。しかも、攻撃をするときは、自分が特定できないように間接的かつ陰湿に仕掛けてくる。なるほど。筋が通っている。目の前から殴りかかれば、彼らだけが停学になるのだから。

つまんな、とあくびをする守哉の後ろで、くすくす笑う声がした。見ると、二年生の女子が三人固まって彼を見ていた。

「やだあ。睨まれてるよ？」

「あれ入れたの、あたしたちじゃないのにぃ」

「なんで入ってるって分かったのかなあ？　天才ですから、みたいなあ？　きゃはは」

普通に見ているだけなのだが、目つきの悪い守哉は目を見開くでもしないと、誰にでもガンを飛ばしている。なかなか無意識に危ない子だ。

守哉はそれらを無視して廊下を歩く。その暑さでうだった瞳に、悲しみとか、憎しみとか怒りとかの感情はない。眠そうだ。

守哉は教室の前に辿り着くと、扉の上に黒板消しがないことを確認し、ついでに何が飛んできても避けられるように心の準備をしてから、彼はその扉を開け放った。

「……うげえっ」

教室は守哉の望みどおり、クーラーがばっちり効いていた。ただし、暖房だった。

嫌がらせとしては、あまりにピンポイントを突きすぎている。ここまで守哉の弱い部分を知るものは学園にはいないはずだ。と言うより、一介の生徒はこの「特例」クラスに足を踏み入れることすら許されない。生徒数一人、というこの教室に入ることができるのは、守哉か、教師ぐらいしかいない。つまり……――。

「おいっ！　脳木（なずき）、てめえ！　冷え性だからって夏に暖房入れるなこんちくしょうがっ！」

守哉は教壇の上に転がっているリモコンを奪い取るように掴むと、クーラーの設定を『暖房』から『冷房』にした。温度は十五度にした。

天井に取り付けられている機械から、極寒の雪山のような風が吐き出され、教室の室温を瞬く間に低下させる。

「……。むう……。……？　……！？　ぎゃあああ！　凍え死ぬう〜っ！」

守哉は教室の隅に置いてあるベッドを見る。ある人間によって保健室から強引に担ぎ出されて、この教室に配置されたそれは、自分の上で暴れまわる物体を必死に支えていた。

ベッドの上に乗っているその物体はがばあっ！　と顔を上げると、病み上がりの患者のような瞳で守哉を睨んだ。

「……真堂〜。お前の仕業かあ〜！」

「真夏の教室に冷房入れるのは当たり前のことですぜ、脳木先生」

「うるさーい。例え世界の常識がそうだとしても、この教室ではあたしがルールなのだ！」

ベッドの上で腕をぶんぶん振り回しながら暴れる小さな女教師の名は、脳木遙（はるか）。一年「特例」クラスの担任であり、守哉のお目付け役及び研究者でもある。入学させたまではいいが、授業が必要ない守哉を学園にどう縛りつけようかと悩んだ理事会は、結論、守哉を研究したいという研究者を雇って、「授業」を「研究」という時間に摩り替えることとなった。脳木はその中の選ばれた研究者なのだ。

「うお〜い。黙ってないで早く暖房に切り替えないか真堂〜」

とは言っても、初めて会ったときから、守哉の前での彼女はいつもこんなんである。本当に自分を研究する気があるのか、それで将来いいのかと彼女の身を心配する守哉だった。

そして彼女にはもう一つ大きな特徴がある。それは年を五、六歳はごまかせるんじゃないかと思うほどの可愛い童顔と身長の低さだ。腰まである茶髪も、またそれを引き立てている。脳木遙、生きてきた年数二十二年、だが見た目は高校生。

「あたしをガキんちょ扱いするなあ！」

「そうは言っても、高校生にしか見えな……ううか今さらりと高校生を馬鹿にしたな！？」

「ふん、本当の青春っていうのは、大学生から始まるのだ」

えへん、とベッドの上で女子高生平均の胸を張る脳木。そこに大人としての威厳とか風格が全く感じられないのは守哉だけだろうか。

まあ、よい。守哉は内で勝利の笑みを浮かべていた。彼は教壇の横にある研究道具の入った机から温度計を取り出し、目盛りを計る。そして彼はその笑顔を現実のものとした。

「し、真堂？　どうしたんだ～？」

脳木は彼の表情を伺って、不安を抱えたような声を上げた。

「現在の気温、――十五度」

「……――ッ！」

脳木は、一瞬にして理解した。

そう、全てはこのためだったのか。脳木の会話に乗ってやったのも、ボケて彼女の気をその気にさせたことも、全ては、このための時間稼ぎでしかなかったのだ。

脳木は、気づけば自分の周りにあった冷気に当てられて、ベッドに崩れ落ちた。

「真堂……、お、まえ……」

脳木に呼ばれて、守哉は彼女の顔を見ると、凶暴そうな白い歯を

見せて、笑った。まるでこの教室に溢れる冷気すらも、彼の味方になっているように脳木には思えた。

負けた。いや、恐らく彼がこの教室に入ってきてから、脳木の敗北は決定していた。彼女に成す術は無かったのだ。……ああ、これが、世界が注目した希代の天才児。真堂守哉……、なんて、恐ろしい子――。

脳木は、最後の抵抗として、近くにあった『断熱性抜群！　冷え性おさらば毛布クン！』を手に取ると、

「だから寒い言ってんだろうが、真堂っ！！」

それを思いっきり守哉に投げつけた。シリアスな空気は、一瞬にして崩された。

「あだっ！」

アホみたいな声を上げながら、予想外のスピードを身に纏って飛んできたそれにどうすることもできなかった守哉は、あっさり倒れた。

「……が、は」

視界を奪われ、バランスを崩し倒れていく中で、守哉は考えていた。

自分の策は完璧だった。文字通り穴など無かった。だが、それだけだったのだ。彼の作った壁は、小石を投げれば崩れてしまうほどに、あまりに薄っぺらかったのだ。盲点だった。そして、その死角

を正確に突いてきた脳木教官、彼女こそが真の英雄ビッグ・ボ……。

「熱うっ！　なんだこの毛布！　断熱性抜群じゃなくて、これ自体が熱持ってんじゃん！」

守哉は思考をストップし、自分の上に乗っかっている毛布を引き剥がそうとする。だが、こういうときに限ってなかなか思い通りにいかないのが、人生の面白いところである。

「ふう……。上手いこと話を脱線させようとして……、頭の良さはこういうところで乱用するモンじゃないんだぞ～、真堂～」

「うげえ、説教かよ童顔教師。いいじゃんいいじゃん、減るもんじゃないんだし」

やっとのことで引き剥がした毛布を壁に放り投げた守哉は、胡坐を掻いて唇を尖らせた。

童顔教師、という単語に少々拳を震わせながらも、話を逸らされないように脳木は怒りを自前の冷え性で冷まさせた。いろんな意味ですごい冷え性である。

「だからな～、『たとえ君の頭の良さがＩＱ１６０超だとしても、それはまだ何色にも染まっていない才能なのだ。だからそれを使って悪事を働いたりすると、君のそれがどんどん黒に染まっていき、汚れていってしまうのだよ。エジソン然りアインシュタイン然り、君のその頭脳は人類の更なる発展のために磨くべきなのだよ』……なのだぞ～！」

「長ッ！　そして口調違う！　それ学長の受け売りだろ！」

そう、これこそが守哉が「特例」扱いされている理由。幼少期に一度読んだ本の内容を暗記したり、高度な数式を理解したりしたことから、親が知能テストを受けさせた。その時に叩き出した数値が判定越え。その後、大規模な施設で脳を検査した結果、常人なら五パーセントも使えていない脳の全機能を、彼はその何倍もの量を使用していることが判明。守哉は定期的に受けた今までの知能テストでも、機械にその頭脳を数値化させることを許していない。突っ込み役の凡人では決してないのだ。

「ぐさっ。あ、あたしだってえらい事言えるの！　……だぞ」

「自信なくなっていってる！　しかもぐさっ。って言ったよな！？　図星だった時の擬音語だよなそれ！」

「ぐさっ！　と、とにかく！　真堂は悪いことをしちゃいけないのだ！　『頭良いからって調子乗るな若造がッ！』って学長は言いたかったのだ！」

「自分からバラした！　しかもそんな内容じゃ無かったよ！？」

守哉は脳木のめちゃくちゃさに突っ込みの嵐である。そこにＩＱ１６０超の天才児の面影はない。やっぱりただの突っ込み役だった。

ちなみに彼はその頭脳を使ってヤクザにさえも詐欺を働くほど悪に染まっているのだが、脳木にそんなこと言うと、彼女はほぼ確実に説教する前に失神してしまうので言えない。

「ぐぐ……。先生の理解力まで馬鹿にするか真堂～。頭良いからって調子に乗るな～！」

「学長じゃなくてあんたの本音じゃん！」

「ぐさっ。この屁理屈男があ……ん？　なあ真堂」

「あ？　何すか？　ちなみに屁理屈言ってるのはそっちっすよ」

「ぐさっ。いや、今日はノリが良いな～、って。何か良いことでもあったか～？」

「……！」

脳木の言う通り、学園内での守哉はこんなキャラではない。誰とも接しようとしない、学園で唯一仲の良い脳木にでさえも素っ気無い彼が、今日は惜しみなく喜怒哀楽をさらけ出している。

「確か、に……。なんでだろう」

一週間前の晩御飯も鮮明に記憶されている脳から、その原因を探る。だが、嬉しいことに、その疑いがある記憶はたった一つしかない。

「……？　なんだ真堂？　気持ち悪いぐらいににやにやして。……ドラッグ？」

「良いことがドラッグになってる！　俺のイメージ危なっ！」

「違うのか～。じゃあ殺人か～？」

「あんた本当は俺に悪いことさせたいんじゃねえの！？」

「ぐさっ」

「怖えええ！！」

絶望している守哉を脇目に、脳木はベッドからふわり、と飛び降りる。そして床に落ちているクーラーのリモコンを拾い、設定を「暖房」にした。二人用にしては広すぎる教室を、ジャングルの中で扇風機をつけた時のような熱風が包み込む。

「ああ……。悟りを開くというのはこういう事だったのですね。栄西、道元」

「ぎゃああ！　おまっ、馬鹿か！　そんなに寒いなら座禅組むより焼却炉に投身してろ！　命の保障はしねえけど！」

守哉は脳木からリモコンを取り上げて、クーラーを冷房に切り替える。熱風にさらされた後という事もあり、その涼風は守哉にこの上ない心地良さを運んできた。

「おお、阿弥陀仏を唱えなくてもリモコン一つで極楽浄土に行けるんだな。法然よ。世の中は便利になったぜ」

「そんな友の無念を晴らした主人公みたいな顔しないで！？　見てて寒い！」

脳木は守哉に跳びかかり、見事な腕ひしぎ十字固めを極めた。腱を思いっきり伸ばされた守哉は激痛に耐えられなくなり、ついにその手からリモコンを離した。

「ぐへへ……。リモコ〜ン、こっちにおいでえ〜」

脳木は守哉の手を離し、変質者みたいな台詞をやはり変質者みたいな声で吐き出しながら、床に転がったリモコンに変質者みたいにゆっくりと近づいていく。

倒れたままの守哉は、その姿を見て、そして頭脳を働かせて、この先の展開を予想する。

（まずい、このままではイタチの追いかけっこオチだ……！　かくなる上は……！）

守哉は心の中である決心をした。それはまるで、多くの犠牲者を出し続ける戦争を終わらせるために、自分の身を捨てる覚悟で立ち上がった英雄の背中に似ていた。

この作戦を成功させれば、最悪の結末は免れる。だが、その代償は大きい。守哉は、それでもこの戦争を終わらせようと思ったのだ。

「う……おおぉおぉぉおあえ！！」

守哉は声を上げて走り出す。最後、声が裏返ってしまって格好悪かったけど気にしない。それぐらいに彼の想いは最高にカッコ良かった。

ゾンビのような姿勢でリモコンに迫る脳木（二十二歳独身）を追い抜き、守哉はついにリモコンの前に辿り着いた。移動距離、二メートル。

守哉は息を呑んだ。彼にとって、この存在はとても大切だった。

いや、今でもその気持ちは変わらない。一期一会、守哉はこのリモコンと過ごした日々を忘れない。

「し～んど～う～。な～にをする気だ～」

背後から、快楽を求めるあまり理性を捨て、化け物と化してしまった脳木が守哉に迫る。時間はもうない。やつがここに到着する前に、成す事をやり終えねばならない。

守哉は溢れる涙を堪えながら、リモコンを手に取った。そしてクーラーの電源を切る。

「お～ま～え～。ぬあ～にをお～」

「脳木先生。片方が良くてもう片方が悪いなんて、そんなの、ダメじゃないすか。どうせなら、二人で地獄を分け合いましょうよ」

守哉は悲哀に満ちた笑みを浮かべた。その口調は、彼ならぬ彼だった。

彼は息を吸い込み、吐き出すと同時に手のリモコンを勢いよく窓目掛け投げ飛ばした。

快音と共にガラスを突き割ったそれは、威力を落とさないまま隣の棟まで飛んでいった。

その様子を、唖然と眺める童顔女教師と、涙ぐみながら見送る天才男子生徒。

教室は再び、でも暖房を入れた時ほどではない熱気に包まれ、守

哉の頬に汗を伝わせる。

戦争は、終わった。

割れたガラスの隙間から、太陽の光が差し込む。床に散らばった――放課後、担当の三年生が掃除するのだろうガラスの破片にその陽光が反射する光景は、まさに芸術だった。

守哉は風を入れようと窓を開けていく。しかし、前にそびえ立つ二学年棟のおかげで、風がその体を吹き抜けていくことは無かった。

次第に温まってゆく教室。それでいい、と守哉は寂しく笑った。むしろ、こうなることを望んでいた。この温度が地獄なのは、自分だけじゃない。

「あ、これぐらいでも快適だ～」

「ええ！？　俺の苦労は！？　明日から冷房ナシで生きてかなきゃいけない俺の立場は！？」

やっぱり、守哉の考えは、穴は無くても薄っぺらだった。

第一章　天才児と問題児と奮闘記（前編）　その3

3

「あー……。えらい目に遭ったぜ」

守哉は人ごみの中を歩いていた。一日中暑苦しい教室で、脳木お得意脳医学のウンチクを頭に叩き込まれた彼は、心身共にボロボロである。学校が終わって、さっさと家に帰って、空腹で目覚めるまで爆睡していたい守哉だが、生憎今日の朝食で食材が切れてしまっていた事を思い出した。なので、今、彼は涼しげな郊外の田舎道ではなく、アスファルトに日光反射する暑苦しい人ごみの中にいるのである。せめてと駅で私服に着替えてきたおかげで、汗でびっしょりの制服よりはマシになったが、正直あまり変わらない。

「昨日で大幅に出費しちまったから、あんまり美味いモンは買えねーな……」

誰かから金を騙し取ろう、と考えたが、やめた。今の彼にそこまでする力は残ってない。

「あー、当分肉食えねーのかよ。地獄だー！」

周りを気にせずに、心の悲鳴を守哉は叫ぶ。無理もない。男子高校生にとって、タンパク質の不足は、新型インフルエンザの大流行ぐらい一大事なのだから。

ふと、守哉の後ろを歩いている女子高生の話が耳に入った。

「ねえ知ってる？　この先の広場で、ちょームズいクイズ大会あってるらしいよ」

「まぢー？　じゃあ、あたしら全然無理じゃん。つかやる意味なくない？」

「んー。でも、賞金が五十万円らしいよ」

「まぢぃ！？　じゃあ、あっくんに出てもらおうかなー。大学生だから物知りだし？」

「あーはいはい。彼氏の自慢話なんて聞きたくなーい」

彼女たちはお喋りを続けながら、守哉を追い越していった。

守哉はその場に立ち尽くしていた。頬には冷や汗が伝い、瞳孔はぱっくり開いている。

クイズ大会……だと？　賞金五十万……だと？　不況パフェ約六十杯分だと……？

しかもクイズ大会。それは頭脳と頭脳を競い合う、知識だけが頼れる世界……まさに、自分のレイヤー！！

守哉の手は震えていた。なんだ、まだ俺のツキは終わったわけじゃないじゃねーか。笑みを作るその口からは犬歯が光り、さっきまで疲れと暑さでうだっていた瞳は、虫網片手にトンボを追いかける

少年のように希望に満ちていた。

「は、はは……ふはははーっ！　待ってろ、待ってろ賞金五十万ーッ！」

目当ては賞金。その化け物じみた頭脳に、あらゆる知識を詰め込んだ守哉にとって超難問クイズなど、あってないようなものだ。そこに守哉が走り出したとして、それは守哉が落ちている大金を拾いにいくようなものと思って問題はない。

守哉は、ものすんごい勢いで、広場に落ちている大金を取りに行った。

第一章　天才児と問題児と奮闘記（前編）　その４

4

「?番だあッ！」

ピンポンピンポーン！

『せェーッいィかい！　１９０６年にカミッロ・ゴルジと共にノーベル生理学・医学賞を受賞したのは?番「サンティアゴ・ラモン・イ・カハール」でしたー！　ちなみにエントリーネーム「五十万は俺のもの！」さん、彼が唱えた学説は……?』

「んなもん『ニューロン説』に決まってるぜっ」

『さすがーッ！「五十万は俺のもの」さんは高校生のようですが、脳科学の方の大学を目指しているのかな?』

「えっ！?　あ、ああ！　そうっすね！」

守哉は今、『超難問！　東大生もさじを投げる二十択クイズ大会！』のステージの上に立っている。やはりその難しさと賞金の高額さもあってか、出場者も多く（ほとんど予選落ち）、また有名なテレビ局が主催しているだけあって、観客も多い。セットも豪華だ。

かなり順調だ。ついさっきの準決勝にて、教養のありそうなツルっぱげ大学教授を打ち負かしたところである。相手は舌打ちをし、

恨めしそうに守哉を睨みながら退場していく。守哉はその背中にあかんべーをしながら、心の中で胸を撫で下ろした。

正直、危なかった。さっきは脳科学についての問題だったのだが、昨日までの守哉なら正解できなかった。今日、学校で脳木に叩き込まれた知識が、ここで役に立ったのだ。

「童顔教師にはあとで何かお礼しなきゃな……。たまたまだったけど」

そう呟いて、守哉は歓声に手を振りながら、控え室を目指す。後ろでもう一つの準決勝が始まっていたが、気に留めずに階段を降りた。相手がどんなやつだろうと関係ない。どうせ勝つのだから、顔を覚える必要もない。

守哉はステージ裏のコンテナの中で、椅子に座って邪魔者のいない冷房を満喫していた。

「ああ、やっぱ夏はこうあるべきだよな。あの童顔教師の感覚が異常なだけだよな～」

つい先ほどまで感謝していた担任の教師に、今度は悪口を垂れる生徒一人。

にしても、次で最後だ。このクイズ、「東大生もさじを投げる」とはよく言ったものだ。確かに難しい。いや、難しいというよりは

「あらゆる分野を深く知り尽くす」ことが求められる。そして二十択。これは運などに頼れない、本当の意味での頭脳と頭脳の戦いだ。

きっと次の相手は準決勝のやつ以上にゴツいんだろうな、と相手の人相を予想する守哉。

「まさか、政治家とか出てくるんじゃねえかなー。いや、大臣とか……？」

想像をめぐらす守哉の背中に突然、わっ、という歓声が響いた。あまりにいきなりだったので、びっくりした守哉は椅子ごと前に倒れてしまった。

「あでっ！　な、何だあ？」

その時、ドアが開けられ、大会スタッフが入ってきた。その顔はなぜか興奮気味である。

「『五十万は俺のもの！』さん！　決勝戦が始まります、さ、急いで！」

守哉はいそいそと動くスタッフに引っ張られるようにして、コンテナから出た。

「あ、あのっ、さっきの歓声は……！？」

「アレですか！？　すごいですよ！『五十万は俺のもの！』さんも後に分かりますよ！」

言っている意味がいまいち分からなかった。という事はアレか？

さっきの歓声を起こさせたやつが決勝戦の相手なのだろうか？

「その通りです！　さあ、どうぞ！」

鼻息荒いスタッフに背中を押されて、まだ状況に思考が追いつかない守哉はふらふらと舞台へと姿を現した。真夏の太陽が照らすステージは、実際の気温より幾度か高く感じられるほど熱気に包まれている。

ステージ上には、派手な衣装の司会者、五十万と書かれた大きな板を持つお姉さん二人そして、スイッチのついた二つの台。そして、台の後ろに自信満々に立つ対戦相手。

「な……」

観客に手を振っていて、ちょうど守哉に背を向けて立っているその相手は、なんと女子高生だった。赤と白を基調にしたセーラー服、観客席からは下着が見えてしまうのではないかと心配させる紺色のミニスカート。確か蝉羽学園の制服だったと思う。そして、ファッションなのか、ピンクのキャップを被っていた。手には小さなポーチが提げられている。

まさか、子供だとは思わなかった。東大生でもさじを投げるほどの難問を潜り抜けることができるのは、せめて有名大学を卒業した知識人だと思っていたのに、今、守哉の目の前にいる少女は、大学生でもなければ、頭が良さそうにも見えない。

『さあさあさあ！「五十万は俺のもの！」さんも到着したことだし、このまま決勝戦へとうつっちゃうかーっい！』

うおお！　と歓声がさらに大きくなった。

守哉の眼前の少女は、やっと彼の存在に気づいたらしく、ローファのつま先を軸にしてくるっ、と可愛らしく振り向いた。

露になった彼女の顔は、その首を傾げるしぐさが恐ろしく似合うほど可愛らしかった。吸い込まれそうなほど透き通った桃色の双眸、瞳とはまた違った味がある色の唇、肌理の細かい白い肌。それらで作り上げられた「儚い」というイメージを一変させる紅の短髪、それを際立たせるピンクのキャップ。彼女はまさに非の打ち所のない容姿を持っていた。

脳木遙、という美人、と呼ぶよりは別の魅力を持つ童顔女教師とのコミュニケーションを通し、ちょっとそこらの可愛い女の子には耐性のある守哉でさえも、これには勝てない。初めてこんなレベルの高い子に見つめられたなら、彼でも恋に落ちてしまう。

だが、残念なことに、守哉は彼女に初めて見つめられたわけではなかった。

「あっ。かみやだ」

「お前……！　ゆん！？　なんでこんなとこに！？」

予想外の出来事に、守哉だけでなく、会場も凍りつく。

「むっ。それはこっちのセリフ、ってやつだよ？　なんでかみやがこんな頭良い人ばっかり集まるとこにいるの？」

遠回しに「お前、見るからに頭悪そうに見えんだけど？」と言われている。

「いやいやいや！　場違いなのはお前だよ！　お前見た目も中身も馬鹿じゃん！」

「うっ。ひどいかみやっ！　なにもそこまで言わなくてもいいじゃあんっ！」

ゆんが叫ぶと、会場全体からも守哉目掛けてブーイングが鳴った。もはや、観客は全員ゆんの虜になっている。さすがに言い過ぎたかな、と守哉も謝ろうとするが……。

「むう、さすがにさっきのは酷かったよな。ご」

「もう怒った！　守哉がそんな人だったなんて思わなかったよう！　こうなったら、かみやを『ごーほーてき』にめったためたにしちゃうんだから！　司会のしかちゃん！」

『はっ、はひ！』

いきなりゆんの勢いに巻き込まれて、肩をビクッと震わせた司会もといしかちゃんは、「な、なんでしょう……？」となぜか腰を低くして答えた。

「問題を始めて！　ゆんがかみやをけちょんけちょんにしちゃうからっ！」

『ははいっ！　……ええと、決勝戦も今まで同様、二十択クイズです。えと、何度でも答えることが可能で、先に正解した方が勝者ですっ』

テンパりながらもカンペを読んで説明をする司会者の後ろでは、対戦者同士のけなし合い（口ゲンカ）が始まっていた。

「かちーん。人が下手に出てりゃ好き勝手言ってくれんじゃねーか……！」

「ふんだっ。かみやだってゆんにバカって言ったもん。おあいこだもん」

「おあいこじゃねーよ。俺は一回しか言ってないのにお前は二回も言ったじゃんか。そ・れ・も、すごいお馬鹿さんの使うような擬音語でぇ」

「むむむ～！　すっごいイライラするっ！　もうかみやなんてだいっ嫌い！　かみやなんてくっくさんにズタズタにされちゃえ！」

「はん。だから……」

『……あの～？　もうそろそろ始めてもよろしいでしょうか……？』

「「早く始め」」「ろよ！」「てよ！」

『はいぃ！　そうさせていただきますッ！』

なかなか息の合った二人の言葉と迫力に、やっぱ何も言わなきゃ

よかった、と思いながら、しかちゃんは問題を読み始めた。会場が静まり返る。

いける、と守哉は確信した。ゆんがどうやってここまで上り詰めてきたのかは知らないが、こんなにある意味語彙が豊かな女子高生だ。絶対に負けるわけがない。というか負けたら自分の中にある、何か大切なものが大崩壊してしまう気がする。

『問題です。こ』

「?ばんだあ！」

「えええ！?」

スイッチを押したゆんの姿は、思わず尊敬してしまうぐらいに意味不明な自信に満ち溢れていた。守哉は唖然として、彼女を眺めていたが、はっと気づいた。

（――……！　なるほど、こいつ、勘か。俺に勝てないと分かって、運に身を委ねたのか……。へっ。しかも?番かよっ。テキトーにするなら、それはそれでもうちょいひねった所を取れよな。……残念だがゆん、この勝負、ヤケになった方が負）

『正解ッ！！』

ピンポンピンポーン！

「やったあ！」

どっ、と歓声が沸き起こった。誰もが彼女の勝利を望んでいたかのような称賛の規模である。その中で守哉だけが「えええええ！？」と絶叫していた。

「『こ』！？　問題『こ』しか読まれてないよ！？『こ』で全てが分かったの！？　千里眼！？」

「ふふふ。かみや～。見苦しいよ～？」

崩れ落ちる守哉の前に、ゆんが立ちはだかった。

「ゆん……。お前、何をした……？」

守哉は頭を上げて、彼女を見た。その時に彼女のスカートの中身が見えていたのだが、今の守哉にはそんなこと枝葉同然だった。

ゆんはその質問を待ってましたのごとく、しかちゃんのマイクを取り上げると、後にある偉人の名言として未来の教科書に載るセリフ（本人談）を笑顔で叫んだ。

「どんなに難しい問題にも、必ず答えはあるんだよ！　だからそれ

を勘で当てれば良いわけ！　答えなんて電波が運んできてくれたりするものだよ！」

びしい！　と親指を突き立てるゆん。

守哉の視界が、揺れた。あまりに意味不明で、あまりに突拍子のない……そう、思い出したぞ。こういうやつのことを、電波系っていうんだ。深夜のラジオで言ってた。

「こ、いつ……。なんてラッキー野郎だ」

歓声がワールドカップ並みに熱した会場で、一人の少年の偉大な頭脳は、生まれて始めてパンクした。

第一章　天才児と問題児と奮闘記（後編）　その１

5

夕暮れ時の空が、どこか悲哀を含んだ切なさを訴えかけてくる。

守哉は先ほどまで歓声に包まれていたステージの上に立って、その茜色を眺めていた。観客はもうほとんど帰って、広場には大会のセットだけがぽつんと立っている。

彼の手に五十万は握られていない。彼は決勝戦で負けてしまった。賞金が取れなかったことより悲しいのは、自分の頭脳が、たった一人の女子高生の運に負けてしまったことだ。

今までその頭の良さだけが自分の存在理由だった彼にとって、それはまるで自分の存在を全否定されたように感じられる。

その空しさは、その相手が相手だけに、より一層強さを増していた。

当の本人は手にある分厚い封筒を彼に見せつけながら、満足そうに帰っていった。

悔しさと、悲しさと空しさがぐちゃぐちゃに混ざりあって彼の頭をいっぱいにしていく。

いてもたってもいられなくなり、守哉は逃げ出すようにその場から去った。

彼は酷いぐらいに疲れきっていたが、それでもおなかは空いていたのである。もやし一パック五円の激安スーパーへと彼は歩みを進めた。

そしてその途中だった。彼女と出会ってしまったのは。

「あ……かみや」

「ゆ、ゆん……」

最高にバッドタイミングだった。ついさっき自分のトラウマを作った人間が、道端でばったりひょっこり出現したのだ。

帽子を外した彼女は未だに五十万の封筒をポーチに入れないで、さも大事そうに握り締めていた。だが、守哉はそれよりも彼女の表情に目を奪われていた。いや、奪われていた、というよりは伺っていた、のニュアンスに近い。

しばらく、ぽかん、としていたゆんの顔に、笑顔の花が一斉に開いたのである。

（――っ、やばい！　この雰囲気は、バカにされる！）

「あっ、あのね、かみや、あの時はあんなひどいこと言ってご」

「な、なな何だよ！　まだあんだけじゃバカにし足りないってか！？」

「あ、え、え？　か、かみ――」

「ああそうだよ！　お前の言うとおりですよーだ！　俺はどうしようもないバカちんですよー！　あなた様のだいっ嫌いな真堂守哉君ですよっ！」

守哉は目を硬く閉じて、思いっきり叫ぶ。

そうとう罵倒したのに、一向にその仕返しの叫び声は耳に響いてこない。不思議に思って、守哉はゆっくり目を開けてみた。

その目に映ったのは、限りなく純粋なクリスタルのような滴を頬に伝わせる、ゆんの真っ赤になった顔だった。

「――……え？　ゆん？」

「ふえ、えええ。ひっく」

守哉の思考が状況に追いつく前に、ゆんは本格的に泣き出してしまった。

「ひっ、うっ。ふわあ……うっ」

「え、ええ！？　ちょ、ゆんサン？　あの、何で泣いておらっしゃらられるのでせうか？」

「女の子を泣かせてしまった」という場面に生まれて始めて遭遇し

た守哉は、ゆんにどういう対応をしていいのかも分からず、気が動転して母国語までも狂ってしまっている。

あらやだ、という通りすがりのおばさんの声や、えー女の子泣かすとか最低、という女子の話し声が守哉の耳に入ってくる。

「お、おい。な、何で泣いてんだよ、ゆん」

守哉が緊張した声を上げながら、ゆんに手を伸ばす。

その手は、弾かれた。

大きな感情の揺れによって、ゆんの中に眠っていた超能力が目覚めた。とかいうファンタジーな展開ではない。ただ単純に、彼女に手を払われたのだ。

物理的な威力はなくとも、守哉に大きな衝撃が走った。

「な――……っ」

彼の手は、空気でも掴むように、その場で静止している。

興奮気味だったゆんは、はっ、と我に返ると、とても申し訳なさそうな顔をして守哉を見た。その表情は、まるでとんでもないことをしてしまったかのように、焦燥していた。

「あ、か。か、みや、ご、ごめん。あの、その……」

焦りからか不安からか、上手く言葉が出てこないようだ。

守哉は、しばらく払われた手をぽかんと見ていたが、しだいに様々な感情が胸の内にこみ上げてきた。そして気づいた時には、叫んでいた。

「何だよ！　そこまですることないじゃんか！」

ビクッ、とゆんの肩が震える。

「ああ、もういいよ！　本当に俺が馬鹿だったよ、自分でも思う！　ああくそ！　お前なんかに会いたいとか思わければよかった！」

え、とゆんは目を見開いて、守哉を見た。そこにあったのは他に何もない、驚きという純粋な感情だけ。

だが、それすらも守哉は考えようともしなかった。彼はきびすを返し、自分に冷たい視線をぶつける通行人を強引にかき分けて、家を目指す。もう何も考えたくない。早く寝たい。晩飯なんて抜きで、ずっと寝ていたい。嫌だ、こんな気持ち。

そう考えていた時だった。後ろからゆんの叫び声が聞こえたのは。

「きゃあっ！　何するの！」

明らかに自分に向けられたものではなかった。なら、なぜ――と、そこで考えるのをやめた。もう彼女と自分は関係ない。そう割り切った。

「いたーい……。……あれ、バッグがない！？」

「へっ！　ぽけ～、っとしてっからだよ！　この五十万はいただく

ぜ！」

守哉は、ばっ、と振り返った。彼の三メートル先では、ゆんが地面にへたりこんで何かを叫んでいた。そして彼女のさらに向こう、そこには彼女が持っているはずのポーチを指でくるくる回す青年の姿があった。容姿はそこらのチンピラである。なるほど、ゆんからポーチを引ったくったのか。あれだけの規模の大会だから、ゆんの顔が知れ渡っていてもおかしくない。

「……馬鹿かあいつ。なに引ったくられてんだよ」

でも確か彼女は、五十万の封筒は手に持っていたはずである。なら大丈夫だろ、と守哉は再び歩き出そうとする。

「返してー！　そのバックには大事なものが入ってるの！」

五十万以上に大切なものがあるか。それだけあれば、なんでも買えるじゃないか。

（……待てよ）

守哉は振り向いて、もう一度ゆんを見た。案の定、彼女の手にも周りにも、分厚い封筒の姿は見当たらない。

（馬鹿だ……。ポーチに入れてやがる……！）

いつ入れたのか分からないが、どうやら本当に五十万円を引ったくられてしまったようである。しかも、今まで彼女の味方をしていた通行人たちはただの野次馬と化し、犯人を追いかける者は一人もいない。

自分でも非道いと思ったが、自業自得だ。大金をふらふらと持ち歩くこと自体が、普通じゃないのだ。普通じゃないやつは、だいたい損をする。これは彼の経験上、言えることである。

してやられる方が悪い。そう思いながらも、守哉は心の隅で別のことを考えていた。

（……。あいつ、見るからに頭悪いのに、どうしてあんなクイズ大会に出場しようとしたんだろう。つまり、そこまで無理をしてでもお金が必要だったから……？）

守哉に彼女の事情など分からない。だが、空腹で道端に倒れたり、他人に飯をおごってもらうような人間が、豊かな生活を送っているか？　もしかしたら、守哉と同様、とても貧しい生活をしているのではないか？

守哉の脳内で二つの考えが、感情が葛藤する。

記憶しているだけの大量の反対語が限りなく、それこそ走馬灯のように駆け巡る。その間にも、引ったくり犯はどんどん遠ざかっていく。

「それがないと、生きていけないの！　お願い！　返してぇ！」

その言葉が決め手だった。

「……ちっ！」

守哉は逃げ去っていく引ったくり犯目掛けて走り出した。

「かみや！」

ゆんを通り過ぎた時、彼女に呼ばれた彼は、勢いを落とさないまま叫んだ。

「すぐに取り返してやる！　そこ、動くなよ！」

その言葉は引ったくり犯にも聞こえたようで、相手はさらにスピードを上げた。それを見て、はっ、と守哉は凶暴な笑みを浮かべた。

さあ、互いの意地とプライドを賭けた追いかけっこを始めようじゃないか！

だが、守哉は体育系ではない。つまり、足は速くとも、体力がないのだ。

「ぜえっ、ぶはっ！　も、もう無理……！」

守哉は、あっさりと息切れした。

意地とプライドを賭けた追いかけっこは、二分弱で幕を閉じた。

今、彼が停止した場所は見たことのない路地だ。なるほど、地の利も相手にあったというわけだ。まだ視界に捕らえてはいるが、今すぐにでも相手がそこから消えても不思議ではない。

だが、それでも守哉は敵を見失わない。

「はあ、はふー。へへっ、こんなんで俺を撒けると思うなよ……っ

！」

守哉は目を瞑る。すると、真っ暗な視界にこの辺りの詳細な地図が浮かび上がった。彼の頭脳で一番優れているのは記憶力である。彼はその膨大な容量の脳内に都内全域の地図を焼き付けているのだ。つまり、彼は見たことのない道に出ても、決して迷うことはない。

ここからは、頭脳の勝負だ。

彼は現在地と思われる場所から、その先の道、そしてさらにその先の地図を割り出す。そして、犯人が逃げている道、そしてこれから通るであろう道、さらに先、犯人の心理、……自分の体力、それら全てを考えながら、一つの答えを導き出した。

「……うし。先回りできるな」

守哉は大きく息を吸うと、一気にその場所へと向かった。

6

引ったくり犯は路地から大きい通りに出た。ここはこの時間帯、通行人が異様に増える。

あの少女から金が入っているのであろうポーチを引ったくった後、何かチャラチャラした野郎が追いかけてきたが、大丈夫だと思う。ここらへんはガキの頃からの馴染みの道だから、誰よりも早くスムーズに進める自信がある。あのチャラ男は今頃、道に迷ってオロオロしていることだろう。あとはこの人ごみに紛れて、完全にサヨナラさせてもらう。

「ははっ。この金があれば、当分は遊んで暮らせるぜ」

お約束のセリフを吐きながら、引ったくり犯がポーチの中身を確認しようとしたその時、

「うらあっ！　某有名小説でもないんだから、思い切って皮剥ぎなんかしちゃだめでしょーがッ！」

後ろから叫び声が聞こえたと思ったら、突然体に激痛が走った。崩れ落ちる直前、自分の体に突きつけられたそれが目に入った。

「……て、めっ。スタンガンとかせけえぞ……！」

後ろに立つ少年は手に持った護身用の武器をバチバチさせながら、にたあ、と悪魔のような笑みを浮かべていた。

「ふっ。頭良いやつは頭使って、より安全に、より楽に相手を倒すんだよ」

なかなか威厳のないセリフだった。

「んじゃ、ポーチは回収させてもらう。通報はしないでやるから、有難く思うんだぜ」

少年は地面に転がったポーチを拾い、引ったくり犯の目の前でこれ見よがしにぷらぷらさせた。すっごいイラついた。

「覚えてろよ……！」

意識が朦朧とする中、引ったくり犯は恨めしそうに声を上げた。

「ああ？　覚えててはやるけど、それ以上はないよ？」

少年はポーチを肩に掛けながら、軽い口調で言った。

「……はっ。言うじゃねーか」

引ったくり犯は続けた。

「お前、普通の人間じゃねーだろ？」

「あ？」

引ったくり犯は、くくく、と声を漏らした。

「分かんだよ。お前は普通じゃない」

「だったら何だっつーんだ」

気持ち悪いやつだな、と少年は思っているだろう。

「こんなことして、お前に得はねえぞ。あの女だって、お前なんか信じてない。なんたって、俺らみたいなやつは所詮、世間のつまはじき者なんだよ」

「……」

「上でも下でも、飛び出たヤツははじき出される……。普通、っつうレールからはみ出した俺らに、普通の幸せなんて……ぐへっ！」

二回目の電気ショックに、引ったくり犯の意識が完全に吹っ飛んだ。

「んなもん百も承知。次、あいつに何かしたら、これで心臓マッサージしてやっからな」

7

あの少年が走り去って行って、もう二十分ほど経つ。

ゆんは未だに通りにへたりこんだままだった。自分を心配して手を差し伸べてくれる人が幾らかいたが、無視した。手を引いて起こしてくれるのは、ただ一人だと思ったからだ。

それまで、自分はずっとここで待つつもりだ。そう、ずっと。

ゆんは、さっきから顔を伏せていた。その目線の先にあるアスファルトは、雨に打たれたかのように濡れている。

その涙には、多数の感情が篭っていた。

『ああそうだよ！　お前の言うとおりですよーだ！　俺はどうしようもないバカちんですよー！　あなた様のだいっ嫌いな真堂守哉君ですよっ！』

『ああ、もういいよ！　本当に俺が馬鹿だったよ、自分でも思う！　ああくそ！　お前なんかに会いたいとか思わければよかった！』

後悔、嬉しさ、悲しみ。だい嫌いなんて言わなければよかった。会いたいと思ってもらえていて嬉しかった。それを後悔されて悲し

かった。

でも、一番強いのは、感謝。

『すぐに取り返してやる！　そこ、動くなよ！』

それでも、自分のために悪い人を追いかけて行ってくれた。それは、ありがとうじゃ足りないほどの、ありがとう。

これで彼がバッグを取り返してきてくれたら、自分はどうすればよいのだろう。ヤギちゃんは「ありがとうございます」しなきゃいけないって言ってたけど、上手く言えるか心配だな。

「あり、がとう……ひっく、ごじゃいまひゅ……！」

呟いたけど、やっぱりダメだ。なんでだろうな。今日、本当はお礼してさよならのつもりだったのに、もっとお礼しないといけなくなっちゃった。

かみやは、偉大。偉大な人には二人っきりの時にお金をプレゼントするものだってヤギちゃん言ってたから、自分の力で稼いだお金をかみやにプレゼントするつもりだった。でも上手くいかなかった。かみやを怒らせてしまった。ヤギちゃんは「ごめんなさい」しなきゃいけないって言ってたけど……。

「ご……めん、なひゃい。……あう」

これもダメだった。本気で号泣してしまいそうだ。

その時、ゆんの頭に軽くて柔らかい何かが落ちてきた。

「あたっ。……？」

頭に乗っている物を取ってみる。それは、彼女の小さなポーチだった。

「よっ。取り返してきたぜ」

上から響いた声に、ゆんは反射的に顔を上げる。

「……か、み」

「おう。……ってどうしたあ！？　おめめが真っ赤になってんぞ！　いくらなんでも泣き過ぎだろっ！　ほら、取り返してきてやったんだから、もっとわら」

「あ、ありがとうごひゃいまふっ！」

「興奮しすぎだろっ！　呂律が回ってないっすよ、お宅」

守哉は冷静に突っ込んできた。いきなりなんだ、という表情だったが。これじゃいけない。感情が伝わってない。

「ごめなひゃゆっ！」

「ええ！？　なんて言ったの！？　何語デスカ！？」

今度は意味すら伝わらなかった。

「で、でも、本当に嬉しいから……」

守哉は、言葉を詰まらせた。しばらくして、なぜかわざとらしく咳払いをした。

「ごほごほん！　と、とにかくっ！　もう用は済んだからなごほん！」

守哉は咳払いを続けながら、そこから立ち去ろうとした。あっ。まずい。

「かっ、かみや！」

「な、何だよ……？」

振り向いた顔が何で嬉しそうだったのかは知らないけど、とにかく、あれを渡さなきゃ。偉人に渡すプレゼント、「わいろ」って言うらしい。

ゆんはポーチから……ではなく、知らない間にスカートの布に隠れていた五十万の封筒を取り出した。守哉が「えええ！？　そこにあったの！？」て絶叫してるけど、知らない。ポーチに入っているのは自分が大好きなお菓子である。

「こ、これ！　お礼！　五十万！」

ゆんは、まるでラブレターを渡すかのごとく、守哉に「わいろ」

を差し出した。

守哉は口をあんぐり開けて驚いている。嬉しすぎ……たのかな？

「お前、これ……お礼って言った？」

「？　う、うん。そうだよ。お礼、わいろだよ」

守哉はさらに口をあんぐりした。電波系、とか呟いた気がしたけど、気にしない。

「ゆ、ゆ――――んッ！」

守哉は叫んで、ゆんの肩を掴んだ。

「は、はういっ！　な、なに？」

感動したのかな、とゆんは嬉しくなったりしたが、次の一言はそれらを全てぶち壊した。

「こんなことしたらダメだろっ！」

「は、ひゃいっ！……って、え？　え？」

ゆんは全く状況が掴めない。わいろってダメなことなの？　と常識的にちょっとヤバいことを疑問に抱きながら、ゆんはとにかくき

ょとんとしている。
「あのな、お前はまだお金の大切さとかいまいち分かんないのかもしれないけど、お金はホイホイ他人にやっていいもんじゃないし、あと、お礼が現金ってのはちょっと痛いぜ」
「ほー、ふむふむ」
「だから、お礼ってのはもっと、お金じゃない物でするものなんだぞ」
「う、うん」
「例えば、服とかアクセサリーとか」
「うんうん」
「日用雑貨とか」
「ふんふん」
「メシとか」
「ほうほう。……ん！　それだあ！」
「……え？」
ゆんはいいことを思いついた。そうだ、あそこに連れて行こう。
守哉は一人暮らしらしいし、もしかしたら……なんてことを考えながら。

「かみや、ゆんについて来てくれる？」

「お、おう」

返事を聞くと、ゆんは携帯電話を取り出した。「なっ！　それは、非貧乏の証！　お前、貧乏じゃなかったのか！？」とか叫んでるけど、相手にしてられない。

ぴぴぴっ、と番号をリズム良く押すと、ワンコールする前に相手が出た。

『どうなされました？　お嬢様。もしかして、また誰かにご馳走なされたのですかな』

「じいやん、迎えきて！　今すぐ！」

『かしこまりました。すぐに迎えを寄こします』

ぴっ、とボタンを押して通話を切ると、「な、なあ」と守哉が話しかけてきた。

「さっき、誰と話してたんだ？」

「じいやんだよっ。ゆんのお家の使用人リーダーなんだよ」

ふふん、と胸を張るゆん。対して、守哉は今までで一番口を大きく開けていた。

「使用人……お前んちってもしかして……」

守哉が何かを言い終える前に、ゆん達の真横でキキキィッ！　勢いのあるブレーキ音がした。見ると、黒光りする細長い車体がそこにはあった。金持ちの象徴、リムジンである。

「……そろそろ顎が外れてしまうんじゃないかなあ」

ゆんは唖然とする守哉の手を引っ張る。

「いこ、かみや！」

第一章　天才児と問題児と奮闘記（後編）　その４

8

拝啓、天国のじいちゃんへ。

じいちゃん、天国はいいとこ？　やっぱり現世は住みにくいよ。夏目漱石の言うとおりだよ。天国に彼もいるだろうから、そう伝えといて。

さっきも言ったけど、現世は住みにくいよ。親には捨てられるわ、ヤクザは怖いわ、美少女からぼったくりパフェ奢らされるわ、真夏の教室に暖房は入ってるわ、もう諸葛孔明も未来を読めない時代だよ。天国に彼もいるだろうから、伝えといて。お前は既に死んでいる、ってね。失礼だね。

ところで、未来を読めないって言えば、今日すごいことになったんだよ。なんと、前述の美少女からの恩返しが、とにかくすげえんだ。彼女、お金持ちの家の娘でさ、そこに招待されちゃったんだよ。まぢで。人生って何が起こるかわからんね。

「……ていう手紙、書こうかな」

「かみや？　そういうのを、えっと……現実逃避って言うんだよ」

「ぐさっ！　ゆんにしては適材適所をついてきやがった！」

「ええ！？　ひどい！」

守哉とゆんは今、巨大な豪邸の扉の前にいる。ついさっき初めてゆんの苗字を知ったのだが、なるほど。これがかの大手電器メーカー「ノイズ」の神掛（かみがかり）社長の邸宅か。彼がラジオで言っていた一人娘、それが彼女、「神掛ゆん」だったのだ。

ギイイ、と威厳のある音を立てて扉が開く。その景色に少々目が虚ろになりながらも、ああ、この後左右に大勢の使用人が「おかえりなさいませ」とか言ってお出迎えするんだろうな、と予想する守哉。頭脳だけはゴージャスなので、彼は頭の中のみこの展開についていけている。心身は一周ぐらい遅れている。

『おかえりなさいませ。お嬢様』

「……あれ」

守哉の予想に反して、ゆんを迎えた使用人はたった三人だった。アイアムジェントルメン！　という雰囲気の紳士服を身に纏ったおじいさんと、エプロンに三角巾と主婦みたいな格好をした十代後半ぐらいの女性、そして西洋の頑固おやじっぽい風貌のコック、それだけだった。いや、守哉には一人として彼の帰りを迎える人間はいないのだから、彼から言わせれば十分すごいのだが。

「ん？　どうしたのかみや。期待はずれだ～！　みたいな顔しちゃって」

「ええ！？　なんかさっきからお前キレよくね！？」

守哉がびっくりしていると、一番近い場所にいたおじいさんが前に出てきた。この人がきっとゆんが言っていた「じいやん」だろう。

「じいやん、ただいま」
「お帰りなさいませ。お嬢様。クイズ大会はいかがでしたでしょうか」
「うん、楽勝だったよ。ゆんの頭脳があれば百発百中だね」
「最後の問題にすら頭脳使ったかは定かじゃねーけどな」
守哉が彼らに聞こえるように呟くと、じいやんさんは彼のほうを見た。
「おや、このお方は？」
「かみやだよ。クイズ大会でゆんと死闘を繰り広げたんだよ」
「ほっほっほ。それはそれは、なかなかの猛者でございますね」
「うん。もさもさだよ。じいやん、かみやをもてなして」
「わかりました。直ちに」
「いやいや、もてなすってそんな……げへへへ……」
じいやんさんはコックを連れて奥にささささ、と行ってしまった。
「ゆんちゃん、おかえり」
主婦っぽい女性は、母親のような口調でゆんを迎えた。すごく優

しそうな人である。

「うん、ただいまあ！　ヤギちゃん！」

ゆんは彼女の豊満な胸に飛び込んでいく。ばふう、という効果音が本当に聞こえてきそうだ。なるほど、この人がゆんの電波単語一号「ヤギちゃん」か。

「クイズ大会、ちゃんとテレビで見てたわよ」

「ほんとっ？　ゆんが優勝したんだよっ！」

「うんうん。ゆんちゃんすごかったもんね。……いろんな意味で」

あ、最後トゲがあった。この人はまともそう。

「うんっ！　ありがとっ！」

「ふふっ。……で、この方が昨日話していた真堂守哉さん？」

「うん！　今日ね、ゆんがバッグを盗まれた時、かみやが取り返してくれたんだよ！」

「ほんと！？　ちゃんとお礼言えた？」

「う～ん……。いえ、た……よ」

「……。……そう」

ヤギちゃんさんは白い目でゆんを見た後、守哉のほうに向き直っ

た。

真正面から見ると、とても綺麗な女性だった。特に惹かれる白い肌は、本当にニックネームのヤギの印象がある。

ヤギちゃんさんは頭の三角巾を外し、銀のポニーテールを露にすると、深く息を吸う。

「いろいろとお嬢様がお世話になりました。心から、お礼申し上げます」

「……、あー……っと」

すっごい棒読みだった。マニュアル通りだった。守哉だけでなくゆんまでも、頬に冷や汗が伝っている。

その視線に気づいたようで、ヤギちゃんさんは顔を赤くしてあわあわと手を振った。

「す、すいませんっ。爺やに叩き込まれた営業トークが、つい……」

いや、にしてももうちょい感情の篭ったトークをしようよ、と心の中で突っ込む守哉。それぐらいに感情のない口調だった。

「あの、俺、別にそんな偉い人じゃないですから、普通にタメ口でいいっすよ。年下だし」

守哉がそう言うと、ヤギちゃんさんは顔をぼっ、と赤らめた。意外と男性との会話は慣れていないようだ。

「そ、そうですか……っ。で、では……か、守哉君と……。わ、私の名前は八木原明歌(やぎはらめいか)です。き、気軽にヤギちゃ……明歌とお呼びください……」

「あっ、はい……。じゃ、じゃあ、明歌さんって呼んでいいで、しょうか？」

「こ、光栄です……、守哉君……っ」

もじもじと話すしぐさを見ていると、なんだか守哉まで気恥ずかしくなってくる。

「……で、あ、あの。ゆんちゃんを二度も助けていただいて、本当に、ありがとうございまし、た……」

「ああ、えっ、ええはい。こちらこそ、こんなすごいお屋敷に、招いていただいて……」

「いえいえ……」

「いや、こちらこそ……」

お見合いでもしているかのように、なかなかじれったい会話を繰り返す二人。そしてそれを何でかすごいオーラを放ちながら眺めるお子様一人。

「ああはいはーい！　もう終わりだよ終わりだよ！」

守哉と明歌の間にずいっ、と入り込んだゆんは守哉の手を引いて歩き出した。

「ゆ、ゆん……？」

「あっ、守哉君……」

「ふんだっ。かみや、こっちが厨房だよ」

なぜかむっすー、と頬を膨らませたゆんは、守哉の手を引いて、爺やとコックが向かっていた場所へ彼を連れて行く。

「おおお！　すげえなここ！」

「でしょでしょ！？　ここの穴からぷしゅーって煙が出てくるのとかすごいよね！」

守哉が顔を出した厨房は、驚くほど広く、また驚くほど設備が整っていた。

レストランなどにある基本的なキッチンに、ピザ用のオーブン、巨大な肉や魚をまるごと保存する冷蔵庫、さらには日本国伝統かまどもある。とにかく、ここにいれば、どんな種類の料理でも作れそうだ。携帯用ガスコンロと小さな冷蔵庫しかなかった守哉の部屋（もはや台所でもない）とはまさに雲泥の差である。

そこで料理を作っているのはたった一人、さっきのコックだけなのだが、彼の働きぶりはすごかった。和、洋、中華を始め、様々な

料理を、それこそこの厨房の機能をフル活用して、一度に十品以上作っている。しかもその一品一品が、見るだけで口内を唾液でいっぱいにさせるほどの完成度だ。

守哉は純粋にすごいとしか思えなかった。知能指数が人間の域を超えている彼でも、これはさすがにできない。頭ではできても、体でそれを再現できないからだ。それに、この広い厨房を、一人だけで余すことなく支配している。彼のような存在が、真の料理長と呼べるのではないか、と守哉は熱く思っていた。

コックもとい料理長は巨大なまな板に数十種類の野菜を置いた。そして彼は目を閉じると、しばらくしてカッと見開いた。それからは一瞬である。彼はまな板に乗った野菜達を手で叩くだけで宙に浮かせ、もう片方の手で握った大きな包丁で目にも留まらぬ速さで切り刻んだのだ。そしてそれらが宙を舞っている間に、下に皿を用意し、あとは野菜がその上に落ちてくるだけ。全て落ちれば、肉食獣でも噛り付く一流サラダの完成である。

これが、守哉の一番驚いたことだ。

「え、ナニ？　コレ空中で切れたよね？　空中で輪切りされたよね？　この空間、物理法則捻じ曲がってるよねえ！？」

「理屈なんてのは、気合でどうにもできるもんだ」

中華鍋に業火を纏わせて、額の汗を拭いながら料理長は答えた。

こうして、守哉の脳内での物理法則が大きく捻じ曲げられることになる。脳木などが知ったら卒倒ものである。

料理長がズババと作り上げていく料理は、爺やに別の場所へ運ばれていく。彼についていくように、ゆんも守哉の手を引っ張った。

辿り着いたのは広い部屋だった。よく王様とか食事してそうなすごく長いテーブルが真ん中に置いてある。どうやらここがダイニングらしい。

テーブルの上には先ほど爺やが運んでいった料理の数々が置かれていて、その配置具合がまた絶妙に、そして絶頂に食欲をそそる。

「ゆんは偉い人の席い―っ！　へっへー！」

ゆんは走り出し、一番奥の、よく王様とか座ってそうな位置の椅子に座った。「守哉はここだよ」とゆんが指差した彼女に一番近い席に守哉は座った。

しばらくして明歌もやってきた。彼女は、ゆんに近く、守哉と向かい合う席に座る。

「あうー」

うだるようなゆんの声に、守哉は彼女の方を見た。見ると、ゆんは出された料理を眺めながらヨダレをだらだら溢していた。なるほど。いつもこんなに豪華なわけじゃないのか。彼女の手には既にフォークとスプーンが握られている。

「も、もう我慢できない……。いただきま」

そろ〜り、とフォークを大皿に盛られたマッシュポテトに伸ばすゆん。だが、その切っ先が料理を捉える前に、彼女の手は明歌によって止められた。ばしぃっ、とゆんの手首を掴む明歌。その行動の早さに、「おおっ」と守哉は少し感心してしまう。

「あわっ！　や、ヤギちゃん……」

「ゆんちゃん？　まだ皆、揃っていないわよね。揃う前に食べるとしても、これは守哉君のための食事なのだから、彼が料理に手を出すまで食べちゃダメでしょう？」

「あ、あう……。か、かみやあ」

ゆんが助けを請うように守哉を見つめる。早く食べて、その桃色の瞳が訴えかけてくる。

軽く忘れていたが、彼女の可愛さはそこらのアイドルと張り合うどころか別格である。だから彼女にお願いされたら、どんな男でも身を捧げることだろう。だがしかし、そう、しかしだ。守哉はすでにゆんへの耐性は出来上がっているし、そもそも常識的に招いてもらっている側の人間が、その家の人より早く食べ始める、というのは図々しいことなのではなかろうか。しかもさっきの明歌の行動から見ても、礼儀を重んじる家宅のようだし。

ゆん……、ごめん。守哉は無言でそれをゆんに伝えた。彼女の顔は絶望に染まっている。いや、実際そんなヤバい事態じゃないんすけど。

「かみやが……寝返ったあ！」

「えええ！？　元々お前の味方じゃ……つうか敵いたっけ！？　どこに寝返ってんだ俺！」

食事を作り終えた料理長と、それを運び終えた爺やがそれぞれの席につき、食事は始まった。その頃ゆんは三途の川でバタフライを楽しんでいたという。電波だ。

ゆんの食べ具合はすごいものだったが、それ以上にすごいのは守哉だった。驚くほど神掛家使用人たちと打ち解けたあと、普段の彼の貧乏根性が目を覚ましたという。つまりは食える時には胃に流し込ませてでも食いだめしておこう、というかわいそうな思想である。

目標は一万六千キロカロリー、二十代の男性における一日のカロリー摂取量の十倍。つまり、十日分のエネルギーである。

しかも重点的に食べるのはシーフード。消化が遅い食べ物こそ、長く小腸に溜めて置くことができる。おなかさえ壊さなければ、人類一同の夢「食いだめ」がここに誕生するのだ。さらに守哉は野菜を挟んで食べることで体調を管理、肉を食べることで代謝を良好に、こうすることで「食いだめ」の天敵「腹痛（主に右わき腹）」の発生を防ぐのだ。

「……とか頭良さそうなことを言っておきながら、ただおいしいから食いまくってしまう、というだけの守哉君なのだった。むしゃむ

しゃ」

「かみや、誰に言ってるの？」

「いや、なんでもない。言い訳がましいのが嫌になっただけだぜ」

ふうん、と相槌を打って、ゆんはパスタをフォークだけで器用にくるくる巻いて食べる。

「かみやー」

「むぐ？」

「かみやって一人暮らしなんだよね？」

「おう。……つってもほとんどホームレスだけどな」

「そうなんだ……」

そう言ってゆんはまたパスタをフォークでつつく。不思議に思って、守哉は手を止める。

「どうした？」

ゆんは何も答えない。いろいろと疑問を抱きながらも、守哉は「食いだめ」を再開する。

のどが渇いた守哉の口に、コップのリンゴジュースが触れる直前で、ゆんが口を開いた。

「かみや……行くとこないんだよね？」

むー、と守哉は考える。あの家には未練はないし、そもそも自分のものでもない。親とは生き別れたが、三千里歩かなくてよくても探すつもりはない。学校にもたいして用はない。就職するのが面倒だから、大学に進んでそこの教授にでもなろうかな、と思って通っているだけだ。行くべき場所とか目指すものは……はっきり言って、ない。

「そうだな。……だから、こうやってエネルギー蓄えてんだぜ、いえい！　今、二千キロカロリー前後……」

「ここに住んでくれない……かな？」

リンゴジュースは吹き出した。

「ぶぼっ！　げほっ！　は、はあ！？」

むせまくる守哉に、明歌が背中をさすってくれた。

「だ、だから……！　行くとこがないなら、こっ、ここに住めばいひっと、～ッ！　住めばよしけりなの！」

「何気に命令文！？　しかも古語！」

「ううっ！　と、とにかく！　どうなの！？」

むう、守哉はまた考え込んだ。

先ほども述べたように、守哉は今の生活に何の未練もない。メリットも、それに伴うデメリットも上手いことバランスは取れていると思う。異常であり、社会のゴミに似合う生活。自分みたいなのには、それが一番合っているから、嘆くこともせず、新たに何かを望むことはしなかった。

それと比べるに、ここはなんだ。広いし、使用人はいい人だし、メシは三ツ星以上（ここ超大事）だし、お金持ちだしで、え？　アレですか？　逆玉の輿？　ひゃっほう？

とは言っても、守哉は実はそんなメリットはどうでもいいのだ。せめてメシは捨てがたいが。守哉は別に夢の生活を手にしたい普通庶民ではない。

だが、そんな守哉でも、いいな、と思うぐらいの望みはある。

「かみや、ど、どうかなぁ……？」

ゆんがテーブルに身を乗り出して、守哉の顔を覗き込んできた。その頬は、微かな赤みを帯びているように見える。

そこに、彼にとっては新鮮な「楽しさ」を教えてくれた少女がいる。彼女に訊かれた時点で、もう守哉の中で答えは決まっていた。

「いや、でも……。俺なんかがさ、迷惑じゃん」

守哉は周りを見渡す。爺やと料理長は何も聞いていないようにも

くもくと食事を続けていた。後ろで、守哉の背中をさすっていた明歌が、守哉の肩を優しく掴んだ。

「私は全然迷惑じゃないですよ。守哉君は面白いですし、ゆんちゃん一緒にいて楽しそうですし、なにより……」

明歌はそこで言葉を詰まらせた。守哉が振り向くと、明歌は「な、何もないですよ……！」と彼の肩から離した手を、ふるふる振った。

「と、とにかく！　守哉君を迷惑に思う人なんていないですよ？　ねえ爺や、料理長」

爺やはハンカチで口を拭くと、微笑みながら守哉を見た。

「異議はありませんよ。守哉殿が住むというのなら、主人に報告を入れねばなりませんね」

料理長も、笑顔ではないものの爺やの「異議はない」の部分に頷いていた。

皆から見つめられて、ちょっと照れた守哉は頭をぽりぽりと掻いた。こういう類の好意を大勢から向けられるのは初めてだった。

「まあ、その……。えと、迷惑じゃないのなら……あの」

なんだろう、この気恥ずかしさは。

ゆんがじっ、と守哉を見つめている。その顔があまりに真剣だったものだから、守哉は余計にそれを笑顔に変えたくなった。

「お願い……しますぁっ！」

力みすぎて、例の通り、声が裏返ってしまった。テーブルの上に優しい笑い声が響く。

赤面して俯く守哉に、唯一彼を笑わなかったゆんが、なんと彼に飛び乗ってきた。

「かみやあー！　ありがとう！　これからよろしくね！」

「うわっ！　おまっ、おまっ！　ちょ、～っ！」

慌てて守哉からゆんを引き剥がした明歌がいなかったら、彼は失神していたであろう。

ともあれ、今日から守哉は神掛家に住むこととなった。守哉がそのことをしっかり自覚するまで十分ほどの時間を要したのは意外と当たり前のことかもしれない。

ゴミ箱のボロ人形のようなものだった彼の生活は、今日を境にその身を天使に拾われた。

「なあ、今さらだけど、なんで俺をここに連れてきたんだ？」

爺やたちが食事の片付けをしている間、ゆんと二人っきりになった守哉はふと疑問を口にしてみる。対するゆんはとても軽い雰囲気で答えた。

「ん。しっくすせんしゅ」

ゆん的にはシックスセンスと言いたかったらしい。つまり勘だったようだ。電波だ。

第二章　電波と龍と遭難記　その１

1

サッシが吹っ飛んだスカスカの窓から朝日が差し込み、心地よい風が部屋を吹き抜ける。

東京都内の工場が立ち並ぶ郊外、その一角にある元労働従業者用の寮の一室。そこで守哉はここでの最後の夜を明かした。

部屋中に散らばる雑誌を束ねて紐で結ぶ。脱ぎ捨てられたままの洋服を畳む。指輪やアクセサリーはポリ袋に詰め込む。別のポリ袋には歯ブラシやシャンプー、ワックス。そしてそれら全てを、部屋を追い出された時のために用意していたダンボールに入れていく。

全てのものを詰め込み終えると、金属ノコギリの刃と針金をダンボールの所定の位置につけて、工作完了。即席キャリーバッグの完成である。我ながら良い出来である、と守哉は自分の作ったそれに惚れ惚れしてしまう。

「……よし。お引越し準備終了！」

守哉は天高く指を突き上げる。もう、この部屋に彼の歴史はない。

「あっ、かみやだ！　おーい！」

夏の照りつける日差しから逃げるように、リムジンの陰に隠れてしゃがみ込んでいたゆんは、陽炎の出来た大通りをうだった顔で歩いてくる守哉の姿を発見すると、立ち上がって手を振ってきた。守哉も片手を空中でふらふらさせてみる。

「おうおう。都内のど真ん中で黒リムジンですか、六本木でも行こうっての？」

ゆんの元へ辿り着いた守哉は、リムジンの中にダンボールを放り込む。

「えへ、ちがーうよ。ゆんの家には今、これしかないから」

麦藁帽子にキャミソールという、一見「都会から離島へ引っ越してきた病弱で儚げな少女」を連想させるような風貌の彼女は聖女の笑顔で答えた。

ふうん、とそっけない返事を返す守哉。これを売ればそこらの乗用車が何台も買えそうだけどな、と心で思うが、なんか自分がすっごい貧乏根性丸出しなので言うのはやめた。

二人がリムジンに乗り込むと、まもなく車体は進み始めた。

守哉は最後列を支配し、寝転がって失礼極まりないです上等でくつろぐ。

「にしてもさぁ、まさかあんな大豪邸に住むことになるとはなー」

「そうだね。今日からかみやはゆんの家族だよ」

「家族ねえ……」

守哉は嫌なことを思い出し、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。が、ゆんに見られる前に、すぐ元のどこか可愛げのある不謹慎な顔に戻した。

そんな守哉の気配りなど知らずに、彼が自分の家族になることを喜ぶゆんは、突然立ち上がって、彼を見下ろした。

「そうそう、ゆんの家族になる以上は、ニックネームをつけないといけないんだよう？」

「いけないんだよう？　とか言われてもねえ。お前、クイズ大会の司会者にもつけてたじゃん」

守哉の言葉を無視して、ゆんは顎に手を当てて彼のニックネームを考え始めた。

「むむう……。……ん、よし！　決まったよかみや！」

「おう、なになに？　髪の色的にライオンとか？　名前的にキリストとか？」

「かみやのニックネームはねえ……かっちゃん！」

「末路は事故死！？　別に夢を継いでくれる兄とかはいないんだけど！」

「ええ、いや？　じゃあ、頭良いから、おさるさ」

「よし！　俺にはニックネームはいらないぜ！　守哉でよろしくな！」

守哉は立ち上がり、ゆんの肩を持って、ぶー、と口を尖らせる彼女を席に座らせる。彼は自分の手で余命一年の死亡フラグをもぎ取ったのである。

「とっうちゃあーく！　かみや、お疲れ様でした！　ねえ、荷物は爺やに任せてあそ」

「おつかれさんしたぁ。んじゃ、俺は部屋で寝るんで」

守哉はダンボール箱兼キャリーバッグをがらがら転がしながら屋敷に入っていく。もちろん、後ろでバンザイしながら、笑顔で駆け寄ってきたゆんを完璧に無視して。

「かあみ～や～。待ってよ遊ぼうよ～！」

「うっせえ。昨日今日と忙しくて疲れきってんだっつの。せっかく

週末で学校も休みなんだから、一日中お前じゃなくてベッドとイチャつかせて？」

言いながら、守哉は爺やに導かれるまま、自分の部屋を目指す。もちろん、右手で新たに増えた荷物を引きずりながら。

第二章　電波と龍と遭難記　その2

2

「龍が見たい！　今すぐ！」

「……あー」

突然発せられた一言に、守哉は頭を抱える。

二人がいるのはダイニング。先ほど昼食を終えたところである。

なんだかんだで、ゆんの相手をしなければいけないことになった守哉だが、これは……どうだろう。まず遊びのレベルとして高すぎやしませんかね？　水族館に行ってタツノオトシゴでも見せれば納得してくれるだろうか。

ゆんは意味不明にテーブルをばん！　と叩き、椅子の上に立ち上がった。

「この前、水族館に行って『竜の落とし子』っていうのを見たんだけど、あれは……ちっちゃい！　本当の龍はもっともっと大きいんだよ！　きっと！」

どうやらタツノオトシゴのせいでこうなっているようである。

「ゆんの調べによると、どうやら龍はエベレスト山頂に住んでいるようだね」

ゆんはどこから出したのか、テーブルの上に大きめの本を広げ、『最も高い山に生息する龍』という挿絵を指差した。まあ、文字と絵が合体している辺り、この本は資料とか科学書ではなく、ただの絵本のようだが。

「だから、今から即行でエベレストに行けば会えると思うんだよ！」

なるほど、と守哉は思った。神掛ゆんは、絵本の挿絵だろうと幼稚園児の落書きだろうと何でも信じ込んでしまうトンデモ少女らしい。

さて、打開策はつぶれたか。物理的な解決法がなくなった今、守哉はお得意の理屈で畳み掛けることにした。

「龍が実在する確率は百万分の一パーセントで、さらにエベレストにいる確率はそれの一億分の一パーセントだ。というか進化論を初めとして、いろいろな理論を考えても、龍はいない！　まずヘビを空に飛ばさせてから、あんなモンが宙に浮いていると言え！　分かったかあ！」

ぜえぜえ。肺の中にある空気を全て吐き出すまで言い続けた守哉の迫力に、さすがの電波少女も圧倒されていた。

「か、かみや？　ごめん、良く聞き取れなかったから、もう一度言って？」

ズシャアア！　とエジソン然りアインシュタイン然りの天才的な知能指数を誇る脳を持つその体は、映画のワンシーンみたいに見事に崩れ落ちた。

「……と、言うことで、パパが飛行機を買ってくれたんだよー！」

じゃっじゃーん！　というゆんの掛け声と共に、馬鹿広い神掛家中庭の中心、そこに二人乗り用ジェット機が轟音と暴風を撒き散らして着地した。

風に全身を叩きつけられる中で、守哉は一人、ただ唖然としている。まだ神掛家にきて長くないのか、明歌も少々引き気味である。会ったことはないが、ゆんの親父の大体の人間性が判った気がする。

エンジンの振動を止めたジェット機の操縦席が開けられ、そこから爺やが出てきた。

「お嬢様。いつでも出発できますぞ」

「うん……、でも」

ゆんはなぜか困った顔をしていた。

「これじゃ、ゆんとかみやが乗れないよ……」

ここまでは良かった。そう、ここまでは守哉もゆんになつかれている事に笑顔を浮かべていたのだが、彼女の次の一言が、彼の幸せを一気に崩壊させた。

「……よし！　かみやに運転してもらうよ！」

「……？　……はあ！？　できるわけねーだろ！」

「じゃあ、じいやんに教えてもらって！　一日で！」

がくっ、と守哉はうな垂れる。馬鹿か、こいつは。無茶苦茶すぎる。

だが、そのうだった表情から、一つの笑みがこぼれた。

「ほっほ。お嬢様、守哉殿があのクイズ大会で決勝に残るほどの方でありましても、さすがに飛行機の運転は……」

爺やの言葉を遮るように守哉は一歩踏み出し、爺やとゆんの間に立った。

「いいぜ。一日でこのジェット機の運転が出来るようになってやる」

「かみや……」

「守哉殿、ですが」

「大丈夫だっつの。爺や、今日は真夜中ぶっ通しでティーチャーしてもらうぜ」

守哉はどこか可愛げのある凶暴な笑みを浮かべた。

俺は、普通じゃないから、お前の所に来た。守哉は、口の中で呟いた。

第二章　電波と龍と遭難記　その3

3

東京都郊外、少ない緑と住宅地が広がる景色は普通と呼べるものだが、それも見方によっては絶景に変わることがある。

例えば、上空から見てみること。

「どうだあ！　俺が本気を出せばこんなもんだぜ！」

空を切る二人乗りジェット機の中で、守哉は後部座席に座るゆんに叫んだ。

あの「やってやる」宣言から二十時間、爺やに徹夜通しで小型飛行機の操縦法を叩き込まれた守哉は、完璧にジェット機の基本的な運転ができるようにまでなった。これはもう、ただ天才としか呼びようがない。

その間、寝るどころか屋敷にすら入っていない守哉は、目元に見ていて辛いぐらいのクマを作りながらも、頑張ってゆんをジェット機に乗せて空を飛んでいるのだが、

「む～……」

その肝心のゆんが、何か腑に落ちない問題アリアリですぜ、な文

字を顔に描いていた。

「だめだよう、これじゃ。あくろばっとはー？」

「二十時間で普通の操縦できただけでもすごくね！？　褒めてくれよ！　そして龍見に行くのにアクロバットいらねーよな！？」

「えー。やだやだあ！」

じたばたー！　と機内で暴れるゆんに、守哉はため息をこぼした。

ごおう！　と勢いよくジェット機が空気を切り裂き、その機体は空中で自由自在に舞い踊る。プロも舌を巻く操縦の上手さである。

「ひゅーっ！　かみやすごいすごおい！　本当にやってくれて嬉しいよ！」

「また徹夜だったから、今すぐに気絶しそうだけどな」

爺やも驚いていた。まさか二日徹夜しただけで小型飛行機の基本的な操縦、さらには応用的なアクロバットまでマスターするとは、もう常人の域を超えている。これはもう、ただ超人としか呼びようがない。

だが、目元の見ていて泣きたくなるぐらいのクマを見る限り、体力的には普通の高校生のようだ。

「はあ……。ヤバい、まぢ寝たい……」

「よしよしっ。あくろばっともできたことだし、今からエベレスト山に直行だあー！」

酷くやつれている守哉なんて放っといて、十分な睡眠をとりお肌はすべすべーなゆんは一人テンションを上げていく。

「……はいはい」

たとえ、実在しない物を探し回るだけだとしても、守哉はそれを無駄だとは思わず、レバーをひねってエンジンを滾らせた。

「……なかなか出てこないね、龍」

「まあな」

今いるエベレスト山は天候に恵まれていないようで、守哉たちが乗るジェット機は吹雪の中を飛んでいた。

到着から、かれこれ一時間は辺りをフラフラしているが、龍は姿を現さない。

ガラス越しに吹雪の中に目を凝らすゆんを見て、守哉は口を開いた。

「あのさ、また明日来ようぜ。こんな視界の中じゃ、見つかるモンも見つからねーって」

「やだやだ！　絶対に見つけるもん！」

駄々をこねるゆんに、さすがの守哉も腹が立ってきた。苦笑いを浮かべて振り返る。

「別に今日じゃなくてもいいだろ？　龍の方だって、吹雪の日までブラブラしようとは思わないだろうしさ。な？」

「一日だって待てないもん！　早く見つけて、ゆんの……」

ゆんの言葉はそこで止まった。

「何だよ。どうした？」

どうやら、ゆんは振り向いている守哉の後ろ――つまり、正面のガラスに映るものに目を奪われているようである。

不思議に思いながら、守哉は視点をゆんから後方に移した。

「――……おい。嘘だろ」

そこにあるのは、宙に浮き、外から守哉たちを見る正真正銘、「龍」の姿だった。

「きゃー！　出たー！」

「ぎゃああ！　出たああ！！」

守哉とゆんは、口にした言葉こそ同じだが、リアクションは対照的である。

目の前に現れた龍は、緑の鱗のヘビみたいな体躯を持ち、草食動物と同じ顔の側面にぎょろりと眼球がついていて、長い角と髭が特徴的な、アジア型の龍だった。大きさはそれほどまでない。ミニサイズのシェンロンと思ってくれると分かりやすい。

守哉の脳内では、超高速での状況の処理が始まっていた。

ええと、まず何で龍がいるのかは置いておこう。それよりはこの状況が危険なのか、そうではないかだ。龍って何科？　体型はヘビだし、でも哺乳類っぽいし、角からシカの仲間かと思いきや歯は犬歯だらけだし？　ん、犬歯だけの歯ということは肉食か。じゃあ何を食うんだ？……あれ。ここにライオンやワニに食べられるヒト科の生物が二匹――！？

「ほらあ！　やっぱり龍はいたんだよ！　龍さん！　ゆんの願いはかみやとずっ……」

「っ！　ゆん、逃げるぞ！」

ゆんの返事を待たずに、守哉はレバーを思いっきり引いた。ぐおん！　と機体が急上昇する。油断していたゆんが、後部座席で転が

った。

「わあっ！　か、かみや！？　どうしたの！？」

「あいつは俺らを食べる気だ！　だから逃げます！」

「ええ！　まだお願い事言ってないよー！？」

「どうせ叶えきれないって！　地球のシェンロンはしょぼかったじゃん！　今度ナメック星に連れて行ってやるから我慢しろ！」

ゆんの不満の声を無視してジェット機は上昇を続け、さっきの龍からどんどん遠ざかっていく。いける、と守哉は思った。

だが、刹那、ジェット機内に大きな衝撃が走った。

「がっ！」

「きゃあ！」

守哉とゆんはバランスを崩し、その場に倒れた。守哉はすぐに立ち上がり、レバーを持って辺りを見回す。衝撃の原因は彼の右側にあった。なんと、鋼鉄製の右翼が、根こそぎ吹っ飛ばされていたのである。代わりに、そこにはあの龍の姿があった。

「くそ……！　やられた！」

守哉はレバーを操作するが、機体はさっきとは間逆の急降下を始めた。

「ヤバいっ！　墜ちる……！」

上空では龍が吹雪の中フワフワと浮いて、墜ちゆく守哉たちを見下ろしていた。

第二章　電波と龍と遭難記　その４

4

「かみやー。ここどこー？」

雪を掻き分け進む守哉に、後ろを歩くゆんが叫ぶ。

「……やべえ。遭難した……！　本気でやべえぞ。今日の食事のメニューから考えて、何もしなくてもあと一時間分のエネルギーしかねえ」

守哉の顔は真っ青だった。あの後、雪の上に不時着した守哉とゆんだが、お互いケガはなく、それはそれで安心した。だが、そんな彼らに新たな問題が訪れた。

「かーみやー。ねえー、ここどこー？」

「知るか。分かるのは、ヒマラヤ山脈のどっか、ってところだけだな」

「えー。じゃあ、どうやったら帰れるのー？」

守哉に追いついたゆんが、彼の横に並んで歩く。

「さあな。こうやって下ってりゃ、すぐ帰れるさ」

と心配させないように言ってはみたが、正直、帰られる可能性は低い。何たって世界一の標高を誇る山脈の積雪部だ。季節を考えても、相当高い場所にいることは確かだ。日が暮れる前に帰るのは不可能と思われる。

「……かみやー。待ってよー」

振り返ると、ゆんは結構後ろの方で立ち止まっていた。そこまで行ってやるのも面倒なので、守哉はその場で停止する。

「どうしたー？　早く来いよ。待っててやるから」

「もう歩けないー。寒いよお」

そう、守哉たちが着ている服は夏物だ。マイナス二十度を下回る場所で歩き続けるには、あまりに無謀な装備である。

はあ、とため息をついて、守哉はゆんの元へと走る。そして自分のカッターシャツを彼女の肩に被せた。

「かみや……」

「ごめんな。万一のことを考えて、耐寒用の服も持ってくるべきだったのに。全然効果ないけど、それで我慢してくれ。ほら、行こうぜ」

上半身がインナーだけになった守哉は、身震いもせずにゆんの手を引く。

「あいたっ」

声と共に、ゆんの足が止まり、守哉の手が引っ張られた。前屈みの彼女の足を見ると、サンダルから露出した指が赤く腫れてしまっていた。

「かみやー。いたいよー」

「ずっと雪にあたってからな。……よし」

守哉はゆんの手を離し、その場にしゃがみ込んだ。

「それじゃ歩けないだろ？　ほら、乗れよ」

「え、でも。それじゃかみやが辛い……」

いいから、と守哉は背中をゆんに向けた。彼女がしぶしぶ彼の背中に乗ると、守哉はばっ！　と唐突に立ち上がった。

「わあっ！」

背中のゆんが思わず可愛らしい声を上げる。

「へっへー。びっくりしただろ？」

守哉は笑顔をゆんに向ける。もう、と思いながら、ゆんはふとあ

ることに気づく。

「かみや……、体、すっごい冷たいよ？」

「あー。大丈夫だいじょーぶ」

あることを悟られないように、守哉はゆんと顔を合わせずに答える。

守哉たちは黙々と進み続けているが、未だに雪の中。吹雪も止む気配がない。

（……そろそろ、ヤバくなってきたかな）

守哉は虚ろな目をこする。彼の計算していたエネルギーはもうとっくに枯れ果てているはずである。つまり、いつ倒れてもおかしくない状態なのだ。

ふいに、背負っているゆんが体を起こした。

「あ、あれ何かな。かみや」

彼女は守哉の背中から降りて、吹雪の中を小走りで進んでいく。

「あんまり遠くに行くなよー」

「うん、すぐそこだから！……あっ、かみやーっ！　食べ物落ちてたよー！」

「こんな雪山に！？」

ゆんは小さな箱を持って帰ってきた。パッケージには英語しか書かれていないが、スプーンのイラストがついているから、彼女は食べ物と認識したらしい。守哉は、この箱の正体を知っていた。

「箱に入ってるから、お菓子だと思うけど……」

「ああ、これな、レーションて言って、非常食みたいなもんだ。たぶんパトロールしている警備員か登山客が落としたんだろう」

「へー。れーしょんっていうんだ。おいしい？」

「いや、非常食だからそんなに期待はできないな。……でも、お前すげえな！　よくこんなもの見つけたよ！」

「え、えへへ～。かみやの役に立てて嬉しいな……」

ゆんは頬を赤らめながら、下を向いて呟くように言った。

それに気づかない守哉は、さっさと箱を開け、中身を取り出す。よくダイエット食品として売っているスティック状の食べ物だった。

「よし。そのままでも食べられるタイプだから、座れる場所で食べよう」

守哉がおんぶしようとしゃがみ込むと、ゆんは胸を張り「大丈夫」

と言って歩き出した。

守哉とゆんは小さな洞窟にいた。

ゆんが意味不明な自信を持って守哉の手を引いていったところ、ここに辿り着いたのだ。本当に、恐ろしいほどの強運である。

それにしてもここは良い環境だった。入り口は風上だから中に冷たい空気が流れ込むことはなく、誰の落し物かライターがあったので、それを使って焚き火をすることができた。

食事を終えた二人は、吹雪が止んだら麓を目指そう、と今はここに駐留している。

守哉は少ない焚き木を、無駄遣いしないように細かく折ってから火に抛る。それを見て、焚き火を中心に向かい合って座っているゆんが彼に話しかけた。

「……かみや、ごめんなさい」

「あん？　何がだよ」

守哉はそこらに転がっている石を焚き火の周りに置きながら答える。

「ゆんの所為で、こんなことになっちゃって」

守哉はゆんを見る。被っている守哉のカッターシャツの袖を握り締めながらうずくまる体は震えていて、俯いた顔は今にでも泣き出しそうだった。

「ゆんが、わがまま言ったから。それで、かみやが辛い思いして……」

頭がいっぱいになって、上手く言葉にできないでいるようだ。

守哉は本日一番重いため息をついた。なんだこれは。こんなの、こいつらしくないだろ。

「ていっ」

「あたっ」

ムカつくから木の枝で頭をこちん、と叩いてやった。

ゆんは呆気にとられた顔で守哉を見た。その桃色の瞳は充血し腫れていて、艶のある綺麗な肌の頬は赤くなっている。これが、あの日あの時出会った少女だとは、全然思えない。

あのな、守哉は立ち上がった。

「言っとくけど、お前に迷惑かけられることぐらい承知でこっちは来てんだよ。何今さら謝ってんだっつの」

今の彼女には、辛い言葉だった。ゆんは無意識に俯いてしまう。

「だけどな」

守哉は焚き火をまたがってゆんの目の前に立つと、彼女の頭をしっかりホールド。彼女の頭を無理矢理こちらに向かせて、顔を思いっきり近づけた。

「ひゃうっ」

少しでも動かせば鼻と鼻が接触してしまうほどの至近距離で、守哉は続けた。

「それでもいいって思って来たんだ。これだけのデメリットがあるとしても良いと思えたんだ。つまり……。……なぜか分かるだろ？」

いきなり疑問形だった。

「わ、わかんにゃい……」

むぎゅーっ、と頭を固定されたゆんはおかしな発音で返事をする。それを聞いて、守哉は頬を赤らめた。どうやら言わずとも察して欲しかったらしい。

「……いいか、一回しか言わねえからな。リピート不可だからな。えっ、もう一回言って？　とか通用しないからなぁあ！」

最後は声が裏返ってしまった。それも踏まえてのあまりの迫力に、ゆんはただこくこくと頷くだけしかできない。守哉の手の所為で、それさえもあやふやだが。

守哉は大きく深呼吸すると、彼が今ここにいる理由を大きな声で

言い放つ。

「そ、それでも！　お前とならどんなことも楽しくなるって思えたからで！　つ、つつ、つまり……」

「お嬢様！　ご無事ですか！」

「え、え？」

守哉は状況の展開に全く追いつけなかった。

なんと二人の目の前に爺やが突如出現したのだ。

「あ、じいやん。だ、だいひょうふだよー」

ゆんは爺やに手をふらふら～とさせる。どうやって見つけたかは知らないが、爺やが助けに来てくれたようである。ゆんに発信機でもつけているだろうか。

ゆんを見つけて嬉しいはずなのに、なぜか爺やは硬直していた。

しばらく考えたあと、守哉はその答えに辿り着いた。ああ、なるほど。

人気のない洞窟、二人っきり、そして守哉はゆんの頭を持ち上げ顔を近づけている。

そして、守哉が上着を脱いでいたらもう完璧。あは。

「ぎゃああっ！　ち、違うんだ違うんですっ！　真堂守哉十六歳、決してそのような出来心下心は……！」

守哉は必死で爺やを説得する。だが、その誤解を解くにはあまりに場面がアレすぎる。

「か、守哉殿……！　その、生死を彷徨う環境で、緊張して頭が興奮状態になりがちだとしても、その矛先が、お、お嬢様とは！　りょ、了承は得られたのでございましょうか！？」

「うわーん！　俺そんなに可哀想な人間じゃないっす！」

泣きながら弁明を続ける守哉を、ゆんはぽけーっ、と見ていた。

「……あの、かみや？　そのう……さっきの続きは？」

終わった、と守哉は確信した。

「つっ、つつ、続きとは――ッ！　か、守哉殿ォオ！」

「かみや？　あれ、なんか燃え尽きてる」

最後の試合をやり終えたボクサーのように真っ白になりながら、守哉は思っていた。

（……こりゃ、なかなか大変な居候生活になりそうだぜ）

第二章　電波と龍と遭難記　その5

5

神掛家ダイニングにて、守哉はテーブルに突っ伏していた。

「つ、疲れた……！」

先ほどまで爺やとの大舌戦を終え、やっと誤解を解くことに成功した彼は、二日続きの徹夜の疲れもあり、もうそこから動けないでいる。誰からも信頼される立派な人間になろう、そう切に誓う守哉であった。

「あ、守哉―。シャワー終わったからどーぞー」

ダイニングにひょこっと顔を出したのは、それの一番の原因。キャミソールを羽織、髪をタオルでぐるぐる巻きにした姿は、一緒に住んでいる者しか見られない彼女の姿だ。

ゆんは守哉の隣に座ると、テーブルの上にあるリモコンを手に取り、スイッチを押して天井からスクリーンを出現させた。おお、金持ち。

大迫力画面でテレビを見ながら、ゆんは椅子の上に胡坐を掻いた。そして惜しげもなく、宝石を加工したような紅いショートヘアをタオルの束縛から解き放つと、それを無造作にぐしゃぐしゃー！　とタオルでかき回した。ここらへんはホント、ただの女子高生である。

ゆんから漂うリンスの香りが守哉の鼻孔をくすぐる。

「ねえ、かみやー」

「はい、なんしょ」

守哉は、ぐでー、とした姿勢のまま、明歌が注いでくれたココアを口に当てた。

「あの時、なんて言おうとしたの？」

ココアは噴き出した。あれ、なんかこの場面デジャヴ。

「ごほっ、ごは！」

「だ、大丈夫？」

ゆんに背中をさすってもらいながら、守哉は思考を働かせる。

（どうする。あの時は雰囲気というかノリというかで、今、言うのはちょっとなあ……）

「それで、なんて言おうとしたの？」

手を守哉の背中から離し、ゆんは再度守哉に問う。うっ、と守哉が息を詰まらせる。

「あ、あのな……」

「うん」

「その……」

「その？」

「～っ！　あ、あー疲れたなあ！　ちょっとひとっ風呂浴びてくるぜ！」

「えー！　なんかずるいよ、かみやー」

ゆんの言葉を無視して、守哉は席を立って歩き出す。

ダイニングを出る時、守哉の足が止まった。

「……にしても、あん時のアレは、本当の……」

龍のことである。あの時見たあれは決して幻とは思えない。もしかして、龍は本当に実在しているのだろうか。

そんなことを考えていると、ふいに、ゆんが見ていたニュースの音声が彼の耳に入った。

『海外のニュースです。昨日午前7時ごろ、エベレスト山に吹き上げる突風により、麓付近の集落が祭りに用いる龍の模型が宙を舞い、山頂辺りでは、「龍が現れた」と地元のカメラマンを驚かせました』

「……こういうことね」

第三章　学園と親友と救済記　その１

1

目覚めの良い朝だった。使用人用ではあるが十分ふかふかなベッドは、目覚めた守哉にまた新たな眠気を誘う。だが、彼は寝ていられない。

神掛家から、自分の部屋としてこの二階使用人室の一室を頂いたのだが、これがほんと使用人用とは思えない華やかさだった。例えるなら、旅先の一流旅館の個室。とは言ってもワンルームなのだが。十六畳の部屋の中心にはソファとテーブルのセット。その前には四十インチの液晶テレビ。壁側には木目の模様には職人の趣が感じられるタンスとクローゼット、化粧棚。反対側にはシングルにしては大きめのベッドが。

何より目を引かれるのはベランダつきの窓から見える絶景である。都内の端にある住宅地とその先に広がる海は、都会ならではの美しさだ。

使用人用の部屋でこれだけの待遇。ならばゆんや彼女の両親の部屋はどんなものだろう。

両親、といえば、守哉はゆんの両親に一度も会っていない。爺やの話によれば、父親は会社の仕事で滅多に帰ってこないらしい。母親に関しては海外旅行に出掛けているそうだ。

守哉は壁に掛かった時計を見る。午前五時。この時間に起きているのはせめて朝食の準備に取り掛かる使用人ぐらいだろう。神掛ゆんは、まだベッドの中で寝息を立てていることと思う。だが、守哉は彼女が起きてくるまで待つ気はない。

さっきも言ったとおり、ここは都内でも端っこの方だ。都内の中心に行くまで、幾度も電車を乗り継ぎする必要がある。つまり、彼の通う茜音学園に遅刻しないように行くためには、いつもより早めにここを出ねばならない。この家は郊外のあの家より学園に遠い。

守哉は配布された寝巻きを脱ぎ、タンスからジーンズを取り出す。

「……あれ、何で蝉羽学園の制服が掛けてあんだ？」

Tシャツを取り出すために開いたクローゼットの中には、なぜか都内の私立蝉羽学園の男子用制服が夏服、冬服、合服と全てそろった状態で掛かっていた。

以前ここに住んでいた人の忘れ物だろうか。

守哉は不思議に思いながらも、Tシャツを取り、私服に着替えて部屋を出た。

「あら、守哉君。おはよう」

振り向くと、そこにはまだ寝巻きのままで、眠そうに目をこする明歌がいた。彼女とは部屋が隣なので、恐らくちょうど守哉と一緒のタイミングで部屋から出てきたのだろう。

「おはようございまっす、明歌さん」

守哉は笑顔で挨拶を返す。その後、明歌と一緒にダイニングへと向かった。

「守哉君って意外と早起きなんですね」

「うーん、そうすねえ。何気に規則正しい生活を送ってましたし。……それより、明歌さんはパジャマのままでいいんすか？　食事の準備とかしなくても……」

はっ、と気づいて、明歌は慌てて寝ぐせを手で押さえた。

「あ、あはは。ええとですね、一応私も学校に通っていますし、朝の仕事はナシってことになっているんです」

「え、大学生ですか？」

「大学ではないです。福祉系の専門学校です。ここの使用人を務めているのは、それの実地演習という意味合いもあるんです」

とは言っても、つまりはただのバイトなんですけどね、と明歌は笑う。へえ、と感心しながら、守哉は階段を降りる。

「そういえば、守哉君はなんで私服なんですか？」

「え……それは」

制服は駅のロッカーにぶち込まれてまーす、とか言えない。

「えっとですね……。……私服で寝たからですよ。きっと」

きっと、とか言ってしまった。自分のことなのに推測してしまった。あ、どうしよう。

「あ、そうですかー」

だが、明歌はごく普通に納得した。あ、この人天然だ。

「そ、そうなんですよ」

苦笑いでそう言って、守哉の頭に違和感がよぎった。あれ、なんでろう。さっきの会話、何かがおかしい気がする。

「守哉君？　どうしたんですか」

「……。あ、いえ。何もないすよ」

そうお喋りを続けているうちに、守哉たちはダイニングへと辿り着いた。やはりそこにゆんやその両親の姿はなくて、爺やがテーブルの上に料理を並べていた。

「おや、明歌殿に守哉殿。おはようございます」

「おはようございます。爺や」

「おはようございまーす。おお、美味そうっ」

守哉はテーブルに並べられた料理を眺めながら、ヨダレを手で拭う。

朝食は豪華な食事ではなく、どちらかと言えば欧風の家庭料理に近いものだったが、それでも一品ひとつひとつが、普通の家庭ではメインを飾れるほどの輝きを持っていた。さすが料理長だ。守哉の脳内における物理法則を捻じ曲げただけのことはある。

守哉は急いで席に着くと、フォークとスプーンを手に握って、

「じゃあ、いただきま」

「あわわわわ！　や、ヤギちゃん！　たっ大変だよー！」

その時、ゆんが何やら慌てながら部屋に入ってきた。どうやら起きたばっかりらしく、その紅いショートヘアはくりん、と可愛くはねている。パジャマ姿も、うん、グッジョブ。

そんな間の抜けるような格好をした彼女は、すぐそこにいた明歌の袖を引っ張る。

「か、かみやが部屋にいないんだよう！　宇宙人に『あぶだくしゅん』されちゃったんだよきっと！」

アブダクション、といいたかったのだろうか。

え、あの、と明歌は言葉を詰まらせている。

「だって今日夢に宇宙人出てきたもん！　そしてゆんが連れて行かれそうになったところをかみやが助けてくれたんだよ。そして、かみやはゆんの代わりに……」

何かゆんの顔が意味不明に険しくなった。

実際にそんなことが起こったら、ゆんを置いて全力疾走で逃げるだろうな、と心で思う守哉であった。ちなみに彼の存在は彼女に気づかれていないようだ。

「と、とにかく！　守哉を助け出さないと！……ん？　ヤギちゃんどうしたの？　ずっとあっちを指差して……」

やっと明歌の人差し指の先を見たゆんは、やっと守哉と顔を合わせた。

「あ……」

「おう。おはよ」

ゆんは守哉を見つめたまま突っ立っている。そして、やっと思考が追いついたらしく、口をゆっくりと開いた。

「すごいかみや！　どうやってルパンの目を盗んで脱走したの！？」

「えええ！？　宇宙人の話は！？」

「……？　なに言ってるのかみや？　それは夢の話だよ」

「あれええ！？　俺の記憶が間違ってんの！？」

実際に間違えてはいないどころか、彼の記憶を疑う人間は脳科学界に一人もいない。だが、神掛ゆんという電波系ビビビ少女の前ではそんな理屈は通用しないのだ。

「？　かみやが何をびっくりしているかは知らないけど、無事でよかったよ」

「いや、そもそも一歩間違えたら無事じゃ済まない事態すら遭遇してねーし」

いや、昨日遭遇してたな、と守哉は苦笑い。

「むむ、おなか虫が鳴きそうだよ！　じいやん、ご飯食べるねっ」

ゆんはとてとてー、と歩いて守哉の隣に座ると、彼のほうを向いて天使のような笑顔を浮かべた。

「えへへ。かみやー、おはよう」

ここで守哉がフレンチトーストをくわえたまま、かっちーん、と硬直してしまっても、誰も彼を責めることはできない。

その笑顔に見つめられて、二十秒ほど経ったところで、ゆんに「どうしたの？　トースト冷たかったの？」と心配そうに声を掛けられるまで守哉の思考は停止していた。

「はっ！　お、俺は一体……！？」

現実に戻ってきた守哉は、なぜか汗だくだった。無理もない。彼の中ではニュークリア・エンジェルが、再びラストハートに侵入しかけていたからだ。

「くっ。一度ならず二度までも……！」

相変わらずゆんは不思議そうな表情で守哉を見ている。守哉のほうも、彼女にだけは絶対「変な人」だとか思われたくないので、「あっ、あははっ。おはよう！　ゆん！」と壮絶な苦笑いで挨拶を返した。パッと見、変な人である。

「……むむ？　何でかみやは私服なの？　制服は？」

「いや、だから私服で寝たん……」

言いかけて、守哉はあることに気がついた。先ほどの違和感の正体だ。

そうだ。よく思えば、守哉は一度も、ゆんや神掛家使用人に自分の制服姿を見せてはいない。だから高校生だということも知らないはずだ。いや、外見から「だいたい高校生」と分かったとしても、この前ここに来た時、彼の荷物に制服はなかった。――つまり、守哉は制服を着ていなくて当たり前のはずだ。彼女達の言動は、それに矛盾している。

「……なあ、ゆん。何で俺が高校生って分かったんだ？」

え？　とドーナツを食べる口が動きを止める。

「そして、俺に着替える制服はあったか？」

「――……っ！」

ゆんが目を見開く。ビンゴ。これは緻密に計画された、真堂守哉拉致事件だったの――。

「かみやー？　何言ってるの？　制服ならクローゼットの中にあるはずだよ？」

「ふん。そんなこと言っても無駄だぜ。なぜならな、クローゼットの中には俺のTシャツと蝉羽学園の男子用制服しか……」

……あれ。「男子用」制服……？

そういえば、ゆんの制服って確か、蝉羽学園の制服だったよな、と守哉は思い出す。

（あれえ？　それって、もしかしてのもしかして？）

「そうだよ、ちゃんとあったでしょ？　あれが今日から守哉の制服だよ」

ゆんは笑顔で答える。

なるほど。そうか。守哉は唐突に理解した。

自分が、ゆんの学校へ転校させられようとしていることを。

第三章　学園と親友と救済記　その2

2

私立茜音学園と言えば、全ての高等学校の夢「文武両道」を完璧に実現した有名校である。そこに足を踏み入れて許されるのは、学業とスポーツを極めた者だけだ。真堂守哉という例外を除いては、そのどちらかが優れていても門前払いになる結末が待っている。

改めて言う。茜音学園とは、勉強も運動もできる完璧人間だけが入ることを許されるエリート校である。そこで唯一の「特例」待遇真堂守哉は、いつものようにその真面目な校風を無視した格好で廊下を歩いていた。

ただひとつ、彼の袖を引っ張りながらついてくる少女を例外として。

「かーみーやー。まだ「とくれい」クラスには着かないのー？」

守哉の後ろで、少女はとても可愛らしい声を出して彼に話しかける。

守哉は思う。心なしか、すれ違う敵意ある視線がいつもより格段倍増している気がする。

「おい、あれ」「うっわ、不良の真堂があんな可愛い子連れてるよ」

「いやいや、可愛いってもんじゃないよあれは」「上手いこと真堂に騙されてんじゃねえ？」「アイキュー高いことをいいことに、って感じ」「……にしてもちくしょう、うらやまし……恨めしいぜ……！」

ムラムラした、やけに暑苦しいオーラが守哉を襲う。その原因は全て後ろの少女にある。

きゅっ、と被っているキャップ程度では隠しようのない可愛らしい顔。小野小町とクレオパトラと楊貴妃を足して、子供にしたらこうなるんだろうな、というとにかく世界三大美女の四人目に登録できそうなぐらいの魅力を持つ女の子、神掛ゆん。しかも最近はお金持ちのお嬢様というステータスまで追加された神の力作。それを、守哉が独り占めしているのだ。学園中の男が彼を呪っても、法律は許すかもしれない。

守哉は歩調を速めて、学園で唯一冷房が効いていないクラスを目指した。

「かみやー。置いていかないでよう」

ゆんが小走りで守哉についていく。殺気が、一層増した気がした。

「おらあッ！　超絶冷え性及び暖房依存症引きこもり童顔教師ィッ！　いるかァ！」

「ひゃあっ！　な、なんだ真堂～！　あたしはそんな不良少年に育てた覚えないぞ～！？」

突然大きな音を立てて開かれたドアに、ベッドで寝ていた女教師は飛び上がる。

「うっせんだよ！　だいたいこのクラス靴箱から遠すぎだろ！　どうにかしろやっ！」

「ひえ～。一教師のあたしにそんな権力はないぞ～」

よく言う。表向きはそうだとしても、裏の顔はその手で書かれたレポート一つで脳医学界を仰天させるほどの名声を持つ権威のくせに。童顔だけど。

怖～い、と毛布に包まって怯えるフリをしながら、脳木はやっとある存在に気づく。

「……あ、あれ？　真堂？　そちらの可愛い子ちゃんは？」

脳木は守哉の袖を引っ張っているゆんを指差す。守哉はどう答えればよいのか分からず、言葉に詰まった。

「えっと、な。うーん。あの」

「もっ、もしかして真堂の彼女か～！？　よくお前みたいなのに落とせたな～。はっ！　も、もしかして、あたしの未完成レポート『脳医学的な観点からの催眠術の可能性』を……」

「うわあ！　この学園に俺がゆんを自力で落とした、と思ってくれ

るやついねえ！　つうか、あんたの研究テーマ危なくない！？」

「……ノーベルの二の舞にならないように気をつける」

「怖え！」

脳木とぎゃあぎゃあ漫才を続ける守哉の袖がくいっ、と引っ張られた。見ると、ゆんが蚊帳の外に追い出されて困った顔をしている。

「かみや、この人は？」

「ああ、ごめんごめん。えっとな、こいつは俺の担任、童顔教師」

「ひえ～。可愛い教え子にこいつ呼ばわりされた～」

可愛い教え子なら、もっと真面目な授業しろよ、とうだった視線を向ける守哉を横目に、脳木は「と、とにか～く」と咳払いをした。

「真堂が説明したとおり、あたしがこいつの担任、脳木遙だあ。よろしくな～」

脳木はベッドから降りて、なぜか警戒して守哉の後ろに隠れるゆんに握手を求めた。

「あう、えっと。神掛ゆんだよ。よろしくね」

笑って、ゆんは脳木の手を握る。なんでだろう。こう見ると、普通に女子高生同士が友達の証として握手しているようにしか見えない。錯覚だろうか。

握手をし終えた二人は、笑顔で顔を見合わせている。どうやら打ち解けたらしい。やはり同年代の女の子はすぐに仲良くなるものらし――。

「あたしは二十二歳だあっ！」

守哉に再び『断熱性抜群！　冷え性おさらば毛布クン！』の猛威が襲い掛かった。

「ぎゃああっ！　あっ、熱いぃいい！！」

「か、かみやっ！？　……お、面白そうだね！」

「ちくしょー！　安全を保障されたスリル味わってるワケじゃねえんだぞお！」

守哉は本気で苦しんでいるのに、ゆんは全く助ける気がないらしい。むしろキラキラと目を輝かせて彼を見ている。

「まったく……。……で、真堂？　なんでこの子を連れてきたんだ～？　制服から見て、蝉羽学園の生徒のようだけど。この教室はデートスポットには向いてないぞ～？」

やっとのことで毛布を剥ぎ取った守哉は、ああ、と軽く答えた。

「俺、蝉羽学園に転校するからさ」

長い沈黙。

「……え？　し、真堂、今なんて？」

「だからさ、蝉羽学園に転校するから、手続きしてくんね？」

「かっ……」

脳木は一瞬めまいがしてくらっ、とベッドに倒れた。

「お、おい。大丈夫かよ」

「なずきん、大丈夫？」

ニックネームがついていた。だが今の脳木にはそんなこと関係ないらしく、放心状態でぶつぶつと何かをぼやいていた。「あたしの研究材料が～、奪われた～」など。守哉はモノ扱いだった。

第三章　学園と親友と救済記　その3

3

「かみやっ。ここが蝉羽学園だよ！」

「へー。お前が通ってる学校にしちゃ、けっこう普通っぽいな」

私立蝉羽学園。都内でも端っこの方に位置するこの学園は、学業にしても部活動にしても特に光るところはなく、大会でもたまに優勝したりしなかったり、大体その成績は中の上。要はどこにでもあるような平凡で普っ通な高等学校である。と守哉は聞いていた。

こうして校門から見る限り、実際その通り。四階建て校舎が二つ、少し大きめの体育館。都内では珍しいが、まあ郊外近くだから不自然ではない普通サイズの運動場。噂に聞くとおりの普通の学校である。

今はホームルームの時間だと聞いた通り、そこらをうろつく生徒は一人も見当たらない。

ここで新しい学校生活が始まるというのに、かみやはワクワクもドキドキもしていなかった。なぜなら、ここでも守哉は「特例」の扱いを受けるかもしれないからだ。それは、彼が編入のテストもせずに転校できたことが物語っている。「特例」扱いは受けなければ守哉の経済力では学費を払っていけない。だが、それでも学校中で

一人だけが特別扱いされるのは、他の生徒からしてみれば癪だろう。攻撃されるのは覚悟しなければいけない。

「かみや、こっちだよ」

ゆんに手を引かれて連れてこられたのは、校長室だった。豪勢なテーブルとソファ、棚には少しのトロフィーが豪華に飾られていて、壁には歴代学長達の写真が掛けてある。普通に、どこの高校のものと同じような部屋だった。だが、肝心の学長がいない。

「えっとね。先生に聞いたら、がくちょおじいちゃんはもう少しで来るそうだから、ここで待っててね」

「おう。お前はどうすんの？」

「えっへへー。ゆんは真面目だから、教室に行ってるよ」

彼女のステータスで唯一貧相な部分を堂々と張りながら、ゆんは鼻息を荒くして答えた。

「じゃあね、かみや。一緒のクラスになれるといいね」

そう言って、ゆんは校長室から出て行った。どうせ彼女と一緒のクラスにはなれないだろうな、と少々皮肉げに思いながら、守哉は学長の到着を待つ。

「じゃあ真堂君には、A組にいってもらおうかね。いつも賑やかで、いいクラスだ。すぐ慣れるだろう」

「……え？」

蝉羽胡蝶学園長の言葉に、守哉の口が不自然に動いた。ダンディな風貌を持つ胡蝶は、守哉の反応に不思議そうな顔を浮かべる。

「ん？　どうしたのかね？」

「あ、いや……。なんつーか、その」

賑やか、ということはつまり一般的な普通のクラスになる。

上手く言葉をまとめきれず、守哉が戸惑っていると、胡蝶はこりゃまたダンディな笑顔を浮かべて、彼の肩を掴んだ。

「茜音学園ではつらかったろう。だが、もう心配しなくていい。誰がなんと言おうと、この私の手の届く場所では、君を偏見し、差別するなどということは絶対にさせはしない」

「なんでそれを……？」

胡蝶は守哉の肩から手を離し、テーブルの上に置いてあった封筒を手に取った。確か、脳木が書いてくれた内申の書類だ。

「これを見て、すぐに茜音学園へ抗議に行ったよ。おかげで君に会うのが遅くなってしまったが……。ああ、それにしても、君の前担任は素晴らしい教師だったようだね」

あの童顔教師が？　守哉は胡蝶が人違いしているのではないかと思った。

「「特例」扱い、それを妬む生徒による守哉君への陰湿な攻撃……。茜音学園での君の置かれた状況がどういうものか、詳しく書かれていたよ」

「童顔教師が……。そんなことを……」

「私はこんな悲劇は繰り返してはいけないと思った。授業の進みが遅いのなら、別の勉強に取り組んでくれていい。君は、もっと学校に通うことの楽しさを知らなければいけない。だから、一人孤独の「特例」クラスではなく、四十人の普通クラスに君を入れたんだ」

守哉は何も言えなかった。頭がいっぱいになったのか、それともすっきりしたのか、どっちなのか分からない。

胡蝶は再び笑顔を作って守哉を見た。

「希代の天才児ではなく、一人の高校生として、これに納得してくれるかね？」

また守哉は何も言えなかった。言葉が出ない。だから、ただ頷くことしかできなかった。

久しぶりに、涙がしょっぱいことを知った。

4

守哉が立ち去った後、胡蝶はソファに腰掛け、テーブルに乗った封筒を手に取る。

胡蝶は封筒から一枚のメモ用紙を取り出すと、折り曲げられたそれを開いた。そこには、ある教師の筆跡でこう書かれていた。

『拝啓　蝉羽学園長　蝉羽胡蝶様

茜音学園からの異常なほどの待遇を受けたせいで、他の生徒から物理的、精神的な攻撃をぶつけられた彼は、その原因は全て自分にあると思い込んでしまっています。

自分が皆と違うから、自分が普通じゃないから。自分で自分を責めることの苦しさは、他にない苦しみだと思います。

ですので、蝉羽学園長殿にお願いがあります。そんな彼を救って欲しいのです。自分が他人から攻撃される原因は、自分にあるのではなく、茜音学園の「特例」扱いという過剰な待遇のせいだったのだと、気づかせて欲しいのです。

今後の彼に特別な待遇を与えるのではなく、一生徒として接して欲しいのです。たとえ天才的な頭脳を持っていたとしても、心は一介の高校生なのです。割り切っているつもりでも、心では底の見えないほどの闇を抱えているはずなのです。だから、だからこそ、

どうか彼に、自分が存在することの喜びを教え、心の闇から救ってあげてください。

彼を、心よりお願いいたします。　――――敬具』

読み終えて、胡蝶はメモ用紙を閉じた。その顔は、まるで孫を見守る祖父のような優しい表情をしていた。

これを書いた教師は、たしか理系だと彼は聞いていた。

第三章　学園と親友と救済記　その４

5

「あーっ！　かみやだ！」

「げっ。ゆんと一緒のクラスかよ」

それはそれは毎日が賑やかなことでしょう、守哉は一瞬にして蝉羽学園一年Ａ組の日常を悟った。すごい転校生である。

「げっ！？　今、げっ、って言ったかみや！？」

ゆんの後に続いて、クラス中からブーイングの連打。なるほど。クイズ大会同様、ここにゆんを仇名する者は一人もいない。Ａ組は全員彼女の虜である。普通の転校生なら、ここでこれからの希望に満ちた学校生活は幕を閉じる。

だが、守哉はそれらをさらっと受け流した。

「あー。言葉のアヤ的な？　内心では嬉しいけど素直になれない青少年の言動じゃない？」

「そ、そうなんだっ。じゃ、じゃあいいよ」

立ち上がっていたゆんがおどおどと席に着いた。納得するんだ！

と口をあんぐりさせるA組一同の反響も、でも、ゆんちゃんがそれでいいなら……と、しだいに収まっていく。

「……えーと。もういいか？」

彼を教室に入れた時点から、クラスの主導権をゆんと守哉に握られた担任男教師は、引きつった笑みを浮かべている。

「あ、すんません。どぞどぞ」

守哉にエスコートされて、担任は一つ咳払いをして教壇の机を叩いた。

「神掛のおかげで名前は知れ渡ったけど、転校生の真堂守哉君だ。ほい。拍手」

ぱ、ち、ぱち……。

「いえー！　かみやと一緒のクラスだー！　ぱちぱちー！」

ぱちぱちぱちぱ――ッ！！

「……お前ら、神掛にまじ点数稼ぎしてんな……。ま、とにかくそういうことだから。じゃあとりあえず真堂は窓際の一番後ろの席な」

教師は面倒臭そうに席を指差す。脳木ほどではないが、なかなかいい加減な教師である。

「えー。かみやはゆんの隣が良かったのにぃー」

ちょうど教室の中心辺りの席にいるゆんが批判の声を上げる。いや、そんなことは微塵も思ってなかったけど？　と守哉は胸の内で呟いた。

「神掛、しょうがないだろ。お前の周りの席は「席替え」という名のジャンケン戦争で勝利を勝ち取った者だけが座ることを許される聖域なんだぞ。それを侵害するということはつまり、真堂は真夜中、寝室に火炎瓶を投げ入れられる覚悟ができたってことだ」

ゆんは苦々しく「むむー」と唸り、しぶしぶ引き下がる。

とりあえず焼死体の末路は逃れた守哉だが、彼が席に辿り着くまでに、異様なほどの殺気が背中に張り付いていたのは気のせいとは思えない。

席について教室を見回してみる。……なるほど、このクラスで個性的なのはゆんだけではないらしい。ヘビメタのボーカルっすと言わんばかりの化粧男、膨れ上がった髪の所為で六頭身の体が三頭身になっているガングロ女、まだ一年生なのに何を目指しているのか「合格！」と書かれたハチマキを頭に巻きつけて勉強に打ち込むメガネ君、新撰組の半被を羽織った女の子は日本刀の刀身に見惚れている。

守哉は息を呑んだ。なんだこの教室は、なんだこの学園は。特に最後は濃すぎるぞ。彼は噂でこう聞いていた。「蝉羽学園は特に目立ったところがない、中途半端な学校だ」と。

逆だ。全てにおいて逆だ。有名の割には量産的な人間しか揃っていない茜音学園と、学業とスポーツに関しては映える実績のない、だがそこにいる生徒一人ひとりが極端すぎるほど個性的な蝉羽学園

――。自分は今日からここで学校生活を送る、そう思えば思うほど、彼の額に伝う汗は量を増す。

「あ、あの……。大丈夫ですか？」

守哉の頭がパンクする寸前で、隣の席から彼に声が掛かった。

そこには普通の女子高生がいた。

セミロングの茶髪、小動物のようにつぶらな黒い瞳、一般的な肌色の皮膚、そこそこ整った顔立ち……。特に個性的な部分はない、どこにでもいるような女の子がそこにはいた。

「その……、汗がすごいから……って、な、なんですか？　なんで私をそんなにキラキラした目で見つめているんですか……？」

気づけば、守哉は涙を拭っていた。

「うっ……。よかった、普通な子がいてくれて……。ひっく。そうだよなあ、そんなにアイデアの無駄遣いしてたらネタ切れしちまうもんなあ……」

「え……あの、誰に話しているんですか？」

心配そうに顔を覗き込んでくる彼女に、守哉は「あ、気にしないで」と手を振った。

普通な女の子は不思議そうにしながら頭を引っ込めた。

教壇では、いつもと変わらない……のだろうなと思われるホーム

ルームが始まっていた。

守哉がふとゆんの方を見てみると、いきなり目が合った。どうやら、ずっと見つめられていたようである。

もどかしい感情がこみ上げ戸惑う守哉に、ゆんは天使のような笑顔を浮かべると、隣の女の子から話しかけられ、視線を彼から離した。

「……なんだかなあ」

守哉は頭をぽりぽりと掻く。光栄、なことなのだろう。これは。

「……あ。ここの担任の木島先生、ほら俺より先に結婚した挙句、新婚旅行に出かけて副担任の俺に代理を押し付けたあの女。妊娠したっぽいんで、本日を持って辞任だとさ」

ホームルームの終わり辺り、すごく軽い感じで話された報告に、クラスの皆はずっこける。その中には守哉も含まれていた。

え、なに？　そんなさらっと言っていいモンなの？　つうか前担任も挨拶ぐらい来いよ！　といった感じである。

痛んだ腰をさすりながら席に戻っていく生徒たちを無視して、男教師は続ける。

「ということで、学長がさっき他校からクビにされた教師を連れてきた。俺も詳しいことは聞かされてないんだが、まあ、問題を起こしてクビになってしまっててても、教員免許さえ持ってりゃいいみたいな？」

しらっ、とした空気が教室を満たした。

無責任な発言により、クラス中から冷たい視線を受けた男教師は、ごほん！　と咳払い。

「そ、それでもだな！　確かアメリカのすごい大学の出らしくて、日本に呼ばれて教師になったらしいぞ」

そんでもってクビになったのか！　一体どんな問題教師だ！　生徒たちの不安は一層その色を増す。

男教師は「ま、まあ、大丈夫だろ」と苦笑いを浮かべながら教室を出て行った。野郎、尻尾巻いて逃げやがったか。

そして、直後、教室の扉がゆっくりと開けられた。

「――……っ！」

一瞬にしての沈黙。波打つ心臓、集まる期待。

一定のスピードを保って開いていく扉の先には、一体どんな人間がいるのだろう。

アメリカの有名大学を出て、どこへ行くのか極東の国で教職者の道へ。一度道を踏み外そうとも、その頭脳は行き止まりを知らなか

ったはず。それでもなお、拾い上げてもらうように再び教壇に立つこととなった一人の教師。今、その存在が蝉羽学園一年Ａ組一同に邂逅されようとしている。

さあ、いま扉が開けられて――。

「こんにちは～。新しくこのクラスの担任になった脳木遙だあ。皆、よろしくな～」

サイズ違いな白衣を肩に掛けた女の子が入ってきた。

沈黙が続き、生徒たちの間では秘密会議（こそこそ話し）が始まる。

「……え？　何アレ」「担任、とか言ってっけど」「いや、どうみても俺らとタメじゃん」「……よく斬れそう」「ドッキリ？」「転校生とか？」「にしても可愛いー。ゆんちゃんほどじゃないけど」「転校生二人かよー。うひょー」「つか朝だよな、今」「脳木遙ちゃんかー。天然そうでタイプかも」「じゃあ木島先生ホントは妊娠してないの？」「まぢー？　赤ちゃん見たかったんですけどみたいなー」

あちこちで想像が膨らんでいく中、ある二人の生徒だけは周りとは違うリアクションをしていた。

「な、なずきん！？」

「おま、童顔教師！　なんでいるんだっつの！」

「……ん？　おお、誰かと思えば真堂と可愛い子ちゃんじゃないか～。ごぶさたっ」

がばあ！　と立ち上がった守哉とゆんに、脳木はユルい反応を返す。

「いやっ、ごぶさたっ、じゃねえし！　だからなんでお前がここにいんだよ！」

「ああ、それか～」

急に脳木は明後日を見ているような顔になった。

「あの後な～、お前がいないから学園にいる意味はないしでクビになって、大学に戻ろうとして連絡を入れたら「ストーカーしてでも真堂守哉を研究するのがお前の仕事だろうが。十分な結果が出るまで帰国はさせない」とか言われて、途方に暮れていたところを蝉羽学園の学長さまさまが救ってくださったんだ～」

脳木は涙ぐむ。守哉が彼女の元を去ってから、彼女は彼女で感動的ストーリーを展開していたようである。

その全ての原因はというと、「へえ。なずきんにもいろいろあるんだねっ」とさも他人事のように頭をこくこく振っていた。いや、他人事ですけどね。

守哉達がこういったやり取りをしている間にも、クラスメイト会

議は進められていく。

「ええ、ゆんちゃんの知り合い！？」「大学とか言ってるぞ」「もしかして、本当に先生！？」「……より斬れそう」「真堂君を研究とか言ってる……」「なにげ真堂君となずきん何者！？」「童顔教師かー。……いいねえ。じゅるっ」「じゃあ木島先生の妊娠はホントなんだー」「まぢー？　赤ちゃん見れるんですけどみたいなー」

もはやひそひそでもないお喋りを続ける生徒たちに、脳木は「静まれ～」と言いながら手をぱちぱちと叩く。

「ともあれ、あたしが今日からここの担任だあ。ここに来るまでの経緯は長いから省く」

いや、さっき短く簡潔に説明してたじゃん。

生徒たちの無言のツッコミを完璧に無視して、脳木は教壇の机を勢い良く叩いた。

「それで、あたしが担任になるに連れて、一つだけ皆に了承してもらっておくことがある」

なんか要求してきた。キャラに似合わずあまりに真面目な顔をしているものだから、相当すごい内容なのだろうか、と思わず生徒達は息を呑んだ。

「あたし、冷え性気味だから、明日からこの教室に暖房いれるからな～」

どがあ！　と皆が一斉に椅子から落ちた。だがその中で守哉だけがすぐさま立ち上がる。

「んなもんダメに決まってんだろうが！　俺らは学校に修行しに来てるんじゃねえ！　あとお前よく冷え性『気味』って言えたなあ！　このイグアナ女が！」

「うぐっ！　し、真堂に拒否権はない～！」

「なんで！？」

「転校生だからだ～！」

「理不尽！？」

異論を却下された守哉に代わって、次にゆんが立ち上がる。

「な、なずきん！　さすがにそれはないよ！」

「ぬぬっ！　可愛い子ちゃんまで真堂に寝返ったか～！　あたしは一人見知らぬ場所で生きていかなければならないのか～。悲しいぞ～、うえ～ん」

泣いているフリをする脳木。だが人を泣かせたことなんて無いのであろう神掛ゆんちゃんは、それにあっさりと騙された。

「え、あの、な、泣いちゃダメだよう……。えと、ゆ、ゆんはなず

きんの味方だから……」

「ほ、ホントか～？」

脳木が顔をあげてゆんを見る。やはり、その顔に涙を流したような痕跡は無い。そんなことにも気づかず、ゆんはただ「う、うんっ。うんっ」と笑顔で頷く。

「そうか～、ありがとうな～」

脳木はケロリと笑顔になる。一瞬だけ零れた凶悪な笑みを、守哉は見逃さなかった。

脳医学界の権威。心理学もかじるその頭脳を駆使すれば手玉に取れない人間はいないということか……！　唯一それに耐性のある守哉も、なぜか手も足も出せない状況。

絶望的、という言葉がベェルリィーマッチュィ！　と言えるほどの事態だ。このままでは、今度は守哉だけでなく、ゆんを含むＡ組のクラスメイトが「脳木がお送りする生き地獄エブリデイ！」の餌食となってしまう。だが、守哉に為すべき手立ては皆無。ゆんが脳木側に入った以上、他の生徒は同意をせざるを得ない。

終わった。脳木とゆんを除くクラスの誰もがそう思ったとき、教室の扉は開かれた。

「先生！　もうホームルームは終わっています！　終わり次第、職員会議に集合と聞いていませんでしたか！？」

颯爽と現れた人物はなんと生徒だった。すらっとした細身には強弱のあるラインがくっきりとしている、モデルのようなスタイルの持ち主である。顔の方もアイドルよりは女優と比喩したほうが似合う美しい顔立ちで、漆黒の長髪と瞳による日本人の魅力がそれを一層引き立てている。少しつりあがった目がトゲのありそうなイメージを与える、全体的に凛とした女性だった。正直、脳木より遥かに大人っぽい。ちなみに守哉のすっごいタイプである。

彼女は教室にずかずかと踏み込むと、脳木の背中を押し、教室から出してしまった。

「ま、待て〜！　あたしはまだ生徒たちと語り明かさないといけないことがあ〜！」

「ほら、新任なんですから、他の教員との付き合いに努力する必要もあるんですよっ！」

黒髪の少女は完膚なきまでに抵抗する脳木を言葉でねじ伏せ、彼女をしぶしぶ職員会議に連れて行った。いや、視点によっては拉致と言ったほうが適しているかもしれない。

クラス全体が唖然とする中、何か勝手に危機は去った。

してクラスに日常が戻る。生徒達は各々お喋りを始め、次の授業の準備に取り掛かった。

ちなみにその中で、守哉はというと。

「まさかお前が脳木につくとは思わなかったぜ」

「かみやー。怒んないでよう」

「あのな、あと少しでこのクラスから大量の不登校児を出すところだったんだぞ」

「むー。なずきんてそんなに危ないんだ」

「使い方間違えたらヤバいな。まあ、とにかく、今後は童顔教師のペースに呑まれないように気いつけろよ」

「ほいほいっ。りょーかい！」

ゆんは可愛らしく敬礼の真似をした。それを偶然見ていた男子や女子が悶絶して倒れていく。しぐさの一つ一つが、恐ろしい破壊力である。

が、そんな彼女を狙うもの一名。

「ゆっんちゃーんっ！　週末はゆんちゃんに会えなくて、投獄された気分だったわー！」

ゆんの後方から伸びてきた両の手が、そのまま彼女を抱きしめた。

「きゃうっ。つ、つばちゃん！」

小動物のように体を震わせたゆんは、自分をがっちりホールドする人物の名を口にする。

「あへえん。やっぱゆんちゃん可愛過ぎー！　もう今すぐにでも押し倒したい気分だわ！」

と言ってゆんの背中から顔を出したのは、なんとさっきの黒髪の少女だった。だが、先ほどまでの突き刺すような雰囲気は今の彼女になく、ただ何かにうっとりしたような表情がそこにはあった。

つばちゃん、と呼ばれたその少女は、ゆんに膝カックンを極め、バランスを失った彼女の体を机の上にそっと置く。なかなか男子には刺激的な危ない構図となっております。

「ゆ、ゆんちゃん……！」

「つ、つつつばちゃんっ！？」

壮絶な顔を浮かべる黒髪の少女は息が荒く、すごく興奮しているようである。そして、その手がゆっくりとゆんの制服のボタンへ伸びていって――。

「ちょっと待ったァ――ッ！」

守哉はその手を掴み、ゆんの体を自分のほうへ引き寄せた。

「さすがにそれは行き過ぎ！　一応これ中高生向けに作ってあるから！……ておい！　待て！　ゾンビみたいな姿勢で近づいてくんな！　殿、お気を確かに！」

ゆんを庇うように前へ出た守哉を見て、黒髪の少女はやっと理性を取り戻した。

「はっ。わ、私は何を……！？」

「ボケてんじゃねえ。この犯罪予備軍が」

「ああ？　あんた誰よ。つか、さっきからゆんちゃんの傍にずっといるけど、何モンよ」

「逆ギレされた！　しかもすげー口調と態度が変わってる！」

黒髪の少女は最初の冷たいイメージを纏って守哉に突っかかる。

「まさかこの蝉羽椿の許可も得ずにゆんちゃんに近づく者がいたとはね。どういうことになるか、分かってんでしょうね？」

「何でこいつに近づくのにテメーの許可取らねえといけねえんだ。何様のつもりだ、あ？」

身長も大体同じぐらいの二人は、もうキスしてしまいそうなぐらい顔を近づけてガンを飛ばしあっている。きっとこの視線の間にタバコを入れたら火をつけることが可能だろう。

今すぐにでもバトル勃発しますぜ、というオーラを放つ二人の間に「もうっ。ケンカはダメなんだよう！」とゆんが割り込む。

「つばちゃん、この人はかみや。ゆんと一緒に住んでるんだよ。そしてかみや、この子はつばちゃん。B組で、がくちょおじいちゃんのお孫さんなんだよ」

ふうん、と守哉は鼻を鳴らす。対して蝉羽椿はなぜか間の抜けた

ような顔をしていた。

「え？　ゆんちゃん、イマナンテ？」

カタコトになっていた。

「だからね、つばちゃん。ゆんとかみやは一緒に住んでるの」

突然、椿の体はまるで時間が止まったかのように静止する。

「……。あー……。……ッ！？　ど、どどい、ど、同棲ッ！？　ゆんちゃんとこのチャラヒョロ男が同棲！？」

「チャラヒョロ男っ！？」

「がはっ」

守哉のリアクションも聞かないまま、椿はその場で気絶した。

第三章　学園と親友と救済記　その5

6

昼休み、と言えば生徒達が仲良しなグループに分かれ、それぞれ弁当や購買のパンの袋を開いてお喋りでもしながら、昼食を楽しむ時間である。

転校前の学校ではクラスメイトがいなかったからできなかったが、この学園ではそれが当たり前になると守哉は思っていた。

その例に漏れず、守哉もグループを作って料理長特製の弁当をつつきながら喋っている。

まあ、それを楽しんでいるかは置いといて。

「つまりを言うと、同性愛こそが、真の恋愛なのよ！」

「どう考えたらいきなりそんな結論に辿り着くんだよ！　スイーツの話題だったろ今！」

椿はカフェオレを一口飲むと、箸を突き立て、真剣味溢れた口調で言った。

「チーズケーキのタルトに卵は使われているでしょ？」

「まあ……、だから？」

どのケーキのタルトにも卵は使われているのだが。

「チーズ、卵。両方、メスの動物から生産されているのよ！　メス同士だからこそ、美味なものを生み出せるのよ！」

「お前はゆんと何を生み出す気だ！？　つうかそれ生物の種類が違うじゃん！」

「むー。ゆんも会話に入れて欲しいなあ」

ゆんがむすー、としてちゅうちゅうリンゴジュースをすすっている。

昼休みに入り、「かみやっ！　おべんと一緒に食べよっ」とニコニコ笑顔で守哉に寄ってきたゆんだったが、突如出現した椿に「こんな獣といたら穢れてしまうわ！」と捕獲され、それでも守哉と食事をすることを譲らなかった彼女に椿は「じゃ、あたしがこのチャラヒョロ男を見張るしかないようね」。ということで椿も一緒に昼食を摂ることになったのだが。

「あっ、ごめんね、ゆんちゃん。真堂がしつこいから」

「俺のせいかよ。お前が話を脱線させたから、ゆんが除け者になっちまったんだろうが」

「なんですって？」

「あんだよ？」

バチバチ、と向かい合う席で火花を散らす二人。それをゆんが「

まあまあ」と促す。いつもは周囲を振り回す彼女が、今回は鎮め役である。

「……まあいいわ。ゆんちゃんに免じてね。……それで、なんの話だったかしら」

椿が髪を掻き揚げる。露になった肌理の細かい首筋が無意識に守哉の視線を釘付けにする。ああもう、こんな性格と趣味じゃなかったら、恋に落ちるのは時間の問題だったのに。

「ゆんちゃんの魅力についての話？　それなら得意分野よ！　まず、この奇跡的に生まれた桜色の瞳！　その色は全ての人の心を癒し……」

「ただお前が語りたいだけだろ！　しかもそれ確実にゆんが入り込む余地ねえし！」

「いいのよ。ゆんちゃんは図解だから」

「会話に参加するどころかフリップ扱い！？」

「ゆんちゃんは物じゃない！　あんたは間違ってるわ！」

「誘導尋問！？」

「次にこの紅い髪！　情熱的かつ、眠れる獅子のような静けさを感じさせるこのカラーリングは……」

「流しやがった！　確信犯だこいつ！」

守哉を無視して、商品を紹介するセールスマンのように椿はゆんの魅力を話し続ける。

「あうう。な、なんか恥ずかしいな……」

そりゃ自分のことを隅々説明されるなんて、もどかしい事この上なしだろう。

「大丈夫よゆんちゃん！　ゆんちゃんに欠点など無いもの。むしろ胸を張るべきなのよ！」

「そ、そうなのかな」

椿の言葉に戸惑いながら、ゆんは守哉をちらっと見る。何かを求めているようだ。

「……まあ、蝉羽の言う通りなんじゃねえの？　十分可愛いよ、お前は」

そう言って、守哉は席を立った。

「そ、そそ、そうっ？　う、嬉しいな。……てあれ。かみや、どこいくのー？」

赤らめた頬に手を当てたゆんが訊ねると、かみやは「トーイレ」と手を振った。

「全く……。なんだあのボディーガードは」

守哉は負の感情を込めて呟く。蝉羽椿のことだ。

彼には一日を通して分かったことがある。まず、ゆんの可愛さはA組を魅了し、支配していること。確かにあんな絶世の美少女を目の前にすれば、性別関係なく誰もがひれ伏し頭を垂れることだろう。

だが、逆にそれは諸刃の剣となる。嫉妬や欲望、それらをゆんに抱く人間が必ず現れてくる。しかもゆんは予想以上に無防備なのだ。人をすぐに信用し、なつく。それは彼女の魅力の一つでもあるのだが、それが罠にはめられやすいという弱点に変わる。宝石を傷つける覚悟さえできれば、何時、誰でも彼女を仕留めることができる。

そんな危険をはらみながらもゆんが何事もなく過ごせているのは、蝉羽椿のお陰だ。

威嚇的な態度、突き刺すような雰囲気、それに兼ね備えられた美貌。そして一番に、学長の孫、というステータスを持つ彼女がゆんを保護することで、誰もゆんに危害を加えることができないようになっているのだ。当たり前だ。学園内では最高の権力を持つ学長に、何かいちゃもんを吹き込まれたら、これからの学校生活が危険になってくる。

故に、ゆんは蝉羽椿の好意を受け続ける間、何よりも安全に生活を送ることができる。

しかし、またそれもデメリットがある。先ほども述べたように、蝉羽椿の存在は強大だ。普通の生徒は彼女に遺憾を感じられるだけ

で恐怖を覚える。ゆんを守るためには、それはとてもありがたいものなのだが、

だからこそ、生徒たちがゆんに近づかなくなる。

すぐに気づいた。大抵のクラスメイトが、ゆんと距離を置いている。彼女が嫌われている訳ではない。男子も女子も、授業中は彼女をうっとり眺め、たまに目が合って笑顔なんて送られると悶絶して昇天しそうになっている。皆ゆんが好きなのだ。だが、その好意の寄せ方は「仲の良い友達」というよりは「テレビの向こうのアイドル」に向けたようなものに見えた。例えれば一流ブランドのバッグを、とても買えないから見るだけで満足している一般人のような態度だ。

確かに、ゆんと対峙するのには並の人間なら引け目を感じてしまう。「自分なんかがこんなすごい子と接していいのだろうか」と。自分もそうだったから、と守哉は思う。

だがそれは一時的なもので、人懐こい彼女はすぐに打ち解けあって、たちまち仲良くなってしまう。

なら、なぜクラスメイトならず他の生徒が彼女と遊んだり、共に食事したりしないのか。

その原因もまた、蝉羽椿にある。彼女のゆんに対する過剰な独占欲、それが他の生徒たちをゆんに近づけにくくしている。しかも、

だからと言って彼女をスルーしてゆんと接すると、彼女に嫌悪感を抱かれてしまう。そうすると学園生活が危うくなる。だから、誰もゆんと過剰に仲良くせず、適度な距離を置いてしまうのだ。

そして、目の前にいる少女もそういう人間の一人ということなのだろうか。

守哉はトイレを出た後、教室に向かって歩いていたのだが、ふと後ろから怪しげな足音が聞こえてきて、振り返ってみると、曲がり角に隠れてこちらをちらちら見てくる不審者（ただの女生徒）がいるではありませんか。それで近づいていって「おい。なにこそこそ見てんだ？」と聞いてみると、まさか気づかれていたとは思っていなかったのかびっくりして「はうっ。うう……。すみません。うう……」と泣き出すものだから、「ええ！？　お、おい！　なんで泣くんだよっ！」と守哉が慌てふためていると、いきなり手を掴まれ屋上に連れてこられたのだ。

昼休みの屋上は、昼食を摂る生徒や、ロマンチックに景色を眺めるカップル、「ここから落ちれば誰にも迷惑かけずに逝けるな……」と地面を眺める猫背の暗い生徒などなど、結構人気がある場所だった。

「……んで、桐野はなんで俺を尾行してたわけ？」

守哉はため息混じりに言うと、給水塔の壁に寄りかかった。

桐野紗希、と名乗る少女は、守哉の問いに「あう、あの」と口を開いた。ちなみにこの少女、ホームルームの時に喋ったあの少女である。

「あの、その、真堂君がすごいなあって思って……」
「はあ？」
「つ、椿ちゃんに屈せずゆんちゃんと接している人、初めて見たから……」
「……？　そしてなぜに尾行？」
「……私って、どこからどう見ても普通な人間ですよね……？」
「え、え？」
「はあ……こんなんだから、ゆんちゃんに近づけないのかも」
「えーと、すいません。話が噛み合ってませぬのですが」
額の汗を拭っている守哉を見て、紗希は慌てて「ご、ごめんなさい」と手を振った。
「……まあ、いいけど。なに？　ゆん絡み？」
「……！　ず、ずばり！　なんで分かったんですか！？」
「いや、ゆんちゃんって呟いてたし」
「はっ。確かに！」
「……それはいいからさ。で、ナニ？　桐野はゆんの友達なわけ？」

「ずばりです！」
「だからゆんと接したいけど、蝉羽が怖くて近づけないわけ？」
「ぐさり！」
「で、蝉羽を恐れずゆんと一緒にいる俺がすごいと思ったわけ？」
「ぐささっ！」
「それで俺に何かあるのも、と思って尾行に踏み出したり？」
「ぐっさー！　がはあ！」
「……」

守哉は再びため息をつく。説明してもらうつもりが、なんだかんだで全て自分で推理してしまった。紗希はリアクションをとっただけである。最後のやつとか女を捨てていた。

「あのな。別に俺は自ら進んでゆんに寄ってるわけじゃなくて、あっちが来るから一緒に行動してるだけだぜ？」
「がーん。……で、でも、椿ちゃんを恐れていないところはすごいと思います！」
「そうなんだ」
「そうなんです！」

「へえ」
「はい！」
「……」
「……」
……これでは話が進まない。仕方ないので、守哉は自分から話を展開していく。
「えーと。桐野は蝉羽のどこが怖いわけ？」
「全てです！」
「全て！？」
本人がいたら、今すぐに紗希をボコボコにしていることだろう。確かに怖い。
「間違えました。オーラです」
「それでも十分に酷い！」
「なんか近づいたら消滅しそうです」
「聖域！？　お前は悪霊かなんか！？」
「だってそんな感じしません？」

「俺にふらないで！　聞かれたら殺される！」
「あっ！　それです！　殺気です！」
「もはやバトル物のラスボス！　脇役ならその殺気だけでひれ伏す！」
「あの、真堂君。話、進めていいですか？」
「うわあ！　その困った顔むかつくう！」
崩れ落ちる守哉を見て、紗希は不思議そうな顔で彼を眺め、「実はですね」と切り出した。
「私とゆんちゃんは小学生からの友達だったんです。いつ、何をするときも一緒で、もう親友みたいな存在だったんです」
どっちかつうと「一緒に遊ぶ」より「遊ぶのに巻き込まれていた」に近い気がする。
「でも、椿ちゃんが現れてからは、私は彼女と触れ合うことが怖くなってしまったんです」
「……なんで？　蝉羽が怖いから？」
「それもありますけど、一番の理由は、私とゆんちゃんが本当に友達なのかなあって思ってしまって」
「はあ？　友達なんだろ？　蝉羽なんて無視して遊べばいいじゃねーか」

守哉が怒り気味に聞くと、紗希は物悲し気な顔をし、俯いて言った。

「だめなんですよ……。私みたいな平凡な人間なんて、超お金持ちのゆんちゃんや、次期生徒会長確定と言われている蝉羽さんとは釣り合わないです……」

「……！」

その言葉で守哉は即急に理解した。そうか。他のクラスメイトがゆんと距離を置くのにはもう一つ理由があったのか。

絶世の美少女プラス富豪のお姫様ゆん、はたして自分が彼女と接するのにふさわしい人間なのだろうか、誰もがそう思う。だが、それを感じさせないぐらいに彼女は人懐こい。だから、大抵の人間はそれを意識せずに彼女と対峙することができる。

だが、嫌でもそれを意識しなければならなくなった時、彼らはゆんと自発的に触れ合うことができるだろうか。

蝉羽椿。見るものを魅了する美しい風貌、兼ね備えられた知性、学長の娘であると言う風格、ゆんに対する異常な感情さえ除けば、彼女は非の打ち所の無い完璧な人間だ。

そんな人間が、ゆんの傍にいて、それを見る者は皆こう思う。

「ああ。やっぱり彼女たちは自分たちとは住んでいる世界が違う。お似合いだ」と。

きっと、恥ずかしくなるのだと思う。まるで、田舎で農作業している人が、そのままの姿でファッションショーのステージの上に立たされた時の様な、場違いがすぎる羞恥心。

誰もがそれを恐れ、ゆんから遠ざかっていく。世界が違う、自分では釣り合わない、と。

違う。

それを守哉は心からそれを否定した。

「釣り合うとか、釣り合わないとか、そんなくだらない事、ゆんは気にしてないと思うぜ？」

え？　と紗希が顔を上げる。守哉は意思の篭った強い瞳で彼女の目を見据え、口では笑みを作っていた。

これが答えだ。

「俺らがあんな超人と釣り合うかどうかとか、考えたって無駄なんだよ」

そうだ。言わせれば、紗希とゆんより、守哉とゆんのほうが全く釣り合っていない。それでも彼女は守哉を懐に迎え入れた。つまりはそういうことである。

神掛ゆんは、自分の住む世界とか、誰が自分と釣り合うとか、そういう小さいことは気にしてないんだと、思う。

それなのに、周りの人間が勝手にそれを気にして、彼女から遠ざ

かってしまう。

それが、どれだけ自分勝手なことか。それこそが人間のエゴというものだろう。

「……でも」

紗希は怯えたように言葉を紡ぐ。

「でも、とかじゃなくてな。だいたいお前も分かってるんじゃねえの？」

「――……え？」

「だいたいそんなの、端っから関係ないんだよ。一番大切なのって、なんかさ、心？　気持ち？　みたいなモンなんじゃない？」

なんかクサいセリフだな、と守哉は恥ずかしそうに頭をぽりぽりと掻く。

「だから、えっと。特別とか普通とか関係なくて、ただゆんと仲良くしたい、て気持ちさえあれば、何もあいつと接することに引け目なんて感じることはねえんだよ」

自分で言っておいてすごく照れくさくなった守哉は、視界を明後日の方向に移す。だけど一応相手の反応も見ておきたいので、横顔でチラリと紗希を見る。

紗希は、なぜか目を見開いて守哉を見ていた。しかも意味不明に顔を赤らめて。

そして笑顔になったかと思うと、彼の手を握り、キラキラした視線を送ってきた。

「そ、そうですよね。真堂君の言うとおりです。私、多分どこかでは分かっていたんです。でも、その気持ちに自信が持てなくて……。でも！　今の真堂君の言葉で、勇気をもらいました！」

女の子に手を握られて、心拍数を上げながらも「そ、そう？」と守哉は相槌を打つ。

「ようし。元気出てきました！　ゆんちゃんの元へ行きましょう！」

守哉の返事も待たずに、紗希は彼の手をぐいぐい引っ張って教室を目指していく。

「……あ、でも。もうひとつ問題がありました」

教室の前でふいに足を止めた紗希は、泣きそうな顔で守哉を見た。

「なんだかんで私、椿ちゃんが怖いですう～！」

「そうだったな……。大丈夫だよ、俺がついてるから。殺気にアテられたら助けてやるぜ」

そう言って、守哉は繋いだ紗希の手を強く握った。

「……！　し、真堂君っ」

紗希の顔が真っ赤になる。が、守哉はそれに気づかずに、先導するように彼女の前に立ち、教室の扉を開け放った。

教室の中心には、椿と楽しそうに話しているゆんの姿があった。お喋りに夢中になっているようで、まだこちらには気づいていない。

「ほら、いくぞ」

「あ、あう」

不安げな表情の紗希に、守哉は優しく笑いかける。そして、二人は互いに強く手を握ったまま歩き出した。

「あっ。かみやだ」

守哉たちに気づいたゆんが、彼を見て不思議そうな顔をした。

「あれ、かみや？　いつからさっちゃんと仲良くなったの？」

その言葉に、隣にいた椿が、ぼっ！　と勢い良く振り返る。そして守哉と紗希を見ると、声にならない絶叫を表情で表した。

「し、真堂！　あ、あんた！　ゆんちゃんに飽き足らず、他の女性に手を出すなんて……！　しかも桐野さんじゃないの！」

蝉羽に名前を呼ばれて、紗希はビクウ！　と体を震わせた。

「お前はそういう系統の考えしかできねえのか発情女！　って、蝉羽と桐野、知り合い？」

守哉が紗希を見ると、彼女は頭をふるふると横に振った。「会って話したことはないけど」と椿が口を開く。

「ゆんちゃんの友達は私の友達……ってことでゆんちゃんの友人関係を調べ上げた時に一番初めに出てきた人だから、よく覚えていたし」

「よく覚えていたし……じゃねえ！　お前、完璧にゆんをストーカーしてんじゃねえか！」

「愛を育むためには、まずお互いのことを知らないと……」

「一方的にしか思えないんだけど！」

「失礼な！　私はゆんちゃんに履歴書を渡しているわ！」

「書類で作る友好関係！？　どんだけ不器用！？」

「神掛家使用人のオーディション女性の部は、最終選考で落ちちゃったけど」

「危ねえー！　明歌さん受かってくれてありがとう！」

「だいたいあんたは何なのよ！　使用人でもないくせにゆんちゃんと一つ屋根の下なんて……！　羨まし過ぎるじゃない！」

「素直だけど動機は不純！」

「……あの～？」

蚊帳の外に追いやられて、ゆんと紗希は涙目でこちらを見ていた。

「またゆん置いてけぼりだよう。かみやとつばちゃん、仲良いんだね」

何気ないゆんの一言に、守哉と椿は「はあ！？」と同時に叫んだ。

「おま、ふざけてんの！？　俺がこんな悪趣味レズ女と仲良いわけねえだろが！」

「ゆんちゃんが言うことだとしても、さすがにそれは否定するわ！　私がこんなチャラヒョロ男と仲良くする意味が見出せないっ！」

「ちょ、お前、そのチャラヒョロ男ってのやめろよ！」

「ふん！　だってそうじゃない、チャラチャラしてて、ヒョロヒョロしている男、真堂守哉。略してチャラヒョロ男ッ！　ばっちりよ！」

「ぐあーいらつく！　この痴女が！」

「ち、ちち、痴女ですって！？　この……」

次から次へと襲い掛かる互いの存在否定材料の嵐に、ゆんは硬く耳を塞ぐ。

「ゆ、ゆんちゃん……？　大丈夫？」

ふらふら～と揺れるゆんの肩を掴みながら、紗希は彼女の意識を確認する。

「あう～。さっちゃん、助けて～」

無理です、と紗希は目の前に聳える巨人の罵りあいを見て、切な本音をこぼす。

「……そういえば、さっちゃんと話すの、久しぶりだね」

「あ……、そ、そうだね」

紗希がそっけない返事を返すと、ゆんは「もうっ」と頬を膨らませた。

「ずっと遊んでくれなかったから、寂しかったんだよう？」

「……？　寂しかった……？」

驚いた顔をする紗希に、ゆんは可愛らしい怒り顔のまま「そだよう」と言った。

「で、でも、椿ちゃんがいたから……」

「つばちゃんは別だよう」

「……え？」

さらに頭上の疑問符を増やし続ける紗希に、ゆんは、だから、と

口を開く。

「さっちゃんはゆんの『おやとも』なんだから、いつも一緒にいてくれなかったら、寂しいのは当たり前だよう」

親友、と言ったつもりなのだろう。

その言葉に、紗希の動きが止まる。いつの間にか言葉の銃撃戦を終えた守哉と椿も、きょとんとした表情で紗希とゆんを眺めている。

「し、親友……？」

「あ、それそれ。しんゆー」

「私とゆんちゃんが……？」

「えっ？　一番仲の良い友達ってそう言うんじゃないの？　違った？」

そこで、紗希の言葉は途切れた。もう聞きたいことも、言いたいことも終わったのか、硬く口を閉ざすと、そのまま俯いてしまった。

「え、あれ？　さ、さっちゃん？　どうしたの……って、きゃっ」

顔は伏せたまま、紗希はゆんを抱きしめた。

「さ、さっちゃん……？」

「あ、……う……」

「あう？」

「ありがとう……。ゆんちゃん、ありがとう……！」

「え……」

「私……ひっく、本当は、うっ、分かって、いたのに……。自信が、持てなくて、ひっ。ゆんちゃんの気持ちなんて、ひう、考えないで……、ごめんなさい……！」

「さっちゃん……」

きっと紗希の言っていることはゆんに正確には伝わっていない。だが、想いは伝わったのだろうか、ゆんは彼女の体を優しく包んだ。

「そうだよね……、私達、うっ、し、親友だよね……？」

頬を真っ赤に染め、瞳から大粒の涙を溢す紗希は、嗚咽がこぼれる唇を必死に動かした。

それに応えるように、優しい表情を浮かべたゆんは、子供をなだめる母親のような口調で、言った。

「そうだよ……？　ゆんとさっちゃんはずっと、しんゆー、だよ」

7

「……ほーい。じゃ、終わり～。寄り道してもいいけど先生が責任を取らないといけなくなる事態は避けて帰れよ～」

脳木の文字通り無責任な言葉と共に、ホームルーム終了のチャイムが鳴る。

クラスメイトがぞろぞろと帰り支度を済ませ、教室から出て行く中で、守哉一人だけが席に座ったままで、窓から見える夕暮れの空を眺めていた。

常人の知能指数などゆうに凌駕するその頭脳は、先ほどからあることばかり考えている。

『だから、えっと。特別とか普通とか関係なくて、ただゆんと仲良くしたい、て気持ちさえあれば、何もあいつと接することに引け目なんて感じることはねえんだよ』

今日、彼はこんなことを言った。一見すればただのクサいセリフ……。だが、彼がこんなことを言うのは、彼の人間性を知る者から見れば至極ありえないことだった。

彼は普通ではない。育った環境も、その能力も全て、そこらに転がる凡人とは比べ物にならないほどの「異常」を持つ彼は、いつでもそれを嫌悪しながら生きてきた。そして、「異常」な自分と、「普通」な周囲、それらは絶対に相容れないものだと考えていたのだ。

そんな彼が「特別とか普通とか関係ない」と言った。「接することに引け目なんて感じなくていい」と言った。

なんであのような台詞を吐いたのか、彼は今でも理解できない。自分の中で、何かが変わろうとしているのか。全く分からない。だが、実際にそうだとしたら、その原因は――。

「かみやーっ！　一緒に帰ろ！」

支度を済ませたゆんが、彼の元に走ってきた。彼女は落ち着きのない足踏みをしながら、

「ほら、早くっ。校門でつばちゃんとさっちゃんが待ってるんだよう！」

「あーはいはい。とっとと支度すっから、おら、そこジャマ」

守哉は立ち上がり、机の横に掛けた鞄を持って出口へ向かった。

「あーっ。かみや歩くの早いー」

「うっせ。お前のトコトコ歩調に合わせてたら蝉羽に殴られちまうだろーが」

後方から小走りでゆんがついてくる。

「ううー。疲れてきたよう」

守哉のペースに合わせて、足の悲鳴を感じ取ったゆんは嘆きの声を上げる。

うだった表情の彼女を見て、守哉はため息をつくと、その歩みを少し緩めた。

「えへへ。ありがと」

守哉に並んだゆんが、彼に天使のような笑顔を向ける。

それに目を奪われながら、守哉の頭にある言葉が浮かんだ。

『上でも下でも、飛び出たヤツははじき出される』

ゆんと再会したあの日、ひったくり犯の青年が言った言葉だ。……正直、守哉はこの考えには賛成している。なぜなら、自分も大体こういう価値観の元、生活していたからだ。

なぜ今になってこんなことを思い出したのかは分からない。だが、

「ようし！　校門までかけっこだよ、かみや！　よいどん！」

「掛け声早ッ！　つかお前が疲れたって言ったから珍しく気ィかけてやったってのに……。ふっ。いいだろう、この真堂守哉サマに競走を申し込んだことを後悔させてやるぜ小娘！」

守哉は勢い良く駆け出した。前を走るゆんに追いつくように。

自分は、変わっていくのだろうか。

この少女の隣にいることで。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記　その０

平和は唐突に壊れる。これは、様々な創作物において重要な要素だと思う。

絵本、漫画、小説、ドラマ、映画……原点では神話まで、基本的なこれらのストーリーは、とあるトラブルによって展開されていく。物語作りに「起承転結」が重要視されるのもこのため。

だがそれは、創作においてだけの問題ではない。現実に存在するものにも、そういう「起承転結」が当てはまるストーリーがある。生まれながら裕福に過ごしていたら突然、貧乏人に、みたいな人間の転落人生なんかが例に挙げられる。

まあ、要は最初に言ったとおり、平和は唐突に壊れる、って言いたいのである。

初夏も終わりを告げ、そろそろ本格的な夏に入ってきた頃。まだ住み着いて一ヶ月も経っていないのだが、守哉はそれなりに神掛家の生活に順応しつつあった。

それは、ヒグラシの切ない呟きの代わりに、アブラゼミのウザったい叫びが快晴の空に響く、そんな夏真っ盛りな日の話。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（前編）その１

1

開け放たれた窓から入る涼しげな風が部屋を吹き抜けていく。その風は守哉の髪を揺らし、手元の文庫本のページをぱらぱらとめくる。

心地よい昼下がりのひとときに、思わず睡魔が足音を立てて来る。

だが、守哉の眼前にいる少女はその悪魔を完璧スルーして、銃の模型を持ち、テレビ画面に映るゾンビたちに騒がしく挑んでいる。

「てやあ！　ばんばん、よし！　このうっ！」

もちろん、これはゲームの主人公が出している声ではない。ホラー系の主人公がこんな緊迫感の欠片もないロリ声を発するはずない。

「あ、あれ？　うわっ！　あ、ああ！　ぎゃーっ！　ぐ、ぐはっ……」

銃を落として崩れ落ちる少女を見ながら、守哉は「お疲れ様でした」の顔を浮かべる。

その場でうずくまるゆんから視線をはずして、ふと画面を見てみると、そこには恐ろしい数字が叩き出されていた。

『ゲームオーバー　……命中率――１００％』

とりあえず吹き出した守哉は、ごほごほと咽ながらゆんに尋ねる。

「けほっ。お、お前、それでナニゆえゲームオーバーげほ！？」

よく考えてみると、そういえばゆんは神懸かりな強運を持っていた。彼女が射撃をする場合、「数撃ちゃ当たる」ではなくて「数撃ちゃ全部当たる」なのだろう。

それならば、なぜゲームオーバーなど、この数字から不可能に思える結果が出たのか。

「うう……。リロードがあ。リロードのやり方が分かんなかったんだよう」

「ッ！　リ……ロード、だとう！？」

その手があったか！　守哉の頭の中に存在していた無数の疑問符が感嘆符に転換される。

「こ、これをアハ体験というのか……！　おお、すげえ。今、俺の頭は活性化しているぞお！　あは！　アハァ！」

「……かみやが気持ち悪くなったー」

と言うか、彼の頭脳はほぼ世界一活性化しているので、これ以上のそれは必要ないように思えるのだが、当の本人はそんなこと気にせず、ただ初めて味わった「何度考えても分からなかったことが一

瞬にして理解できた時のスッキリ感」を堪能していた。そこにいまであったの「睡魔」という存在は微塵も残っていない。

なんか一人で盛り上がっている守哉を横目に、呆れ顔のゆんはゲームのリベンジに励む。

だが、何度やっても弾切れになった時の対処法が分からず、ついには近づいてきたゾンビ達にリンチされてゲームオーバーになってしまう。

「……この子には、学習能力っていうものが備わっていないのかしら？」

「うう、うがー！　なんかその嫌味なお母さん口調いらいらする！」

ゆんは銃の模型をぶんぶん振り回しながら頬を膨らませる。そしてむすーっ、としながら銃を放り投げた。それが山なりの軌道を描いて床に落ちていく様を守哉が目で追う。

ずかずかと歩くゆんは守哉の隣に座る。紅い髪から漂う甘い香りが彼の鼻孔をくすぐる。

「むー。だいたい、こんな天気の日に部屋でおとなしくしているってのが無理なんだよう」

「仕方ねーだろ？　大事な客が来るらしいじゃん。お前が家中暴れまくってたら迷惑だろ」

文庫本のページを捲りながら、守哉は言う。

彼の言葉に、隣の少女は駄々をこねるようにソファの上でじたばたする。

そう、守哉が言ったように、彼らが部屋でのんびり過ごしているのは、今日、神掛家に大事な客が来る予定があり、それなのに料理長が出払っているから、料理などの準備に追われる明歌や爺やに代わって守哉がゆんの子守をしている、という理由がある。

彼女の言うとおり外に出かけてもいいのだが、それはそれで面倒なことになる可能性が大なので、自分の部屋にておとなしくしてもらうことにした。

とにかく賢明な判断ではあるが、唯一、当の対象は不満だらけですよオーラを存分に放出しまくっている。

「む～、むっむっむ、むむ～む。むぅ～っむ！」

「そこ、うめき声でリズムを取らない」

「だって何にもすることがないんだもん！　暇なんだよう！　かみや、何かしてよう。これじゃ『生きじごきゅ』ってやつだよ～」

じごきゅって何だよ、と心でツッコむ守哉。確かに、アクティブ精神マックス電波ゆんゆん少女にとって、部屋の中で暇を弄ぶのは地獄に近い仕打ちなのだろう。

守哉が神掛家に来て初めての週末は、絶対に「休」日とは呼べないものだった。

昨日……土曜の屋敷をステージにしたサバイバル鬼ごっこ（鬼は

モデルガンを持って、一般人に乱射してくる。時間内に全員撃ち終われば鬼の勝ち）はもう惨劇と呼べる。

鬼はもちろんゆんで、屋敷にいる全ての人間が標的となった。全員がゆんから軽い気持ちで逃げ惑う中、最初の料理長の断末魔を始めに、次々とあちこちから悲鳴がしたのだ。しかも、その悲鳴はだんだん守哉に近づいてくる。これは尋常ではない、と守哉は悟る。突然、降り出した豪雨、雷による停電。そして、逃げ続け、行き止まりに辿り着いた守哉の背後に気配。振り向いても暗闇。静かに響く秒針の音。その時、雷が光る。照らされて、守哉の目の前に姿を見せたそれは――……。

これ以上は思い出したくない。いや、相当のトラウマなのか、思い出せない。あの時、自分の目の前に現れたのは何だったのか。ゆんであることを願いたい。それほど気になるのなら彼女に訊けばいいのに、体がそれを拒む。真実に近づこうとすれば、頭痛が走る。だから守哉は未だにその答えを知らない。知らないほうが身のためだと体が訴える。

それに比べ、今日のなんと平和なことか。

守哉はチラリとゆんを見る。このままではテーブルクロスを首に巻きつけてベランダから「ふははは！」とか言って飛び降りてしまうかもしれない。

「そうだな……。じゃあ、手品でもする？」

「えっ？　かみや、手品できるの！？　すごおい！　やってやって！」

がばあっ！　と身を乗り出し、守哉の言葉に食いつくゆん。

それを促すように、守哉は文庫本を、ぱたん、と閉じ、笑顔で彼女を見た。

「はっはっは。そうだなー。じゃあ、ゆん、ちょっとそこの窓の前に立ってみろ」

「らじゃー！」

ゆんは飛び跳ねるようにソファから立ち上がると、急いで窓の方へ駆け出す。

窓の前に立ったゆんは、「つ、次はどうするの？」とキラキラした視線を守哉に向ける。それに応えるように、守哉もニコニコ笑顔を浮かべる。

「よし、そのまま目を閉じる」

「ぱちっ」

「そして後ろを向く」

「くるりっ」

「そして悪魔を呼び出す魔法の呪文。エネス、マイザゴ、デ、キンテオイヨモ、ウヨキ～」

「は～っは、え、えねしゅ、まいざーご、ほにゃらら～」

呪文を唱えながら守哉は手拍子を打つ。目を瞑っているゆんは、それを聞く度に体を小さく震わせる。

「……ウヨリ、あ、いや、完了。ゆん、ゆっくりと目を開けてみな」

「？　目を開けても、窓があるだけだと思うよう？」

そんなことを言いながらも、期待に胸を膨らませ、ゆんは軽い瞼を徐々に開いていく。

「ほら、窓のガラスにちっこい悪魔が映ってるだろ？」

次の瞬間、銃の模型が守哉の顔面に直撃した。

「がはあ！」

ソファから滑り落ちた守哉に、次から次へと様々なゲームのコントローラーが降り注ぐ。

「ぎゃああ！　おたっ、お助け！　おうッ！　さ、刺さってます！　剣劇アクションゲームの擬似コントローラーの先端が、私めの肛門なる部分にストライクでございます！」

「もうっ！　つまりそれってゆんが悪魔だって言いたいのかみや！？　ていうかそもそも手品じゃないしい！」

「い、いや、これは悪魔じゃなくて『小悪魔』と言いたくて、つまりは可愛らしいという形容詞を比喩してみたもので、何気ない日常のスキンシップ的な痛え！　あだだ！　あのうお嬢様！　モデルガンでもプラスチック弾を撃たれれば痛いのでありますですわよ！？」

しかもその一発一発が上手いこと急所にヒットしていれば尚更のことである。命中率１００％、現実世界でも健在。

パパパパ！　とハンドガンから出るマシンガンみたいな銃声が部屋に鳴り響く。

クッションを盾に床の上でうずくまる守哉はゆんの怒りが収まるのを待っていたが、案外それが早くきたのか、ふいに銃声は止んだ。

「〜っ！……、……あれ？　撃ってこない……？」

怯えた顔を上げた守哉の目に映ったのは、ぼうっと足元の床を眺めているゆんだった。

守哉は彼女の視線の先を追ってみたが、そこにあるのは無数のプラスチック弾の山だけ。

「……ゆん？　ど、どうしたんだ？　毒電波でも受信しましたか？」

ゆんはその場にしゃがみ込むと、床を見つめたまま口を開いた。

「わあ、かみやー。鉛弾が飛んできたよ？」

「はあ？　ナニ分けわかんねーこと言っ」

その時、開け放たれた窓から大量の銃弾が撃ち込まれてきた。

「わああ！　ばんばん飛んできてるじゃねーか！　あぶねええ！」

さっきまでのゆんによる射撃とは比べ物にならないほどの迫力は、実弾による打弾と跳弾の嵐が織り成す脅威がかもし出している。

何発かが、守哉の文庫本をズタズタにした。跳弾した一発が守哉の頬を掠め、赤い液体が伝っていく。ちょっとカッコいい。

「わあ、『じゅうたんばくげき』ってやつだー」

「微妙に違う！　と、とにかく、ゆん！　逃げるぞ！」

守哉はすぐさま起き上がり、突っ立っているゆんの手を引いて急いで部屋から抜け出した。彼にしてもゆんにしても、こういう状況で冷静に物事を考えられるところはやはり普通ではない。ゆんに関しては、銃弾が命中するどころか掠ってさえいないところが素晴らしい。命中率といい回避率といい、こいつと銃撃戦をして、勝てる自信が湧かない。

勢い良く廊下に身を投げ出し、ドアを閉める。それに背中を預けて、守哉はずるずると床にへたりこんだ。

「はあっ、はっ。な、なんなんだよあれは……！」

「これは、アレだよね。自殺に見せかけた他殺」

「どこが！？　果てしなく目が節穴だらけの監察官だなおい！」

「そうだよね！　ゆんたちを狙う動機がないもんね！」
「いやっほい話が噛み合わないぜい！　でも確かに、俺らが狙われる理由なんて……」
そこまで言って、守哉は硬直した。……あれえ？　めちゃくちゃあるんだけど？　チンピラから地元のヤクザまで、多彩なバリエーションでお送りしているんですけどお！？
「ちくしょう、たかが千円から一万円ぐらいだろ！？　許しておくれよ！　多分さっきの襲撃で銃弾のお代一万越えてるぞ！？」
「……？　かみや？　なに言ってるの」
ゆんのきょとんとした表情に、守哉はハッとした。
「そっか、お前、知らないんだったな」
「何が？　ゆんほどではないけど、かみやが頭いいってこと？」
「なぜかこめかみが引きつる言葉ありがとう。それじゃないけど、知らない方がいいな」
「ええー！　教えてよう！」
「ようし！　ここは危険だ！　急いでここから離れよう、神掛君！」
「口調気持ち悪っ！　それとゆんは男じゃないよう！」
「……性転換」

「なんでそんな単語を意味あり気な顔で言うの！？」
「それは、自分が一番分かってるはずだぞ、少年」
「分からないよ！　男じゃないよ！」
「まあ、とにかく。ここから離れる必要があるのは本当だろ。はいはーい、すすめー」
そう言って、守哉はゆんの後ろから彼女の肩を持って、広間へと誘導していく。
「ん～。なんか、かみやに上手いこと操られている気がする……」
「まさか。あんなことがあったから、気が動転しているのさっ！　あははっ」
「爽やか！　今日のかみや気持ち悪い！」
とその時、前方から足音が近づいてきた。
「お、お嬢様ぁ！　ご無事でありますかああ！」
どだだあ！　とすごい勢いで階段を駆け上がってきたのは、頬や額に冷汗を伝わせ、息を切らす爺やだった。
「あ、じいやん。大丈夫だよ。銃の弾なんて、ゆんほどになれば軽々と避けきれるからね」

なんだろう。合っているとも違っているとも言えないこの気持ち。

それでも、ゆんの元気そうな姿を見て、爺やはホッと胸を撫で下ろす。ゆんの親は見たことはないが、こうして見ると本当の親みたいだ。

「良かった。本当に良かった……。突然、銃声がするものですから……。守哉殿も、ご無事で何よりでございます」

爺やはハンカチを取り出し、顔の汗を拭う。

「そうっすね。爺やの方は何もなかったすか？」

守哉の言葉に、爺やは「ええ」と頷く。ということはつまり、あれは守哉かゆんを狙ったものだということになる。

まあ、だいたい自分だろうな、とため息をつく守哉に、爺やが耳打ちをしてきた。

「守哉殿、少々、よいですか」

「へ？　い、いいっすけど」

「左様ですか。……お嬢様」

爺やはゆんに向き直る。

「なに？　じいやん」

「ダイニングで明歌殿が心配して待っておられます。私と守哉殿は

屋敷の見回りをいたしてきますので、お嬢様は明歌殿に元気な顔を見せてあげてください」

「んん、わかった！　かみや、じいやん、気をつけてねーっ」

ゆんはそう言い残して、とててー、と駆けていった。

「……んで、なんすか？」

ゆんが姿を消してから守哉が訊くと、爺やは懐から何かを取り出し、守哉に手渡す。

「……？　ハガキ？　それも速達用の」

宛名にはここの住所だけが書かれており、差出人は「神掛総一郎」と書かれている。

「これ、ゆんの父親から……？」

守哉はハガキを裏返す。そこには、走り書きでこう書かれていた。

『爺やへ。ゆんの命が狙われている。相手は気が狂っている。刺激しないように屋敷の外には出さず、身を隠せ。これが届く頃にはもう屋敷内に進入している恐れもある、気をつけろ。可能であれば撃退してくれ。娘を守ってくれ、頼んだ』

読み終えて、守哉は絶句していた。

ゆんが、狙われている……？

「爺や、これって……」

「……以前もこういうことがありました。その時は主人がいたので、元自衛官の彼の力によって捕まえることができたのですが……」

「前にもあったんすか？　ゆんを狙った犯行が」

「いえ、その時に狙われていたのは主人でした。犯人は中年の男性で、主人の会社をリストラされた方でした」

「……自分の人生を壊した者への復讐、ってやつすか。じゃあ今回もそういうやつが犯人である可能性が高いんすね」

爺やは黙って頷く。

守哉は顎に手を当てて考える。それならば、相手は個人であると思える。こういう感情に任せた犯行は徒党を組むことがない傾向があって、しかも前回の犯人も一人だったというなら尚更だ。最初の銃撃も「早く殺したい」という冷静さの欠片もない感情的なものだと考えられる。

そしてターゲットをゆんにした理由だが、これは簡単である。神掛総一郎には敵わないからその大事な一人娘を殺してやろう、とか、娘を殺して精神的に追い詰めた後に殺してやろう、など、いずれも自己中心的な考えのものだろう。

そして、その八つ当たりに選ばれたのが神掛ゆんというわけか。

守哉の心の内に怒りがこみ上げる。ふざけるな。なんでこんな馬鹿みたいな事にあいつが犠牲にならなければならない。

「……そういえば、警察には通報したんすか？」

市民が銃を持った人間に命を狙われているのだ。警察が飛んでこないわけがない。

爺やは「ええ、もちろん」と答えた後、ですが、と続けた。

「前回もそうでしたが、彼らがここに到着するのには時間が掛かるのですよ。都心とも郊外ともいえない場所に位置していまして、一応、所轄は都心の方の警察署なので、交通的にも、到着に時間を要するのです。前回では通報から一時間弱掛かっての到着でした」

「なっ……！」

相手は感情に身を任せて犯行に走るタイプの人間だ。興奮状態にある犯人に、時間を掛けてじっくりと犯行を進める理性があるとは思えない。それでは全然間に合わない。

しかも、ゆんの父親によれば、もう屋敷内に進入している可能性だってあるのだ。銃だって持っている。それに対し、こちらにはそれを迎え撃つ術など何もない。

状況は絶望的。

爺やもそれが分かっているのか、どれだけ拭っても、冷や汗は彼の頬に流れ続けている。

と、ふいに爺やが守哉の方をがっしり掴んできた。

え？　なに？　ここで禁断の告白？　と守哉の思考が動転する中、爺やは意を決したようにその言葉を告げた。

「私にとって自分より大事なお嬢様の命が狙われているのです！　お嬢様を救えるのは、あなたの頭脳だけなのです！　どうか！」

ええ――ッ！？

どうしてそうなる！　と守哉は心でツッコミをいれる。が、よく考えれば、まさにここが自分の頭脳をフル活用する場面ではないか。そうか。

（……なるほどね）

そう考えが行き着くと、守哉は凶暴な笑みを作って爺やに言った。

「いいぜ。ゆんの親父より楽勝に捕まえてやる」

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（前編）その2

2

犯人は神掛家屋上にいた。三階建てのお城みたいな屋敷の頂上にあるヘリコプターの離着場、そこの端に一人で立つ彼は、中肉中背の体を持ち、双眸だけを晒す覆面をしていて、確証はないが男に見える。男は右手に細長い銃――スナイパーライフルと呼ばれるそれを持ち、左手にはボタンがたくさんついたゲームのコントローラーのような物を持っている。

守哉は推理で冷静さに欠ける狂人と言っていたが、最初の襲撃でターゲットを逃がした犯人にしてはその姿に焦りといった感情は感じられない。

「……神懸かりの強運」

男は覆面の下からその単語を告げる。

「知ってはいたが、まさかあそこまでのモノとは。想定外だったな」

感情のない、冷たい声だった。誰に言うでもなく、男はそのまま続ける。

「だが、急ぐことはない。情報操作で、警察がここに辿り着くことはない」

男の足元には大きなスーツケースが置かれていて、開かれたその中から、よくパトカーなどに設置されているような無線機が顔を出していた。

彼が言った通り、この屋敷に警察が来ることはない。彼が吹き込んだ情報により、彼らは今頃ここと逆方向の場所に向かってアクセルを踏んでいることだろう。

故に、時間は有り余るほどある。

あらかじめ仕掛けておいたアレを使える状況になるまで、ただじっと待つだけでいい。

相手は、ただ何もできずに怯えることしかできないのだから。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（前編）その３

３

「……そういえば、なんで爺やは俺がＩＱ１６０超の人間だって知ってたんすか？」

ダイニングで待つ明歌とゆんの元へ行く途中、守哉が思い出したように言う。

それもそのはず、自分の「特例」扱いを知っているゆんならともかく、彼女以外の神掛家の人はその断片も知らないはずなのだ。

すると、爺やは優しく微笑んで、

「そんなこと、神掛家の人間なら誰でも知っていますよ」

「……？」

「お嬢様、ですよ。あの方が我々と話すとき、話題はいつも守哉殿のことでしたから」

「な、なっ」

守哉の顔が一気に赤く染まる。それを面白そうに眺めながら、爺

やは続けた。

「ここがすごい、ここが好き、守哉殿のことを、さも自分のことであるかのよう自慢げに、そしてとても楽しそうに話していましたよ」

ぼふん、と守哉の頭上に湯気が湧き上がる。ここで思考ストップ。

そうやって階段を降りていると、ちょうど良くダイニングからゆんが顔を出した。

「おお。お嬢様」

「あっ。じいやん、かみや。おかえりーっ」

「お、おう」

「？　かみや、顔赤いよう？　どしたの？」

「う、うっさい！　お前のせいだろうが！」

「ええ！？　なんでえ！？」

守哉の言葉に、ゆんはズザア！　と後ずさりをする。

「訊くな！　分かってるくせして！　このやろう！」

「なんか知らない間に恨まれてる！」

がーん、と絶望するゆんを、心配して出てきた明歌がダイニングへと彼女を促す。

「あら、守哉君、爺や。無事で何よりです」
「はい、明歌さんのほうは、なにかありましたか」
「いえ」と明歌は笑顔で返事をし、ダイニングに入っていく。守哉と爺やもそれに続いて行こうとしたその時。

彼らの真後ろにある玄関の扉が、勢い良く開け放たれた。

「――……っ！」

もしや、犯人か！　と思い、全員がそちらに振り向いた。守哉と爺やは、反射的にゆんの前に、庇うようにして立つ。

だが、そこにいたのは、今回の事件の犯人とは到底思えない人間だった。

「よ～っ！　脳木遙、ただいま参上だあ～！……ん？　どうした？　なんで皆そんな険しい顔してるんだ～？」

ズシャアア！　とバランスを失って倒れる神掛家一同。

「ど、童顔教師！　またお前かー！」

「な！　またって何だまたって～！？　あれ、なんかこの会話デジャヴ！」

「なずきん……さすがに空気読まないとだめだよう」

「うわあ！　可愛い子ちゃんにそれ言われると終わりな気がする！　だ、だいたいなあ！　あたしはこの時間に来るって前もって連絡していたぞ～？」

「へ？　なんで？」

「そりゃあ……」

「あ、やっぱりいいや。今それどころじゃないし。お前に構っている暇ないし」

「放置プレイ！？　自分から聞いたくせに！？」

「じゃあお前はこの状況を打破できる方法を今から言えるってのかよお！」

「ぎゃ、逆ギレ……。うう、そこまで言われると自信ないぞ～。ってか今どういう状況！？」

脳木の言葉に反応したように、ゆんが守哉たちの前に現れた。そして人差し指を天高く突き上げ、

「この中に犯人がいる！」

「えええ！？　ていうか何の！？」

「俺もそれは初耳っ！」

「えへへ。一度言ってみたかったんだー」

冗談かよ！　守哉が突っ込む中、なぜか明歌は安堵の息を漏らしていた。

「……バレたかと思いました」

「いた――ッ！　まさかのここで一件落着！」

「えへへ。一度こういう演技やってみたかったんです」

「明歌さんまで！？」

まあ、よく考えると、ゆんと明歌はこれがどういう事件なのか知らされていない。だが、それでも……。

「あの、いたずらに俺の心拍数上げるのやめてもらえます……？」

事件の内容を把握している守哉が、今までにないほど切に願いをこぼすと、さすがに可哀想になってきたのか、ゆんと明歌は「ご、ごめんなさい」と頭を下げた。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（前編）その４

４

恨めしいぐらいに眩しい太陽がさんさんと照りつける中で、今日の気温を計算に入れていなかったことを後悔しながら、覆面の男はスナイパーライフルのスコープを覗いていた。

順調だ。

彼がスコープを通して見ているのは、ターゲットの部屋。

全体的に見てこの屋敷は危機感と言うものが足りないと彼は思う。大体の部屋は外側が大きなガラス窓、それに加え外からの死角は大量にあるときた。

まるで、何もかも、拒絶なんてしない存在に見える。

全てを受け入れる。響きは良いが、つまりは平和ボケしきった人間が発する言葉だ。

男は、それが気に食わない。

……ほうら、恐怖を知らないウサギが、自ら危険に足を踏み込んできた。

「……『神懸かり』の強運は効かんぞ」

男はスーツケースから四十ミリ口径の弾を取り出す。

それを銃に装填しながら、男は標的の部屋を見据える。

スコープは、ちゃんとターゲットを捕らえている。

準備は整った。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（前編）その5

5

「うわあっ。こんなにたくさんのウエハース見たの初めてだよう！」

ゆんはテーブルの上に出された菓子を眺めて、思わず感動の声を上げる。

「はっはっは。いつも世話になってるからな。今日はそのお礼だよ。はっはっは」

その隣では、守哉が英国紳士を想像させる笑顔を浮かべて立っていた。

彼らが今いるのはゆんの部屋である。最初ここに入るときは「どういうもんなんだろ、ゆんの部屋……」とドキドキしながら期待を膨らませていた守哉だったが、意外と普通の女子高生っぽかったその内装を見て、今は少し心が沈んでいたりする。

だがそれ以上に、彼女を利用している、という酷い罪悪感が、彼の笑顔を崩そうとする。

「なるほどー。そうだよね、いつも、ゆんがかみやの面倒見てるもんね。お礼ぐらいもらってもおかしくないか」

「はっはっは。はっはっはー。日本語間違えてない？　はっはっは」

逆な気がするなー、とこめかみを引きつらせながらも、守哉は笑顔を絶やさない。

そんな守哉の努力など見ず知らず。節操の欠片もなく、ゆんはその一つをとってかじりつく。守哉の後ろにいる明歌が拳を握り締める音が守哉の耳に入るが、今はそれを注意しているところではない、ということを分かってくれているようで、彼女がゆんにマナーを叩き込み始めることはなかった。

ゆんの幸せそうな顔を見て、守哉は小さく微笑むと、きびすを返してドアに手を掛ける。

「じゃあ、俺が戻ってくるまで部屋でおとなしく食べてるんだぞ」

「もふっ。まか、分かりましたっ！」

ドアを開けて部屋を出て行く際に、守哉は明歌にひそひそと告げた。

「……じゃあ、ゆんをお願いします。明歌さん」

「え？　守哉君、どこへ行くの？」

守哉は「ちょっと用があって」と寂しげに笑い、ゆんの部屋を後にした。

守哉が階段を歩いていると、「守哉殿」と後ろから声が掛かった。振り返ると、爺やが何かの書類を持って走ってきていた。

「これ、頼まれていた書類です」

「ありがとうございます。ウエハースチョコも用意して頂いて、いろいろすみません」

「いえいえ。それにしても、『別邸の見取り図』なんて何に使われるのですか？」

「犯人を捕まえるための、作戦です」

守哉の言葉に、爺やは目を見開く。

「もしかして、もう相手の居場所が分かったのですか！？」

守哉は微笑し、「順を追って説明します」と切り出した。

「……俺の推理でいけば、敵はゆんの強運を知っています。最初の襲撃は、それがどれほどのものかを計ったんだと思います。

ならば、あいつを殺す手段は限られてくる。二十択問題の答え……五パーセントの可能性をも引き当てる強運に左右されない、確率を無視した殺し方……」

実は守哉には、一つの確信があった。

十数分前、守哉は自分の部屋にいた。

あの銃撃から逃げてから、この部屋には誰も入っていない。だから、辺りには銃弾が散乱している。……ちなみに、それと同じくらいプラスチック弾も散らばっている。

守哉は四つん這いになって、その中を漁っていた。

探しているのは、その中の一発だ。

「……くそっ、大量に撃ち込みやがって……。捕まえた暁には、なんだかんだ言いくるめて一流家具一式を弁償させてやる……！」

実際、跳弾などによって一部の家具は損傷しているものの、どれも使用人用、近所のホームセンターで揃えられるような価値のものばかりだ。だが、ついでで命を狙われた挙句、神掛家にしては珍しいのどかな休日を奪われた守哉君の怒りは、その家具たちの価値を一回り底上げするぐらいにまで急上昇中なのである。

それに、こんな赤白ボーダーのオヤジを探せ！　的な作業をさせられては尚更だ。

「あ～。だるう。捕まえた暁には蝉羽にゆんを殺そうとしたことを教えて、学園内を裸で引きずり回してやる……！　っと。お、あった」

思わず犯人を逃がしてあげたくなるような発言の後、守哉は一発の銃弾を持って立ち上がった。

「へへ。これだよ、これ」

彼が手にしている銃弾は、そこらに散らばっているものより明らかに大きい。

「四十ミリ口径か……。七ミリちょいの銃弾で隠すにあまりにも物足りないぜ、犯人さん」

守哉は穴だらけのテーブルの上に、その銃弾を丁寧な手つきで置く。彼は知っている。これが、ただの鉛弾ではないことを。

手榴弾をそのまま銃弾にしたような代物、グレネード弾である。着弾時には爆発し、周囲に爆風と破片を撒き散らす。近距離で生身の人間がこれの餌食となれば、五体は吹き飛び、骨は潰れ、肉がはじけ飛ぶ。死は当たり前で、原型を留めて死ぬことも難しい。

守哉の推理によれば、これが、最初の一発だった。

こんなものがこの部屋に着弾すれば、その場の人間は一人残らず爆死する。犯人はそのつもりで、この弾をここに撃ち込んだのだ。

だが、そこで予想外のアクシデントが発生した。

ゆんの強運が働いたのか、グレネード弾がまさかの不発だったのだ。

犯人は慌てた。グレネード弾を打ち込んだのがバレれば、一目散に逃げられてしまう。グレネード弾の射程距離は短い。それでは確実に標的を仕留めることができなくなる。

そう思った犯人は、小銃による銃撃で、守哉たちを部屋から追い出し、大量の銃弾でグレネード弾を隠蔽しようと考えたのだ。

「……」

守哉はその銃撃に違和感を覚えていた。理由はあの跳弾の嵐だ。

普通、一方向から標的を狙った銃撃なら、あんなたくさんの方向に弾が跳ね返ることはない。ほとんど同じ方向に跳弾するはずなのだ。つまり、あれは標的を狙って撃っていたわけではない。あの場所を「危険」と認識させるためのものだったということになる。

「そして……。わざわざグレネード弾を隠すようなことをしたということは……」

犯人は、再びグレネード弾を使って、ゆんを殺す気なのだ。

「……なるほど」

守哉の説明に、爺やは感心したように呟く。いや、本当に感心しているのだ。

「守哉殿の推理は合っていると思います。……ですが、それが分かったからといって、犯人が今、どこからお嬢様を狙っているのかは分からないのでは……？」

そうだ。守哉はただ「相手がどうやって標的を殺そうとしているか」の手段を推測しただけだ。だからと言って、犯人がどこに息を潜めているのかなんて分かるはずもない。

守哉は人差し指を突き立てて、

「心配は要りませんよ。さっき言ったとおり、グレネード弾の射程距離は短いんです。ならば、今ゆんが居る場所から逆算して割り出せる。もう、その大体の場所も掴めています」

ゆんをあの部屋に移動させたのは、犯人をその場所におびき出すための作戦だったのだ。

爺やは再び目を見開く。

「……そして、その場所が別邸というわけですか。なるほど、それでその見取り図を……」

守哉は「ええ」と相槌を打つ。

「とにもかくも、俺は今からそこに向かいます」

「そうですか。ならば私も……」

「いえ、爺やはゆんの部屋にいてください」

「……！　守哉殿、それは、どういう……」

「ここまで推理させるのも奴の作戦かもしれない、ということです。仮に俺と爺やが向かったとして、犯人がそこにいない可能性だってあります。

「ターゲットの周りの戦力を削いでから、近接で楽に殺そう」なんてことも考えているかもしれません」

「な、なるほど」

「だからこそ、爺やはゆんの傍にいてあげてください」

守哉はきびすを返して、歩き始めた。

「ですが、守哉殿……！」

少し歩いたところで立ち止まり、守哉は振り返って爺やを見た。

「もし、もし俺の身になんかあったら、そん時は……。あいつに伝えて欲しいことがあるんです」

決して声にはせずに、彼は口の動きだけでそれを爺やに伝えた。

「それが、お前の答えなのか。真堂」

ゆんの部屋を後にした守哉が、廊下の角を曲がると、とっくに帰ったはずの脳木がいた。

脳木は、普段の彼女からは考えられないほど、極めて真剣な眼差しを守哉に向けていた。とても冗談で押し切れる雰囲気ではない。

だから、だからこそ、守哉は彼女に笑顔を向けた。

「なんだよ。週末の課題のことか？　確かに一問だけすげえ難解な問題あったよな。あれは学年ナンバーツーの蝉羽でも解けないぜ」

「……真堂」

「それとも答えが全然分からないゆんを甘やかして答えをズラーっと教えちゃったことか？　いや、あれは不可抗力だって。あいつの困った顔を見て助ける以外の選択肢を選べる人間なんていな……」

「真堂！　ふざけるな！」

「っ……」

広い廊下に、静寂が流れる。それを最初に打ち切ったのは守哉だった。

「な、なんだよ！　俺の何がふざけているってんだよ！」

「お前、自分でも分かっているだろう！　あたしが言っているのはそんなことじゃない！」

「ああ分かってる！　分かってるよ！　だからって何でてめえに話さなきゃなんねえ！」

「違う！　話すべきなのはあたしじゃない！　あの子だろう！」

「……！」

守哉は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。だが、それは悔しさとか怒りとか、そういう感情から来るものではない。ただ単に、崩れ落ちる一歩手前、その最後の砦というべき抵抗が、その顔なのだ。

その様子を見て、険しかった脳木の顔が、緩んだ。

「お前、変わったな」

「……なに？」

「変わった、って言ったんだよ、真堂」

「はあ？　俺が？」

「白を切るな。お前は、彼女に会って考え方が変わった」

守哉は何も答えない。脳木は続けた。

「お前は、茜音学園で「特例」扱いを受け、その代償として他生徒からの反感を買った。陰湿で非道な攻撃の数々――だが、お前は不満や愚痴を何一つ溢すことなく、生活を続けた。あたしは、その時から気づいてた。お前は、自分がそうされることが当たり前のように感じている、と」

「……」

「だけど、彼女に出会い、蝉羽学園に転校してからのお前は、違った。向き合ったんだ。立ち向かったんだ。この考えは、もしかして間違っているんじゃないかと。

そしてお前、桐野に言ったよな。「普通とか特別とか関係ない」って。きっと自分自身でも驚いたはずだ。なんたって、今までのお前の考え方は、その真逆を行っていたんだから」

「……そう、だな」

守哉は呟くように答える。彼はとても寂しそうに微笑んでいた。

脳木は彼の肩に手を置いた。そして、苦しそうな表情で彼の目を見る。

「だから、頼む。死なないでくれ……っ！」

「……脳木」

「お前は、ここで死ぬべきじゃない。もっと、彼女と過ごすんだ。もっと、ふさわしい幸せを手にするんだ」

守哉と爺やの話をどこまで聞いていたのかは分からないが、脳木は知っている。

守哉が、最初から死ぬつもりだということを。

実は、守哉は爺やに嘘をついていた。グレネード弾に執着している犯人が、近接格闘でゆんを殺そうとするはずがない。つまり、ゆんの部屋に犯人が出向くことは、まずない。

だから、守哉と爺やで行動しても良かったのだ。

だが、そうなると爺やの命が危険になってくる。なぜなら、守哉は犯人と刺し違い――犯人の持つグレネード弾をその場で爆破させる気なのだから。

死んだって構わない。人殺しになったって構わない。

守哉はどうやってでも、神掛ゆんを、そして彼女を取り巻く人たちを守りたいのだから。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その１

1

「……なんか今日のかみや、変だったよね」

ウエハースチョコを頬張りながら、ふいにゆんがそんなことを口にした。

その言葉に、ドアにもたれて座っている明歌が「そうねえ」と考え込む。

「確かに、妙によそよそしかったというか、それこそ「変」だったわよね。今日の守哉君」

「うん……。いつも変だけど、今日はいつも以上に変だった」

本人が居合わせたら狂喜乱舞する一言である。

「何か隠しているとか……？」

明歌の何気ない一言に、ゆんの動きがピタッと止まる。

「そ、それはないよう！　かみやがゆんに隠し事するはず、ないもん！」

「うふふ。冗談よ、ゆんちゃん。確かに、守哉君は誠実な人だから、人を欺くようなことなんてできそうにないもんね」

本人が居合わせていたら、きまずくなる一言である。

「そだよう。きっと、お昼の「銃撃どっきり」の後片付けしてるんだよ」

「え？　なにそれ？」

明歌が反射的に尋ねる。その反応が意外だったのか、ゆんも呆気に取られたような顔をする。

「あれ？　ヤギちゃん、知らないの？　お昼、守哉の部屋が銃で撃たれたの」

「――……え？」

初耳だった。確かに、つい数十分前に守哉の部屋で銃を撃つような音はしていたが、それはゆんのモデルガンの音だと後から爺やから聞かされたし、ゆんも抽象的なことしか説明しなかったので、てっきりそれだろうと明歌は思い込んでいたのだ。

（意図的に隠されていた……？　でも一体なぜ？）

刹那、明歌の脳裏に守哉のあの寂しげな笑顔がよぎった。

（――……ッ！　ま、まさか守哉君！）

咄嗟に明歌は立ち上がり、ドアノブに手を掛けた。
「わあっ！　ど、どうしたの、ヤギちゃん？」
「ゆんちゃんはここにいて！」
明歌は走り出し、あっという間に部屋から出て行ってしまった。
「ええ！　どうしたのヤギちゃーん……って、むむ？」
気づくと、床に放り出されたゆんの携帯が鳴っていた。表示には「真堂」と出ている。
『もしもーし。ゆんかー？』
「そだよ。どうしたの？」
『突然だけど、どうしてもさ、これだけは言っておかなきゃならないことがあるんだ』
「むむ？　どうしたの、かみや。そんなに改まって」
『……そうだよな。こういう時こそ、普段通りに喋らないといけないよな』
「？　さっきからナニ言いたいのか全然分からないよう」
『あのな、ゆん。俺とお前が出会った日、覚えてるか？』
「うん、ちゃんと覚えてるよ。おいしいパフェをかみやにおごちそ

うさまさせてもらった」

『う……、不況パフェについては触れないでくれ、心が痛む』

「え、あ、うん。それで？」

『あの日、俺はすごくいい買い物をしたんだ』

「買い物？　やっぱり不況パフ」

『それには本気で触れないでええええ！　違う違う！　ファミレスのことじゃない！』

「むむむ……。分からないよう」

『まあ、端から分かるとは思ってなかったけどさ。その買い物ってのはな、お前と会えたことなんだ』

「え……っ」

その瞬間、ゆんの顔がぼふう！　と赤く染まった。

『具体的に言えば、お前と出会えたことで人生的な希望と言うか、楽しみと言うか、そういうモンを教えてもらったってことだけど……って、聞いてます？　もしもーし？』

「あう、あ、うん。ええと、き、聞いてるよー。不況パフェのことだっけ」

『そこから！？　つうかさっきから俺の心の傷口弄りまくってるよ

ね、君！』

「あ、あの、そんなの……。そんなの、かみやが悪いんだよう！」

『責任転嫁！？　俺は自業自得！？』

「うう……。まあ、いいよ。それで？」

『いいんだ……。と、とにかくだ。あの日、俺の中で何か変わったんだ。お前に出会えたことで、俺は変わったんだ』

「？　よく分かんないけど、変わったんだ」

『そう。変わったんだ。それで、それについてお前に言わなきゃいけないことがある』

「ん、なに？」

『ゆん。俺さ、普通で平凡な人間になりたいと思ってた』

「……かみや？」

そこで、やっとゆんは違和感を覚えた。なぜ彼は突然こんなことを言い出すのだろう。

『嫌だった、嫌だったんだ。自分が周りと違うことが。「特別」だ

なんて呼ばれることが』

「かみや……」

『上でも下でも飛び出した奴は弾かれる。中間地点に立つ、普通の人間が基準であり、絶対。この世界は、そんな暗黙の了解事項があると思い込んでた』

「そんなこと……」

ゆんが否定文を紡ぐ前に「そうだ」と言って守哉は続ける。

『だから自分が嫌だった。嫌いだった。社会のつまはじき者だと思ってた。蔑まされても、何をされてもいいと思ってた』

「……っ」

思わず、ゆんは俯いてしまった。この少年が、そんな闇を抱えていたなんて。こんなに苦しんでいたなんて。それに気づいてあげられなかったことより、ただ純粋に、彼の痛みが強く心を叩く、突き刺さる。

気づけば、涙が頬を伝っていた。

その時、守哉が、でも、と告げた。

『でも、お前に会えて、このままでいいと思えたんだ』

「……え？」

ゆんは知らない、もしもの場合伝えておくように爺やに残した言葉を、守哉は告げた。

『ありがとうな。――そして、さようなら』

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その2

2

守哉は、中庭を歩いていた。

目指しているのは、神掛家、別邸。何週間か前、ゆんが考えた遊び、「サバイバル鬼ごっこ」の舞台となった場所である。そこの屋上に、ゆんの命を狙う人間がいる。

グレネード弾の射程距離、ターゲットからの死角、安定した足場――。そして、守哉の天才的な頭脳から割り出された座点というのが、そこである。

「……うし。行くか！」

守哉が決意を固め、走り出そうとした守哉の背中に、後ろから声が掛かる。

「かっ、か、守哉くーん！」

「め、明歌さん！？」

スリッパで走ってきた明歌は、守哉の元につくなり、呼吸を整えるため前屈みになる。

ぜえぜえ、となんか女を捨てたような息をする明歌に、「あ、あの……」と守哉が手を伸ばすと、彼女はそれをはたき、守哉をキッと睨んだ。

「え、え？　なんすか？」

次の瞬間、守哉の左頬は思いっきり引っぱたかれた。

「い、痛え！　な、なんなんですか！　明歌さん！」

「必殺、ヤギちゃんビンタです！」

「いや、技名を聞いたんじゃないです！　なぜなにゆえ私めにヤギちゃんビンタをお見舞いしてやられたのかを問うております！」

「ヤギちゃんビンタ、左手編！」

「ぎゃあ！　左の方が痛い！　しかもヤギちゃんビンタ、ストーリー性ある！」

理不尽にも両の頬をほのかに赤く染められた守哉が理由を尋ねようと明歌を見ると、

「あ……」

彼女は、泣いていた。それも、守哉より頬を赤く染め、目は腫れて、尋常ではない大粒の涙を流していた。

明歌は、守哉を睨みつけたまま、

「あなたという人はッ！　一人でなんて危険なことをしようとしているの！」

「……！　な、なんでそれを」

「詳しいことは爺やから聞き出し……聞きました！」

「な、なるほど」

守哉は心の中で安堵の息を漏らした。まさか明歌が脳木同様、自分が刺し違いを図ろうとしていることを知っているのかと思ったからだ。

だが、爺やからの情報でも、守哉が十分危険なことをしようとしているのに変わりない。

「だって、俺が行かないと、この屋敷のみんなが危ないんです」

「でも！　こんなの、守哉君が行かなくてもいいじゃない！」

明歌の言葉に、守哉は優しく微笑む。

「いいんですよ。犠牲になるのは俺で。ゆんも、明歌さんも、爺やも、料理長も、誰もここに欠けちゃいけない。ここで一番犠牲になるべきは、俺なんです」

「違いますっ！」

「……え？」

明歌は唇を引き締め、相変わらず涙を流し続けるその瞳で、一心に守哉を見つめている。

「お嬢様が、ゆんちゃんがっ！　ただ何となくで守哉君をこの家に連れてきたと思ってるんですか！？」

「え、え？　ち、違うんですか？」

ヤギちゃんビンタ、炸裂！

「ぎゃあ！」

「そんなことも分からないで、死ぬかもしれない場面に首を突っ込んではいけません！」

「で、でも……」

「でも、じゃない！　どうして自分の命をそんな簡単に捨てようとするんですか！」

「そ、それは、この家の人たちを守りたいからですよ！」

「ん？　それはどういうことです？　んん？」

「え、えと、あの」

明歌の気迫に圧倒されながらも、守哉は覚悟を決めて立ち向かう。

「こんな……どこで何していたかも分からない人間を、皆は快く迎えてくれて……。そ、そして俺をまるで家族みたいに慕ってくれて

……」

「何、言ってるの」

途中から言っていて照れ臭くなり下を向く守哉の顔を、明歌はその綺麗な両の腕で持ち上げる。そして守哉と目の高さを一緒にして、彼女らしく、そして優しい笑顔を浮かべた。

「みたい、じゃない。私達、本当に家族なのよ」

「あ、う……――」

守哉は、言葉を失った。

「だからね」明歌は続ける。

「何もかも一人で解決しようと思わなくていいのよ？　頼ってくれていい。もしそれで誰かが傷ついたとしても、誰も守哉君を責めたりはしないわ」

「……家族、だからですか」

守哉は俯く。今回のそれは、照れ臭さからではない、それよりもっと見せたくないものを隠すためのしぐさだ。

だけど、目の前の人物にそれを隠し通すなんて無駄なことだった。

「そうよ」

明歌は、震える守哉の背中を、優しく包み込んだ。

「とっても大切な、家族だから」

ゆんは考えていた。

彼女はカーペットの上に女の子座りして、ウエハースチョコを頬張りつつ先ほどの守哉との会話を思い出していた。

「かみや……どうしたのかな」

一番気になるのは、最後に言った「さようなら」の部分である。

明歌に相談したいところだが、なぜか気がついた時には彼女は自分の部屋から姿を消していた。つまり、今、彼女は部屋に一人取り残された状態だ。

「……。……」

暇である。至極、暇である。もう今すぐにでもテーブルクロスをマントにして窓から飛び降りたいくらいである。

だが、彼女は守哉と「帰ってくるまで部屋からは出ない」と約束

をしているのだ。ゆんは彼に嫌われたくはない。だからおとなしく待っている。

（それしても暇だよう～！　かみやもヤギちゃんも誰もいないしい！　皆で遊びたいよう！……ああー、「サバイバル鬼ごっこ」とかまたやりたいかも）

そんなこと考えながら、ゆんはふとベランダに出て「サバイバル鬼ごっこ」舞台、神掛家別邸に思いを馳せてみる。

「……そういえばデザートイーグルも守哉の部屋に置きっぱなしだったなあ。……ああもう！　部屋から出るななんて「ごくあくひどー」ってやつだよう！」

地団太を踏んで、部屋に戻ろうとした時、ゆんの移り行く視界であるものが映った。

「ん……。あれ、かみやとヤギちゃん……って、えええ！？」

中庭にいる守哉と明歌の二人は、よく見ると、あらまあ、なんと抱き合っているではありませんか。

一瞬、ゆんの頭が真っ白になった。

（え、え、え？　なんでかみやとヤギちゃんが？　……。……あー、えーと。む、むむ、無理矢理ってやつだよね！　うん、そうだよ！　あれは宇宙人さんが二人の体を操って遊んでいるんだよ！　そうとしか考えられない！）

ゆんはそうやって割り切る。……なんてできるはずなかった。

彼女はその場に崩れ落ちた。

「……うっ。う、ひっく。か、かみやがあ……、ヤギちゃんに取られちゃったよお……。ふえ、ふええ……ひっ。うう……」

ぼろぼろと涙を溢すゆんは、生気を失ったような眼差しで彼らを見る。……ちくしょう。いつまで抱き合ってんだよ。私達ラブラブなんでーすアピールってかこんちくしょう。ああくそ、やっと離れやがった。……なんだよ。気まずいカンジになってんじゃねえよおお！　こちとら今後のお前らとの接し方をどうしたらいいか気まずさマックスなんだよ！……呪ってやる。呪ってやるからな……。彼に近づく女全て呪い殺す。そうすれば彼は私しか見れなくなる。あは。あはははっ。

といった具合で二人を見て新しい属性に目覚めそうなゆんだったが、明歌とはなれた後の守哉の様子を見ていて、ふとあることに気づいた。

（…あれ？　かみや……）

いや、気づいてしまった。

「……――ッ！？」

ハッとした彼女は、すぐさま立ち上がり、駆け足で部屋のドアに手を掛けた。

その後、爺やに取り押さえられ、部屋に戻されたのは言うまでもないことである。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その3

3

この指に力を込めるだけで、全てが終わる。

スコープを覗き込みながら、男は思った。成功という栄光を眼前に、彼は、大きな充実感を味わっていた。

ターゲットはもう十分仕留められる状態にある。でも、それだけじゃ物足りない。彼が求めるのは「完璧」という二文字だ。手の施しようが無かったと言わせんばかりに着実に、華麗に、完璧に作戦を遂行しなければ満足はできない。

彼はスコープから顔を離す。そして、懐に転がるゲームのコントローラーのような箱を手に取る。

そして、いくつかあるボタンの中から、「F」と書かれたものを押す。

刹那、神掛家本邸から大きな爆発音が響いた。

予想外の事態……などではない。これが「作戦」だ。

神掛家の玄関に設置しておいた爆弾を、遠隔操作で爆破したのだ。

この爆発によって、神掛家の使用人たちは玄関に駆けつけるだろう。だが、ターゲットは部屋に残しておくはずだ。なぜなら、彼らの思い描く犯人は、銃を持っているからだ。もしその場で犯人とターゲットが鉢合わせになれば、ターゲットは一瞬にして葬られてしまう。そういう事態は極力避けるべきだろう。だから、ターゲットは丸腰のまま、スコープの中から動かない。

男は、覆面の下で卑しく笑った。

敵戦力を分散し、隙だらけになったターゲットを確実に殺し、穴だらけのセキュリティを潜り抜け、安全に逃げさせてもらう。

完璧だ。完璧だ。完璧だ。自分は、完璧だ。

一人、ターゲットの周りに「天才児」というイレギュラーな存在がいることは知っていたが、その頭脳もこの完璧すぎる作戦を見破られるほどでもなかったようだ。

まだ成功したわけでもないのに、この達成感はなんだろう。そう、逃れようの無い王手を取ったときのような……そんな優越感だ。

男はしゃがみ込み、スナイパーライフルを構えた。

「くく……。今頃、屋敷中の人間が一階に集中していることだろう。このままやつを……」

「やつをどうするんだ？」

不意に響いたその声と同時に、男の後頭部にゴツッ、と何か金属質のものが当てられた。

「――ッ！」

男の体が硬直する。銃だ、彼は直感した。声は続ける。

「銃を置け。手を上げろ。変な動きを見せたらソッコーで脳天をぶち抜く」

突きつけられた銃により重圧が掛かる。男はゆっくりと銃を置き、万歳の形を取った。

「君は誰だ？」

緊張状態を解そうと、男は軽い口調で質問する。だが、相手からは「お前が知る必要はねえ」と冷たく返された。

「……君がなぜ、この場所を特定できたかは聞かないでおこう」

「そうだな。どうせ答えてもらえねえからな。悲しいもんな」

「……。……一人か」

「そうだ」

「答えてくれたな」

「黙れ。ぶっ放すぞ。てめえなんか一人で十分だと思ったからだ」

「……ふ。違うだろう。この家の人間を巻き込みたくないから、一人で来たんだろう」

「……だったらなんだ」

「君は、真堂守哉君だね」

「……」

「答えてくれなくていい。私はそのつもりで話を進めさせてもらう」

「ああ？　てめえと話したいことなんてねえぞ国内産ブラック百パーセント使用人間」

会話の主導権が掴みにくい。真堂守哉と思われる人物は、わざとこういう挑発的なことを言って、男に「自分が優勢だということ」を自覚させようとしている。

（……賢いな）

男はため息をつくと、足元のスナイパーライフルを脇目に、話を切り出す。

「さっきも言ったが、君は神掛家の人間を巻き込まないためにここ

に来たんだろう？」

「だから、それがなん……」

「立派だな。かつて、父親のリストラと自分自身の異常さで家族から捨てられ、心を塞ぎ、人様から金を騙し取って生きていた人間の考えとは思えない」

「っ！」

後頭部にのしかかっていた重圧が緩む。その僅かな間の隙を男は見逃さなかった。

男は頭を前に屈め、しゃがんだままの状態で後方に回し蹴りを繰り出した。

案の定、その先には相手の足があり、油断していた所為で、衝撃が加えられたそれはいとも簡単にバランスを崩した。

「のわっ！」

相手は尻餅をつくまではいかず、銃を持っていない左手で倒れそうになる体を支えこんだ。男は無防備な相手の側頭部目掛けて、右拳を振りかざした。

相手はそれを逃げるようにして上手くかわすと、地面を蹴って男

から距離をとる。

（格闘に関しては、丸っきり素人……！）

相手が逃げの姿勢であろうと関係なく、男は立ち上がらないまま走って間合いを詰めると、じたばたしている相手の右片足を脇でホールドする。

立ち上がろうとした相手が、バランスを崩して尻餅をついた。

「だっ！」

「シッ！」

そしてガードも取らない相手の鳩尾に、男は思いっきりアッパーを叩き込む。

めき、という鈍い音が拳を伝わって耳に入る。

「あがっ……！」

突然の衝撃に呼吸が止まった相手は、激痛に耐えるように歯を食いしばると、手にしているハンドガンの銃口を男の顔面に向けた。

「ぬ……っ！」

引き金が引かれる前に、男は彼の足を離し、バックステップで距離をとる。

「はは。メンタルが強いな、守哉君」

男の言葉に、「うっせえ……」と息切れ交じりに答えた真堂守哉は、ふらつく足でよろよろと起き上がった。

男はジャケットの胸ポケットから護身用の拳銃を取り出し、相手に向ける。

「これで、対等だな」

「ぜえ、はっ。うるせえ……」

対等、とは言っても、酸欠と痛みで銃を持つ手すらガタガタと震えている相手と「場慣れ」している男とでは、どっちが優位なのかは酷いくらいに明らかである。

真堂守哉は、男を睨みつけて言う。

「てめえ、何者だ……。なんでそのことを知ってんだ……！」

彼の言葉に、男は「おや」と笑いを含んだ声で、

「知られては困る事だったのかね？　……それとも、二度と掘り起こされたくない過去だったりしたのかな？」

「――ッ！　てめえ！」

真堂守哉はトリガーに指を掛ける。

「おっと。待ちたまえ。そのことは置いておこう。私が聞きたいのはそこじゃないんだ」

「てめえの私情なんて知るかよ！　なんでそのことを知ってんのかを聞いてんだよ！」

「おいおい、熱くなるな。それでも脳科学界を震撼させた天才児か？」

「……っ！」

あまりに核心を突く男の言葉に、真堂守哉の顔は青ざめている。

こいつは何者だ？　なぜそんなに自分のことを知っている？　そして、そんなやつがなぜ彼女の命を狙う？

大方、こんなことを考えているのだろう。

「改めて聞かせてもらう」

主導権は、完全に男が握っていた。

「君は、神掛家の人間を誰一人とて巻き込まないために、ここへ来た」

もう、問いかけではない。

「……そうだ」

「だが、本当は分かっていたんじゃないか？　君は、私に敵わない。どうやってでも、こういう結果になるということを」

「……」

「ならば、それは君の単なる自己満足だ。ここで戦って、やられて、それでも自分はやるだけ頑張りました、と言いたいがための行動だ」

「……違う」

「何がだ」

真堂守哉は、さっきまでの焦り顔とはまるで違う、凛とした表情で男を見ていた。その瞳は、強い意思を訴えかける。

彼は呼吸を整え、一息おいてから、

「俺は、俺の家族達を、そして神掛ゆんを、絶対に悲しませない。……だから。だから、俺は、傷一つ付かないであんたを倒す！」

男に向かって走り出した。

「はっ！　言うじゃないか！　いいだろう。掛かって来い！」

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その４

4

玄関に駆けつけた爺やはその場に立ち尽くしていた。

彼の目に映るのは、業火のように燃える大広間……などではない。爆発による広間の被害はそんな大層なものではなく、まるで大型の手榴弾で吹き飛ばされたようなボロボロの玄関の扉だけがそこにはあった。

「これは……？」

犯人が玄関を爆破して屋敷に侵入したのか、と考えたが、瓦礫や塵が埋め尽くす床に誰かが歩いたような痕跡は見当たらない。だとすればこれは……。

「フェイク……。っ！　お嬢様が！」

そう言って走り出そうとする爺やに、どこかから声が掛かった。

「じ、爺や」

振り返ると、そこには先ほど自分から事情を聞きだすなり飛び出していった明歌がいた。

「め、明歌殿！　今までどこへ……心配しておりましたぞ！」
「す、すいません……。そ、それにしてもこれって」
明歌は無惨に吹き飛ばされた玄関を指差す。
「これは罠です！　明歌殿、行きますぞ！　早くしないと、犯人がお嬢様の部屋に辿り着いてしま……」
「犯人なら、別邸にいるらしいですよ。守哉君が、間違いないって……」
「は、は？」
呆気にとられる爺やに、「ですから」と明歌が口を開く。
「守哉君が言うには、犯人はグレネード弾で殺すことに執着を持っているから、直接ゆんちゃんの元に出向いてくる、ということはないらしいです。犯人はきっと犯行後の逃走も考えているっても言っていたから……、きっとこれは私たちを錯乱させるためのものじゃないでしょうか？」
明歌の説明も、爺やは唖然として聞いていた。
「な、なるほど……。な、なら、お嬢様は無事なのですな……？」
「そういうことになりますね」
その一言に、爺やはほっ、と胸を撫で下ろす。そして、真剣な顔

で明歌を見る。

「守哉殿は、行ったのですか」

「……はい」

「そうですか」その意味を悟ったように、爺やはため息を漏らす。

「私は守哉殿がここに来てくれて、本当に良かったと思っています。彼は、とても誠実で、とても素直で、とても……心優しい好青年でした」

「爺や……」

「彼はお嬢様にとっても、私にとっても特別な存在でした」

「ええ。私もです……」

「だから、彼にはもっと生きていて欲しかった。そう、もっと生きていて……！」

爺やの頬には、涙が伝っていた。爺やは「すいません」と言ってハンカチを取り出し、皺の刻まれた頬を伝うそれを拭き取る。

その様子を眺めてから、明歌は小さく微笑んだ。

「爺や、大丈夫ですよ」

「……？　何がですか？」

「守哉君は死んだりしません。根拠とか、そういうものは全く無いですけど……。とにかく、彼がこんなところで死ぬなんて、ありえませんよ」

自分で言っていて恥ずかしくなったのか、明歌は顔を赤くして笑った。

「約束、しましたから」

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その5

5

走りながら、守哉は左手を握り締める。銃をしまい、覆面の男もそれに応えるようにファイティングポーズを取って彼を迎え撃つ。

「らあ！」

守哉はギリギリまで近づいてから、拳を振りかぶる。そしてそれを男の顔面目掛けて放つ。が、男は身を屈めてそれを回避し、守哉の懐へ身を寄せ、肩をねじって、がら空きの左脇に右フックを打ち込む。

「あがっ！」

激痛に守哉は唸るが、それだけで終わらない。男はそのまま守哉の腹に左アッパーを入れ、仰け反った彼の顔面に渾身の右ストレートを叩きこんだ。

守哉の体が右回りに回転しながら崩れ落ちる。

男はそれすらも見逃さない。座点の落ちた守哉の頭に、右膝。これはガードできたものの、その威力に守哉は後ろに倒れこむ。

「どうした！　強いのは威勢だけか！」

「ぐっ……。っせえ！」

守哉は立ち上がり、再び突撃する。

「呆れたぞ！　突っ込むしか能がないのか！」

だんだんと近づく守哉に、男は左ジャブでけん制を図る。だが、それが当たる直前で守哉はしゃがみ、左ジャブの軸足――右足首に蹴りを入れる。

「と、とと……」

とたんに男がバランスを崩す。守哉は残った足にタックルする。突然の事態に、男はろくに受身も取れないまま倒れた。

痛みに身を縮めた男に、守哉は馬乗りになる。

「はあ、はっ。ナメんなよ、これでもなあっ、生きるか死ぬかのサバイバル生活送ってきてんだよっ！　この家に来てからでもある意味なあ！」

そう言って、守哉は左手を強く握って振り下ろす。

「うおおあ！」

だが、男が体を揺らしてバランスが取れないものだから、パンチは一時中断となる。

それを見計らったかのように、男から手が伸びて、守哉の襟首を掴み、それが勢いよく引き寄せられた。

「わっ、わっ！」

そしてそのまま呆気なく地面とキスしてしまう守哉。男は守哉のホールドから抜け出すと、彼の背中を勢いよく蹴った。

「がっ！」

痛みに悶えながら、守哉の体が転がる。その途中、置いてあったアタッシュケースに頭をぶつけてしまった。

しかも不幸なことにその上にあった二リットルのペットボトルが落ちてきて鼻を強打。

「いてえ！　っつか熱うっ！」

真夏の日差しに晒されてすっかり火照ったミネラルウォーターは、予想より遥かに熱く、守哉の鼻を某白髭おじさんのトナカイのように赤く染め上げた。

「あちちちい！」

守哉はもがくが、いつかの『断熱性抜群！　冷え性おさらば毛布クン！』同様に、ペットボトルは顔面から胸、腹へと彼の体をなぞるように移動して、なかなか離れない。なぜか熱い物を引き寄せる磁石体質な守哉君だった。

その様子を、覆面の男は目を細め不思議そうに眺めている。大方、

「こいつは何をしたいんだろう」とか考えているに違いない。

「ちっちち……。あー、酷え目に遭った。……ん？」

やっとのことでキャップを掴んでペットボトルの脅威から逃れた守哉は、立ち上がって未だに持っているそれを見て、その後男の方を向く。

「……。おお！」

突如、守哉の頭上にエクスクラメーションマーク（「！」のこと）が浮上する。

「……？」

男が首を傾げると、守哉は心底意地悪そうな笑みを浮かべる。「げへへ……」とさっきまで感動的な場面を繰り広げてきた人物とは思えない声まで漏らしている。

守哉はペットボトルのフタを開け、自分の足元に放り投げた。横倒しになったペットボトルの口からは当然中の水が溢れ出し、高音のコンクリをじゅう、と冷やしていく。

「……何のつもりだ」

男の質問に、守哉は「まあまあ」と不適に笑う。

「今に分かるぜ、ニグロイド男」

そう言って、守哉は男に向けて左手の中指を突き出す。

彼の言動に反応したわけではないが、男はその挑発に乗り、守哉のほうに走り出す。

（どういう策があるのかは見当つかないが、状況は圧倒的に優勢！負けるはずが無い！）

間合いを詰めた男は濡れた地面を踏みしめ、構える守哉に左ストレートを繰り出す。守哉が右手の銃でそれを叩き落すと、男は一瞬にして重心を変え、右ストレートを守哉の左頬にヒットさせた。これは初発が弱いワンツーなどではない。恐ろしいほどのバランス感覚によって繰り出される逃げ道の無い二段ストレートだ。

これで脳震盪を起こさなかったのは、もはや奇跡と言える。

（こいつ、やっぱ強え……！）

激痛を噛み締めながら、守哉はそう思う。それでも、負けるわけにはいかない。

守哉は伸ばされたまま眼前にある男の右手を左手で掴み、その状態で瞬時に右手を相手の腰に回してベルトを握る。

「らあッ！」

そして右足で相手の左足を勢いよく払うと、男の体は何かに引き寄せられるかのように呆気なく倒れた。

柔道の投技の一つ、「大腰」。

「がふっ！」

できそこないの受身で、半減できない痛み。守哉が腕を持っていてくれたお陰で、頭を打つことは無かった。だが、それでもダメージは大きい。

（足場を濡らしたのは、滑りを良くして、足払いを確実にするためか……！）

そう。男のバランス感覚は相当のものだ。両足を狙われない限り、普通なら投技を喰らってしまうことはまずない。だが、股を大きく開いた状態で重心を前にずらされ、前足を払われてしまえば、物理的に考えても倒れる以外の道は無い。無理にバランスを取ろうとしても足が滑って倒れ、間接を痛める可能性だってある。

男は、目の前にある、未だに水を出し続けるペットボトルを睨んでいた。

「今度こそ袋叩きにしてやらあ！」

叫び、守哉は再び男の体に馬乗りする。そして拳を振り上げる。

「おら……って、あ、あれえ！？」

だが、守哉はすぐにバランスを崩した。男は何もしていない。

男は最初、驚いて目を見開いていたが、瞬時に彼も理解したようである。守哉は判断を誤ったのだ。彼は、男に馬乗りになるべきではなかった。勝つことを第一に考えるなら、関節技や絞技に臨むべきだったのだ。

なぜなら、彼にとっても、この足場は非常にバランスを取りにくい状況なのだから。

だが、大切な人の命を奪おうとした相手への憎しみ、気持ちよく勝ちたいという願望。そういった感情を優先してしまい、彼は失敗してしまった。

「や、やば……」

彼の体が、前のめりになって男の右側に倒れていく。その様子を男は黙って眺めている。大方、その覆面の下では勝ち誇ったような笑顔があるのだろう。彼は、守哉の絶望した顔をじっ、と見ている。

だから、次の瞬間、守哉が凶暴な笑みを浮かべたことさえ、見逃さなかったようだ。

「――ッ！？」

守哉は前のめりに倒れていく。振り上げた拳は、もう男に届く範囲になく、地を殴るような軌道を描いている。その空回りぶりは、策に溺れた人間の末路のようだ。

それなのに、彼は、笑っている。自分が倒れる先を見つめながら、笑っている。

勝ちを悟ったかのような、笑みを、男に見せ付けている。

空を切るその拳が、今、地面を殴る――。

刹那、男の顔に、水が掛かった。

「ぶっ！」

それも一瞬ではなく、途絶えることなく水は彼の顔面に浴びせられる。男は目を閉じているが、何が起こっているのかは分かっているだろう。

守哉の拳が、男の頭の傍にあったペットボトルの容器を殴りつけたのだ。

不幸なことにペットボトルの口は男の顔面を向いていて、押し潰されて行き場のない水は、彼目掛けて噴射するという結果になったのである。

「ご、げほっ！」

覆面越しに飲んだ水が気管に入ったのか、男はもがくようにして、四つん這いでその場を離れる。

彼は覆面を外そうとするが、すっかり水を吸ったそれは頭に密着してなかなか外れない。呼吸もまともに行えない状況だ。

だが、ゆっくり外している余裕を、守哉が与えるはずはない。
立ち上がった守哉は、座って覆面を外そうと蠢いている男に、空になったペットボトルを投げつけた。
男がひるむ。その無防備な体に、守哉は渾身のタックルを決める。
守哉と男の体が吹っ飛び、互いに少しの距離を置いた状態で着地する。
二人は、よろよろと起き上がる。
「へ、へへ。苦しいだろ、それ」
男は何も答えない。いや、守哉の言ったとおり、苦しくてそれどころではないのだ。
そして、それは早期決着を望んでいることも意味している。
「お前、俺に『父親のリストラと自分自身の異常さで家族から捨てられ、心を塞ぎ、人様から金を騙し取って生きていた人間の考えとは思えない』って言ったよな」
一字一句間違えのない台詞だった。
男は黙って頷く。守哉は続ける。
「確かに、俺はそうだった。肉親からは「化け物」や「疫病神」なんて言われて捨てられて、行く当てはあっても、人と接することが

怖くなって、一人で生きようとした。生活費は詐欺を働いて稼いだ。

上でも下でも、飛び出たヤツは弾き出される。だから、自分は世界で要らない人間だと決め付けていた。誰も信じようとは、頼ろうとは、大切だとは思わなかった。自分は社会のゴミなのだから、そう思ってはいけないとも考えてた。

そんな人間だった」

でもな、と守哉は右手の銃を握り締めた。

「こんな人間を必要としてくれる人がいたんだよ。こんな馬鹿野郎を見守ってくれる人がいたんだよ。こんな奴を大切だと、家族だと言ってくれる人がいたんだよ」

握り締めた拳は、震えていた。

「普通じゃねえよな。こんな俺を、愛してくれる人がいたんだよ」

変わらないわけがない、守哉の涙はそう訴えていた。

「……そうか」

だから、それに応えるべく、男も必死に口を動かした。

お互い、それ以上は何も言わなかった。

短い沈黙の後、守哉は涙を拭い、男は呼吸を整え、二人はそれぞれ構えた。両方、体力は残り少ない。次で、全てが決まる。

風が吹き、ペットボトルが空しい音を立てて転がる。

それを合図に、守哉は走り出した。

男は、けん制の左ジャブを放つ。それを頬に受けても、守哉は止まらない。

「らああッ！」

一気にして覆面の男の懐に踏み込んだ守哉は、握り締めた左拳を大きく振りかぶる。

男は右腕と右足を引きつけてガードの体制に入る。が、いつまで経ってもそこを衝撃が襲うことはない。

（……？）

男が気づいた頃には、既に守哉の銃を持った右拳は彼の下顎を捉えていた。

（……っ！　フェイント――……！）

「うらあああああっ！」

銃がトンファーの役割を果たし、その銃身が男の顎を突き上げる。

カパアッ！　という快音と共に、男の体が宙に浮く。

「……がふっ」

そして、男は地面に崩れ落ちた。

しばらく突っ立っていた守哉は、しゃがみ込み、のびている男の襟首を掴んで上体を起こした。

「ぐっ……。殺さないのか」

「こだわって殺す必要はねえだろ」

と言いながらもちゃっかり銃を突きつけている守哉である。

「答えろ。てめえは何であいつの命を狙った」

「君の過去をなぜ知っているかは、聞かないんだな」

「聞くさ。だが、優先順位はこっちが先だ。答えろ」

「ふ……。話に聞いていた通り君は、頭も心も大人のようだな」

「……？」

「だが、あまりにも平和ボケしきっている」

「何言ってんだ？　美少女でもないのに電波なこと言ってるとぶっ放すぞ」

守哉は銃口を男のこめかみに押し付ける。

「甘い、と言っているのだよ。撃ちたければ撃てばいい」

まあ、と男は目を細める。

「私は、この屋敷にはモデルガンしかないということを知っていて、その銃口から出てくるのはプラスチック弾だと思っているがな」

「な……！」

守哉が驚いている余裕もなく、男は咄嗟に懐から拳銃を取り出し、その口を守哉に向ける。呆気にとられて、守哉は一瞬反応が遅れる。

パアン！　と銃声が響く。

「……君には、神の御加護はないようだな」

立ち上がり、銃の引き金を引きつつ、男が表情のない声で言う。

守哉は彼から二メートルほど遠ざかった場所にいた。呼吸は乱れ瞳孔は開き、心臓は生きてきた中で一番激しいビートを刻んでいる。

彼の右頬には血が伝っていた。先ほどの銃弾が掠めた時に軽く切ったのだ。

撃たれた。初めての経験に、「逃げろ」と本能が悲鳴を上げている。

精神を落ち着かせながら、彼は右手に持ったハンドガンを見る。

男の言うとおり、これはモデルガンだ。ハッタリにでも使えるかな、と思って持ってきた、守哉の部屋に置き去りにされていたゆんのモデルガンである。

（撃たれた？　いや違う。今はそれどころじゃない。やつはなぜこれがモデルガンだと分かった？　相手は本物。違う、それは考えるな。俺は完璧にそのことを悟られずにできていたはずだ。ならなぜ？　最初から知っていた？　殺される？　違う！　最初から知っていたなら今までの言動はおかしいんじゃないか？　もう少しで死んでいた。関係ないだろう！　なら相手はなぜ本物を持っている？　違う。関係ない。余計なこと考えるな。時間をロスするな。いやこの時間が無駄じゃないのか？　早く結論を出さないと。撃たれる。なんでモデルガンだと分かった？　殺される。違う！　殺される。コロサレルころされる殺されるコロシころされる殺され――！？）

守哉の思考がぐちゃぐちゃになっていく。本能の、理性への介入により情報が錯綜する。区別ができない。考えるべきことが分からなくなる。分かるべきことを考えられなくなる。

銃を向けられているにも関わらず、守哉は頭を抱えた。モデルガンが、からん、と乾いた音を立てて落ちていく。

守らなきゃならないのに。生きようと誓ったのに。何もできない。何も分からない。

ついに守哉は膝を着いて崩れ落ちた。酷い絶望感と無力感が彼を襲い、ノイローゼのような症状に陥っている。このままいけば、彼という「人間」が崩壊する。

だが、その時、邸内に続く扉が勢いよく開け放たれた。

守哉と男の視線がそこに移る。

そこには、彼らが戦う理由が在った。

「かみやーっ！　ゆんのデザートイーグルを勝手に持ち出したらダメだよお！……って、あれ？　かみやお取り込み中？」

「「うええ――――――――ッ！？」」

守哉と男は同時に叫んだ。

神掛ゆんは、不思議そうに二人を眺めていた。

唖然とする守哉と覆面の男を脇目に、ゆんはトコトコと守哉の元へと歩み寄り、彼の傍らに転がっているモデルガンを手に取った。

「もうっ、まったく……。かみや？　物を借りる時は相手の人にちゃんと許可を取ってから借りないといけないんだよう？」

「ゆん、お前……」

守哉は引きつった笑みを浮かべる。ゆんの登場により、理性はしっかり取り戻したようである。

「むむ？　何かな、ゆんを仲間はずれに銃撃戦ごっこでボロボロのかみや君」

「バカ――ッ！」

ごちん！

「あだ！　い、いったあい！　なにするの！」

「真堂チョップだこのやろう！　ちなみに左手編の方が弱い！」

「じゃあ左手でやってよ！」

「うっせえ！　お前、この状況でよくもまあぬけぬけと出現しやがったなあ！」

「ええ！？　一体どんな状況だったん……」

その時、銃声と共に彼らの間を何かが突き抜けていった。
二人が銃声の方を向くと、二メートル先では覆面の男が銃口を彼らに向けていた。
「……こういう状況なんだ」
「……こういう状況なんだ」
次の瞬間、ゆんが守哉を盾に突き出し、その後、守哉がゆんを盾に突き出した。
「って、えええ！？　か、かみやー！？」
「レディファースト」
「先に死ねって言ってる！？　いやだよ！　映画みたいに庇って死んでよ！」
「お断りだね！　大体あちらさんはお前に用があるんだから、どうにか説得しろ！」
「そんな無茶な……って、え？　ゆんに用がある？　それってもしかして」
「ご想像の通りでございます！」
「えええ！？　じゃあ余計にこの体勢ダメじゃん！」
「うっせえ！　せっかくハッピーエンド目指して努力してたのに、

お前が来た所為で全部水の泡なんだよ！」

「……え。かみや、もしかして、ゆんのために……？」

「そうだよ！　お前を守るために守哉、死に物狂いで奮闘しておりました！」

「そ、そっか。う、嬉しいな……」

顔を赤らめ、幸せそうな笑顔を浮かべるゆんを見て、守哉は「うっ」と唸る。

「う、うっせえ……」

守哉は唇を尖らせながらそう呟くと、ゆんの体を引き寄せて、自分の背中に回した。

「かみや……」

「合図をする。そしたらお前は全力疾走で逃げろ」

「かみやは？」

「突っ込む」

その言葉に、ゆんは目を見開いた。

「そ、そんなのだめだよう！　一緒に逃げよう！」

「相手は本物の銃持ってんだぞ？　二人とも逃げてたら狙い撃ちさ

れて共倒れだよ」

「で、でも！　それじゃ、かみやが……」

「俺のことは心配すんな。あんな奴ソッコーで倒して、お前にすぐ追いつくから」

「ほんと？」

「ほんと」

本当に相手を倒せるんなら、ゆんを逃がす意味がないんだけどな、と守哉は心の内で思う。決して口には出さないが。

そんな彼の考えなど見ず知らず、本気で守哉が敵を倒せると思い込んでいるゆんは守哉の後ろでクラウチングスタートの準備をしていた。今から逃げますよ上等のサインである。

男が、じりじりと距離を詰めてくる。

そのうちの一歩が、守哉にとっての合図になった。

「――――行くぞ！」

守哉とゆんが別々の方向に走り出す。

クラウチングスタートを踏んでいただけ、ゆんの方は速い。宝物（？）のモデルガンを握り締めながら、開いたままの扉へと突き抜けている。

守哉もまた、一直線に突き抜けていた。

（勝算はある！　こいつはゆんの命を狙っている。それならば、ここにきてターゲットをみすみす見逃すわけはない！）

つまり反射的に覆面の男は逃げているゆんに銃を向けるはずだ。付け入る隙はそこしかない、と守哉は腹を括り、拳を握り締めて走る。

「あっ！　かみや、危ない！」

だが、男は最初から守哉に照準を定めていた。

「へ？　っておうわああ！」

銃声が響く。守哉は絶叫しながらバカみたいなポーズで横に飛ぶ。転がりながら、守哉は体勢を立て直し、がばあ！　と起き上がる。

「あ、あ、危ねえ！　なんで俺なんだよバカヤロー！」

守哉は叫ぶが、男はそれを丸っきり無視して、彼に銃口を向ける。

（や、やや、ヤバい！　絶体絶命ってやつですかこの状況は――ッ！）

その時、ちょうど彼の後方を走っていたゆんが停止し、モデルガンを覆面の男に向けた。

「かみや！　伏せて！」

ゆんが引き金を引く。男はそれを気に留めず、守哉に向けて拳銃を突きつけている。

「おい！　それモデルガン……」

ぱあん！

「ぐわああっ！」

コミカルな銃声の後、守哉に銃を向けていた男の体が吹っ飛んだ。

「えええ！？　本物だったの！？」

地に横たわった男は動かない。見る限り出血はないから、防弾装備はしていたのだろう。

それでも唖然とする守哉。彼の隣に並んだゆんは、本物だったデザートイーグルを指でくるくると回しながら言った。

「ふっ。全ては勘よ」

「ここでシックスセンス！？」

「……で、どうするよ。こいつ」

すっかり気絶しきっている男を眺めて、守哉が呆れたような声を漏らした。全く、今までの自分の苦労は一体なんだったのだろう。

自分のことは自分で解決しちゃった大人なゆんちゃんは、その言葉に「むむ～」と唸る。

「とりあえず、縄で縛るとか、覆面を外すとかするんじゃないの？」

そうだな、と頷いて、守哉が男の覆面を外そうと手を伸ばしたその時、

「いてて……。防弾チョッキしててよかったよ～。さすが我が娘、心臓にピンポイント」

「……は？」

目が点になった守哉とゆんはスルーで、男は起き上がり、鬱陶しそうに覆面を地面に脱ぎ捨てた。

出てきたのは、日本国民の大半が記憶しているであろう人物の顔だった。

三十代半ばとは思えない若々しい顔立ちはそこらのアイドルに引けを取らない。綺麗な紅いウルフカットは、コマーシャル出演の時、国民に強い印象を与えた。

「あ、パパ」

国内最大電器メーカー「ノイズ」代表取締役、その名も、神掛総一郎。

「や、元気してたか？　ゆん」

「ゆ、ゆんの父親あ！？」

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その6

6

「ドッキリぃ！？」

神掛家のダイニング、ゆんの隣に座っていた湿布だらけの守哉は、身を乗り出して叫んだ。いや、守哉だけではない。明歌、爺や、脳木もまた、声にならない叫びを上げていた。ゆんと料理長は、このドッキリにより彼らがどんなストーリーを繰り広げたのかを知らないので、きょとんとした顔でテーブルの上の料理をつついている。

テーブルの一番奥、いつもはゆんの特等席となっている席に座っている総一郎は、ミートソースのパスタをちゅるちゅると吸った後、いやあ、と頭をぽりぽりと掻く。

「普通に帰ってくるのって～、なんかいやじゃん？」

「オヤジのくせに若者語！　ってそれどころじゃない！　ドッキリにしても限度ってモンがあんだろうが！」

「限度？　はっ！　僕の辞書にそんな言葉は載ってないね！」

とりあえず守哉は総一郎に空になったコップを投げつけた。使用人の明歌と爺やは壮絶な表情を浮かべる。

「あだあ！　なにをする！」
「うっせえ！　頭かち割って脳みそにその単語、刻んでやろうか！」
「グロっ！　食欲が失せちゃうじゃないか！」
「もっと言ってやるから飢えて死ね！」
「ああっ！　酷い！」
次々と繰り出される守哉の猛攻に耐えられなくなった総一郎は、守哉を挟んだところに座っているゆんに「ゆん～」と泣きながら助けを求める。
父親を助けようと、ゆんは慌てて助け舟を出そうと考える。
「え、え～と。かみや？　そういうの、えと、負け犬の遠吠えって言うんだよ？」
「うぐう！　なんでお前はこういう時だけ適材適所ついてくるんだ！」
がーん、と後ずさる守哉に、総一郎は不敵な笑みを溢す。
「ふっふっふ～。これが親子の力なのだよ、守哉君」
「ちくしょう……！　俺は、神掛一族を甘く見ていた……っ」
うな垂れる守哉に、バツが悪くなったゆんは「かみや、元気出して」と慰めてくれた。

「ううっ。ゆん、ありがとお……」

その優しさに、守哉は癒される。守哉の向かいの席で明歌が「ゆんちゃん、ムチと飴の使い方を極めてる……！」とか言って驚愕していたが、守哉には聞こえなかった。

それにしても、と爺やが口を開いた。

「お忙しい中、なぜわざわざ帰ってこられたのですか」

「ん？　ああ、それね」

総一郎はリンゴジュースをすする。

「だって、今日、家庭訪問の日だろ？」

「え……？　なにそれ？」

質問をしたのは守哉だった。その言葉に、ん、と脳木がホットココアを飲む手を止める。

「真堂、知らなかったのか～？　今日は可愛い子ちゃんの面談の日だぞ～？」

「え、いや、……初耳」

そう思えば、脳木はここに来た時、「前もって連絡していた」とか言っていた気がする。

「でも、可愛い子ちゃんの保護者として応対するのは使用人の方だって聞いてたけどな～」

「私です」と爺やが答える。

「今日、ご主人が帰ってくるとは、何も知りませんでした」

それを聞いて、総一郎は可愛らしい悪戯な笑みを浮かべる。

「そりゃそうだよー。帰ってくるって言ってたら、ドッキリの犯人が僕だって分かっちゃうだろ？　つまんないじゃないか～」

ピシッ、と守哉、明歌、爺や、脳木のこめかみから何かが切れる音がした。彼らはテーブルの下で握り締めた拳を出してしまわないよう必死に耐える。

そんな彼らの我慢など知らず、パフェのチョコを頬につけたゆんは、総一郎に天使のような笑顔を向ける。

「うん、すっごい面白かったし、すんごい楽しかったよ、パパ」

「あへえん。やっぱゆんは可愛いな～。パパ張り切った甲斐があったよ」

「……この屋敷って、まともな人間いねえな」

その言葉に、明歌がピタッ、と箸を止める。

「守哉君ひどい！　神掛親子や他の使用人、守哉君は異常ですけど、私は普通ですよ！」

「そういう人に限って、変人なんすよ。ヤギちゃん」

「うわあ！　守哉君にその名前で呼ばれると無性に腹が立つう！」

うがー！　と悶える明歌を脇目に、守哉は席を立った。

「あれ？　かみや、どこに行くの？」

「散歩。いろいろあって気疲れしてっから、気分転換してくるわ」

「あ、じゃあ、ゆんも……」

「だーめ。お前は今から面談だろ？　童顔教師としっかり将来について語り合って来い」

「むむ……わかったよう。なずきんとどうしたら宇宙人とテレパシーできるか考えてくる」

「お前は将来何になるつもり！？」

「ウエハースチョコ職人！」

「あ……そ」

付き合ってられない、と守哉は歩き出す。

「あ、守哉君」

総一郎に呼ばれて、守哉は面倒臭そうに振り返る。

「なんすか？　覆面社長」

「う、トゲがあるね……。と、とにかく、すまなかったな」

守哉は頬の湿布を撫でる。

「いいっすよ。別に」

「いや、そっちじゃないんだ」

総一郎は右手の親指をつき立てて、左胸を指した。

その意図を汲み取ったのか、守哉は苦笑いを浮かべ、きびすを返して歩き出した。

「やはり、君は頭がいいな」

総一郎の声が背中に掛かる。守哉は何かを放り投げるように手を振った。

「さて！　では、可愛い子ちゃんの今後について考えていこうか～

！」

神掛家の応対室のような場所で、脳木が向かい合って座る神掛家親子にそう言い放つ。

「ほーい！」

「ほーい！」

「……お父さんもノリノリですね」

「そりゃあ、ゆんだけのための話し合いですもの！　乗るに乗っちゃいますよ！」

今の総一郎に、大手企業の社長とか、大富豪の主人とか、そういう風格は微塵もない。ただの親バカである。

「で！　で！　まずは何から話します！？　童顔先生！」

「ど、童顔は余計です！　ええと、可愛い子ちゃん、もとい「神掛ゆん」さんの学校生活について話しましょう～」

「なるほど！　ゆんの学校生活ですか！」

「は、はい。……んと、可愛い子ちゃんの学校生活は、大して問題は見当たらなく、有意義に過ごしていると思えます～。たまに、はしゃぎ過ぎるとこもあるかと～」

「ふむふむ」

「では次に……」

「ちょちょちょ、ちょっと！　それだけですか！？」

「え、え？　そ、それだけって」

「もっとこう……、親には見せない一面とか、恋愛の事とか」

「そういうのは子供の自主性に任せましょう～」

「ええ～！　知りたかったあ～！」

「ええい！　娘の前で駄々をこねるのはおやめください！」

「むむむ～。なずきん、ゆんも話に入れてよう」

「おお！　ゆん、すまなかった！　ゆんも一緒に話そうな～」

「ぐぐぐ……！　これは他の誰よりも進行が困難な面談になりそうだ～！」

「まあ、童顔先生。そんなに気背負いしないで」

「うわああん！　なんか慰められた～！」

これでは埒が明かない。そう直感した脳木は、会話の方向性を変えようと考える。

「そ、そういえば、お父さん」

「んん？　何ですか？」

「今回のドッキリ、あいつを試したんでしょう？」

総一郎の動きが止まる。そして、真剣な顔を向ける脳木に、小さく微笑んだ。

「彼だけではなく、あなたも頭が良いですね」

「ではやっぱり……」

いきなりテンションの下がった空気に、ゆんは「何のこと？」ときょろきょろしている。

「仕事柄、彼のことは昔から知っていました。「ＩＱ１６０超の少年」、「希代の天才児」と呼ばれ、重宝された存在。そんな彼が、自分の家に居候すると聞いて、興味が湧き、私は彼の過去を調べ上げました」

脳木の顔が曇る。

「あいつは……酷いくらい辛い過去を背負っていた」

「そう」と総一郎は続ける。

「でも、だからこそ、僕は、彼がゆんと接することで変わっていけると思ったんですよ」

総一郎と脳木は、未だに疑問符を頭上に飛ばし続けるゆんを見る。話についていけてない彼女は二人に見つめられて「え？　なになに？」といった顔をしていた。

「それを今日、確認したんですか」

脳木の言葉に、総一郎は黙って頷く。

「頭の良い童顔先生なら、その結果がどういうものだったか、分かるはずですよね」

総一郎は、隣に座るゆんの頭を撫でた。

きょとんとしているゆんを見て、脳木は「ええ」と微笑んだ。

「それでは、可愛い子ちゃんの学習面の話に移りますが……」

「あ、それは詰まらなそうですから、ゆんの魅力を語り合いましょう！　小一時間ほど！」

……シリアスモード作戦、失敗。

最終章　真堂守哉と神掛ゆんと奮闘記（後編）その7

7

守哉は神掛家から出て、夕空の下、都内の大通りを歩いていた。

一月前、自分はここで生活していた。人を騙して、逃げて、騙して、逃げて。そんなことを繰り返す毎日だった。

あの時の自分は、何も守るものがなかったと思う。だから、ない物があれば他から奪い、逃げた。でもその途中で落としてしまうから、また奪う。

彼は目を伏せて歩みを進めた。

歩いていると、茜音学園の前に来た。休日だと言うのに、学園内からは運動部の掛け声、ブラスの音が響いてくる。たまに教師の授業を進める声も混じっている。

通っていた時の自分も含め、ここの生徒達は、どういう思いを抱いてこの学園にいるのだろう。皆、競走と優越しかないこの場に、居場所はあったのだろうか。将来有望な人材になるために通うこの場所で、「今」を楽しむためのものは、あるのだろうか。もしかすると、自分を蔑んだ生徒達は、それを作りたかったのかもしれない。

哀しいな、と思い、守哉はそこを後にした。

ずっと歩いていると、ある店が守哉の目に止まった。

それは、ある女の子と、初めて出会ったファーストフード店だった。

ここから、自分の人生は変わった。

そこから、自分は変わり始めた。

守哉はその入り口に立ってみる。手動式のドアの手前には、あの夜、毛布に包まった女の子がいた。

それは天使のような笑顔の女の子で、守哉に生きる意味を与えてくれた存在だった。

守哉はとても彼女に感謝している。普通でないことを幸せだと思わせてくれた彼女には、どんなことをしても返しきれない貸しがある。

そんなことを思っていると、ふいに入り口の扉が開き、怪訝な顔をしたウエイトレスの女性が出てきた。

「あ、あの……お客様、ですか？」

「あ、ああ。すいません。違います」

守哉は頭を下げ、その場から離れようと振り返った。

「……あ」

なぜかそこには、天使のような笑顔の少女がいた。

「かーみや。やっと見つけたよ」

「ゆ、ゆん、お前、なんでここに？」

呆気にとられている守哉を見て、ゆんはくすっ、と微笑み、

「かみやと晩御飯、一緒に食べたくて、探してたんだよう？」

「ここにいると思った」と言って、守哉に歩み寄った。

「ね、かみや。ここで食べよ？」

「え、ああ、うん」

ゆんは守哉の手を取り、まだ入り口から顔を覗かせていたウエイトレスに「二名様入りまーす！」と手を上げる。

「なあ、ゆん」

店の中を進みながら、守哉は言う。

「何かな？」

「俺、普通じゃなくていいと思うかな」

「？　どうしたの？」

「俺、幸せになっていいのかな？」

守哉の問いに、「むむ～」と唸ったゆんは、また笑顔で守哉と向き合った。

「難しいことは分からないけど、そういうのって、深く考え込まなくていいと思うよ？」

「……そう、かな」

「そうだよ。直感に任せればいいんだよ。そしたらきっと、答えなんて、あっちから来てくれたりするものだからっ！」

「……っ！」

ゆんは人差し指を突き立てて、意味不明に得意げな顔を浮かべていた。

「そうだな。そう、だよな」

彼女の結論は、とても無責任な台詞だったが、なぜか守哉は納得できていた。

守哉が微笑むと、彼女は「うん！」と力強く応えてくれた。

「よし！　スッキリした！　ようし、今日は俺のおごりだぜ！」

「わあ！　やったあ！　かみや、よこっぱらあ！」

太っ腹、と言いたかったのだろうか。

「へっへー、財布のことなんて忘れて、食いまくるぜえ……！」

「むむう！　ゆんだって負けないよ！　不況パフェおかわりしまくるもん！」

「ごめんなさい！　もう二度と「財布のこと忘れる」とか言わないからそれだけは許してえ！」

笑い、はしゃぎながら、二人は歩く。

そうだ。普通とか特別とか、区別して考えることじゃなかったんだ。幸せとか不幸せなんて、考えて分かることじゃなかったんだ。

守哉の頭の中では、今では昔、クイズ大会にてゆんが言ったあの言葉がリフレインしていた。

『どんなに難しい問題にも、必ず答えはあるんだよ！　だからそれを勘で当てれば良いわけ！　答えなんて電波が運んできてくれたりするものだよ！』

全くだ。守哉は笑った。

答えは、いつだって、頭ではなく、心が教えてくれていたから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5835k/

神掛ゆんのビビビ！

2010年10月9日21時13分発行